三應聲中氣吐霓、本生孃已入泥犁、恐渠罪藉案イ無人證、六萬餘言手自題、

〔雪村和尚語錄〕坤　予於癸酉（元弘三年）歲中秋與瞶庵同止洛西、時山雨不歇、至夜半興味清甚、偶作敲字韵、欵窓呼睡乞賡和、即見佳句相酬、如春蠶之吐絲、無短綴之態、爾後廢忘兩不相記、今年秋瞶庵亦來見訪、月夕登樓、慨連秋之陰雨、誦前作爲證、而喜如許晴霽難値、因復追和一篇、添助良辰之清供云爾、

諸禪僧ト交遊

吟成瘦島與寒郊、篆刻雕蟲或見嘲、蚌殼探珠無經寸、蟾宮攀桂有高梢、故人形影能相逐、明月東西不暫抛、憶昔山庵風雨夜、隣窓跋燭遣時敲、

辛巳（暦應四年）歲孟春十有二日、乃立春村僧就大龍庵、與艮岩夜話、偶興而書拙語、以記歲月云、

老來自減筆精神、勉强開牋拂硯塵、節賞灯宵期後日、灰飛葭管報初春、暖吹嚼屋氷牙落、病怯堆盤菜甲新、多謝艮岩耐岑寂、大龍庵裡伴村人、

正澄ニ隨逐ス

建武（元年）甲戌之春二月、予從東山清拙（正澄）和尚同憩壽福石梁（仁恭）和尚所寓之室、聽彼清水、山林秀麗、城郭繁華、太興動于中、不能緘默也、已而清拙和尚援毫成長句、優贍雅正、讀之令人精爽如有神助、故不免狗尾續貂、以記一時之勝踐云耳、

洛陽山水濃潑潑、洛陽城闕開鏡面、聳臺西障軟紅塵、中有岩泉飛疋練、高低華構逐山形、巍然勝彼靈光殿、年深像設觸香烟、水清無處無月現、憧々來往日繼宵、俗駕不憚山靈譴、野人遊覽初偶然、避禍迎祥非所願、散策尋幽二月春、鶯啼烟柳花開徧、幡幢羅影吼蒲牢、眼耳得之無不善、人間萬事等觀山、風雨晦冥朝夕變、請從變處極登臨、雨脚如猿尚輕便、禪居妙語泄天機、我恐六丁驅雷電、頗君摹寫入堅珉、與山不磨鎮京甸、

暦應三季冬初、龜年來金華聚首、無何言旋舊里、省親、興不可遏、信筆以餞、資再會之談柄云爾、

金華山色非人間、曾到者知艱難、上人湖海飽參請、何能訪我凌絶頂、蒲團對坐夜堂虛、栢篆横烟春晝永、吹毛在握兮將報不平、明珠絶類兮不換連城、善賈不沽世知貴、靈鋒未觸人傷生、欲行便行止便止、聚散落々如雲水、洛城老母倚門思、織屨高風今望子、出門無罵雪村々、賺人走斷麻鞋跟、

建武元年十一月豐城尚未有雪、九日寅時天始降雪、因而作長句以慶云、社中諸友希同擊節云爾、

海山冬仲未見雪、朔風時復吹石裂、一宵風靜有微聲、窓外庭除明似月、固應滕六犯寒來、試手巧剪氷花開、萬象横陳粲一咲、虛空作舞催三臺、普賢闔戸推不去、文殊回轅挽不住、一色明邊愁殺人、禪和須解轉身句、君不見少室峯前經九白、斷臂方接安心客、又不見鰲

山店上不眠僧、今日成道吾難憑、乾坤清氣清一合、淨地何容添搤捽、平明忽爾捲癡雲、萬里清天風颯々、

支遁ノ人トタリヲ景慕ス

予閲僧史、極愛支遁之爲人、百世之下想像風標、則可以蛻骨塵埃之表、而健美不忘、一日偶與賢姪遁藏主清話及此、就勉以道林爲別稱、因作數句陳其說焉耳、

支姓遁其名、道林僧中俊、墳典究西乾、風標立東晉、才華秀且清、智辯淵而澹、道樞已契環、理窟頗游刃、晚陰沃州山、門墻容數仞、激世之頹波、爲道之藩鎮、放鶴志沖天、習俗時賞駿、任法不自輕、非賢奚與進、許詢嘗款門、降歎機鋒迅、祇園留耿光、緇眼挹芳潤、阿遁京洛英、妙季敭除儁、尙友千載人、氣節攀高峻、名字雅相同、豈不能慕藺、惟名聖所公、晞之則皆舜、勿鄙義學師、勿託單傳胤、共泝一眞源、誰昧心地印、器量貴圓融、機緣宜穩順、歛水咲分河、徒以名相徇、韙哉犖々材、宛爾堂々陣、德馨天人欽、行篤魔外信、愧我乏開道、憑君發蒙吝、季運昏蟄多、法雷當大振、嘗著雍攝提格夾鐘下澣、泚毫于金華之寓軒、

赤松則村ニ景慕セラル

〔翰林葫蘆文集〕四　散說

初月潭（赤松則村）微時、與寶覺禪師邂逅途中、禪師好相人、見月潭狀貌、謂之曰、必貴、月潭乃謝曰、誠如師言、不敢忘德、及其貴、不知禪師處、是時禪師年尙壯、懷南遊求法之志、附海舶入大宋、留者二十年、月潭慕禪師德、以待其東歸、然而年久不可記其面、故路置且過堂、問僧往來、果得禪師、於是瓣法雲寺、敦請禪師爲開山始祖、其後自天建寶林寺、追崇禪師、復爲之開山祖、皆謂因緣不淺矣、（赤松則祐）

疎石ニ推重セラル

〔臥雲日件錄〕

寛正四年五月四日、前臨川元宗緒西堂來、茶話之次、及善入祖師之事、緒曰、壯年有入唐之志、將與古劍等同行、然開山（疎石）留之、曰、從到大邦、不可得過我之師云云、故不果其志、後雪村飯朝開山令行侍之、向日不令入唐、然欲知方事、當就雪村而學之、

〔大龍雜記〕

大有和尙摩訶師子吼集云、余嘗撰雪村行記、遺落大元趙孟頫子昂詩一篇事、其詩云、贈翠微二十五長老、傳者其詞翰俱柳集鐵爐步耳、祖師廿五歲住長安翠微、又鄉友善住壽山上人、余少年雲堂上下間直堂時曰、虎關和尙對雪村、語及此事、嗤笑云、月江印公十做長老、在人不在寺、二老相共一咲、皆一時談柄耳、此一事探索祖師行迹、詳考之、年所前後相違者、疑故記中不重筆、

右此一事、予嘗問之大龍菴英甫養公首座、々々寫師子吼集所載以爲賜、前所記者是也、先是予就清住院乾中亨和尙借岷峨集、因質之、其所言蓋與英甫同、無疑也、又嘗桂林昌和尙話次及之曰、趙公子昂嘗以李邕墨賜之雪村和尙、公題其所襲紙曰、贈翠微二十五長老云々、又天隱（龍澤）和尙有異說、偶忘其義、予謂二師所說亦是柳集鐵爐步歟、然桂林所言近于此記所載、但欠趙公題墨紙之一事耳、

黄梅七百高僧、翠微廿五長老、江西小師カク藏主疏語、東山視篆時云行也、

建仁大龍雪村十八年入元、求法、元人以為倭賊、捕之將斬之、村徐而乞紙筆、吏意以為供狀授之、村以佛光所謂乾坤丶丶春風二十八字、為韵、立作頌廿八首、詞語不亂、字畫有法、元人見而大奇之曰、求法之人也、扶而去之、後住翠微寺、時年廿五云々、

元人雪村ヲ倭賊トナシテ殺サントス

〔禪林僧傳〕六〇林家本　前南禪弘宗定智禪師蘭洲和尚塔銘、

次年（貞和二年）寶覺入寂、建大龍菴、左（足利直義）武衛將軍古山施地於寺之左、下略上

〔扶桑五山記〕四山城州東山建仁禪寺　諸塔　一山派大龍菴　雪村禾上、

塔

〔日本禪林諸師賜號〕大元特賜本朝勅諡　寶覺眞空禪師　雪村友梅

勅諡號

〔雪村和尚語錄〕乾佛祖贊　自贊

似則打殺白拈賊、不似燒却赤肉團、掘盡金華埋不得、薰天臭氣絶遮欄、

儞不是我、胸中萬事都包裹、我不是儞、描來五彩絶倫比、儞非儞兮我非我、誰向虛空安耳朶、我自我兮儞自儞、因地而倒因地起、若有燒香供養他、和身帶累却我魔、性元居士看方便、不是村僧要口多、

自贊

〔無規矩〕上之下眞讃　寶覺禪師

雪致ノ贊

踰漠遊方、究玄微旨、暮年罷參、東歸故里、眼飽二浙晴嵐、衣染五湖春水、屢應檀命、宴坐六處道場、直指人心、截斷群生、葛藟四海一禪翁、主臣咸仰止、至其廣大三昧之門、入皆瞠若乎後矣、

孤錫南詢三十伏臘、普謁知識門、決了一心法、還鄉六坐道場、開關勘驗諸衲、雙眉底兮擁二浙兩淮、片舌頭兮漲九江三峽、縱橫妙用徧河沙、四衆趨風來雜遝、大龍驤處雨滂沱、山川草木齊霑洽、

著述

〔日本禪林撰述書目〕雪村錄　雪村友梅

〔岷峨集〕元朝勅諡寶覺眞空禪師前住大元京兆翠微寺、後住日本京城東山建仁禪寺雪村大和尚述

玄賢岷峨集跋

〔雪村和尚岷峨集緒〕

古者云、文章之見重於世、以其人也、苟非其人、雖美而傳反以為病矣、雪村梅和尚妙年南遊、聲華四出、一時宗匠盛稱其才、元主時疑殊域之僧必有異志、再三考訊、其遭鍛錬尤慘于善財童子、參無厭足王也、奈師人法兩空、非可威屈、於是免三尺劍於四句偈、名稱普聞、而後竄于西蜀、付死生之事於浮漚、奪岷峨之秀於吟嘯、既而放還留長安、暨文宗卽位、命開法於翠微、不忘覺城東際一香為一山國師拈出、趙文敏公贈詩稱翠微二十五長老、非

趙文敏詩ヲ贈ル

母ニ孝ヲ盡ス

聯鑣老成雋秀孰能使、然哉、文宗賜、號曰寶覺眞空、居無、何而歸本朝、奉母盡孝、雖米山亦不、過、是歟、孝先乎百行、餘可推而知焉、故王臣欽其風、屢以名藍延之、而創刹爲祖者亦多、皆有語錄、獨蜀中吟藁號岷峨集、今萬年東堂天啓仗公卽其派下麟角也、將刊此集、以永其傳、徵弁言於余、々曰、鄭衞易淫、雅頌難作、哿哉有此舉、聞昔湛堂悟文章於出師表、古人所貴者貴其眞、少陵號稱詩史、其過人在誠實耳、況衲僧家奚可競浮浪之艶邪、此集乃禪師所履眞實受用境界、言々契理、句々絕俗、蓋以道德內充、故發於詞翰、而自然光華、非用力於騷雅也、禪師縱辯才於談笑、寄虛懷於冥莫、此集特太山之一毫芒耳、學者正可取益於毫芒、蓋言心聲也、師之心在焉、循聲而得心、忘心而得法、必有其時、蓋有人奇而才拙、亦有才奇而人鄙、顧禪師人與才俱奇、其可不重乎哉、爲之序而不辭也、

岷峨集

元祿癸酉（六年）孟冬日南禪退衲英中玄賢書于濟北室中、

法系

〔佛祖宗派綱要〕 揚岐方會

南禪山一寧——建仁雪村友梅——
- 萬壽庵正良因——萬壽別無思齊
- 南禪峯秀宗新——圓覺大拳良倫（○圓覺ハ南禪ノ誤ナルベシ、）
- 南禪岳靈宗古——南禪岳林聖嶚
- 南禪洲蘭良芳
- 萬壽堂要良樞
- 寶林山魯周良——南禪延用宗器
- 相國雲溪支山
- 天龍之器令籃
- 南禪太清宗渭
- 禪興同大啓同——建仁南堂良偕

〔師守記〕 七

三月六日（貞和三年）、己酉、今夜禪師號宣下也、上郷權大納言藤原長定卿、奉行職事藏人治部少輔兼綱權少外記利顯、右大史盛宣、（兼少內記中務丞、）勅書被下中務丞盛宣、禪師號勅書

勅、靈山之花春馥、（示）樂以迦葉破顏、少林之雪冬寒、參以惠可得髓、直指人心之旨斯著、不立文字之宗聿宣、爰雪村友梅和尙者、扇宗風於宋地、灑法雨於本朝、在向上兮叩（機）棧關、面壁年舊、遊敎外兮酌流派、心源水閑、四海因茲歸彼高德、一朝爲之增其寵光、誠是僧林之杞梓、禪門之棟梁也、將垂褒章、宜加崇號、諡曰寶覺眞空禪師、

諡號勅書

寶覺眞空禪師ト諡ス

貞和三年三月六日建仁前長老事也、去年入滅、

〔參考〕

〔越後名寄〕三十二人倫　僧友梅　白鳥ノ郷ノ人也、源氏ノ族一宮氏ノ子ナリ○下略

〔越後野志〕二十人物　友梅禪師　僧友梅者蒲原郡白鳥村之人、源姓一宮氏某之子也○下略

一宮氏ノ子トノ説　蒲原郡白鳥ノ人

〔北越詩話〕一　釋友梅　○上略　予嘗て謂ふ、五山の文學を論ずるもの、率ね一山を以て祖と爲す、而して雪村は一山の高足なり、是時、弘安の役を距る未だ遠からず、緇流の道を海外に問ふもの中絶す、雪村の奮うて元に入りしより、南遊の路再び通し、寂室中巖周及等、一時の英豪、陸續踵を接し、或は洛閩の經説を齎し、或は蘇黄の詩文を傳へ、竟に五山叢林の聲價をして四海に高からしめ、文學の盛前古比なしと稱せらるゝに至れり、然らは則ち一山之を開けりと雖も、雪村紹述の功亦大なり、著岷峨集二卷あり、乃ち在元中の諸作を輯錄せるもの、風調氣格、自ら元人に逼る、五山叢林中に在りては、當に絶海の蕉堅稿と雙璧に推すべし、義堂の空華集以下は、皆な其匹に非ず、○下略

元ニ在リテ母ヲ懐フ

正平二年丁亥　紀元二千七年　北朝貞和三年

三月小　甲辰朔盡

十一日、甲寅、色部長倫、其所領越後小泉莊色部條ノ地頭職ヲ孫福童丸等ニ讓ル、

〔色部文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

讓與

越後國小泉莊（岩船郡）色部條内浦地頭職事、

合田參千束苅者　つほつけ在家別帋在之、神田堂田八千八百束苅惣領之、田除之、

右於所者、法名淨秀重代相傳之所領也、然孫子福童丸に田三千束苅、在家三間所讓渡也、子息孫五郎惣領たる間、田壹萬束苅、在家等所渡也、太郎二郎には、田伍千苅、在家等所讓也、嫡女子石黑御前には、田千貳百束苅、在家壹宇所宛給也、次女黑鶴御前には田千六百束苅、在家壹宇所讓也、末子秀狀房に、田千四百束苅、在家壹宇宛給者也、於山野（並カ）に河も可爲入合、若子息男女之間に無子孫於仁者、兄弟之中に志あらん仁に可讓之、全他人に不可讓、御年貢伍貫文並於御公事者、惣領之配分にまかせて、無懈怠可令勤仕也、此上いらんわつらひ申やから出來は、不孝の子たるべき者也、仍爲後日讓狀如件、

孫五郎　太郎二郎　石黑御前　黑鶴御前　秀狀房　他人ニ讓ルベカラス　年貢並ニ公事ヲ怠ルヘカラズ

貞和三丁亥年三月十一日

（色部長倫）法名淨秀

石黒御前江長倫公より譲玉フ田坪付證文ノ寫、

石黒御前の田のつほつけの事、

あら次郎之作　四百かり

ほそ田　四百かり

さかひのけん平次郎作　二百かり

ふん五郎かいり　二百かり

已上千二百かり

なつわりところ

石黒御前ニ譲レル領地及ビ屋敷

四至

與一郎がやしきのをのしろともに、東は西あみたふ(阿彌陀佛カ)の西のくねをかきる、西は九郎平内入道か七十かりの東のくろをさかふて、山もとへとほす、南は大みち、

さひけは五郎次良　源内入道かやしき

三日市の五良次良かやしきよりうしろ(マヽ)のくうのちともに屋敷は

照明寺の東は志田のやしき姉妹一處にちうすべし、

法名淨秀御判形

貞和三丁亥年三月十一日

二十九日、壬申、北朝縣召除目、菅原在益ヲ越後大掾ト爲ス、

〔園太暦〕八　除目事　廿九日、天晴、今日除目入眼也、

越後大掾菅原在益　文章得業生、

十一月　大盡　己亥朔

十六日、甲寅、幕府、越後居多神社社主花崎盛光ヲシテ、頸城郡田井保三分二ヲ知行セシメ、社殿ヲ修造セシム、

〔居多神社文書〕○越後

越後國一宮居多社神主花崎介盛光申、當社修造事、今月八日國宣遣之、爲半分料所、以頸城郡田井保(中頸城郡板倉村)參分貳、造畢之程被宛行盛光云々、早任被仰下之旨、守先例全知行、可終漸々功之由、可被相觸之狀如件、

貞和參年十一月十六日　沙彌(花押)

留守所

〔花前家系譜及古書類寫〕

社務十七代(花前)憲資―同彦次郎、

社務十八代盛光―同孫次郎介、

擬ノ介、

貞和三年上洛、而將軍尊氏公江居多神社造營之事奉願處、國宣奉頂戴、鎌倉管領(足利)義詮公可奉言上旨蒙嚴命、則關東ニ下リ奉納國宣、頸城郡田井保參分貳造事程(畢)、盛光宛行之旨、御書物奉頂戴、同年御造立事始、大神門南高地工引、此神門自大古在濱(マヽ)社中ニ入、歳々風波ニ而山拔崩故、其所替ル、自古神門之地替ル事非容易、因而社中ニ御手洗御橋二三之鳥居造立、于時社務居家ヲ替ル、

社務十九代景盛同孫次郎介得丸、

神門ノ位置替ル

〔附錄〕

〔居多神社文書〕○越後

居多社事　越後國一宮

越後一宮

嵯峨天皇弘仁四年七月壬申、奉授越後國頸城郡無位居多神從五位下、清和天皇貞觀三年八月三日甲辰、越後國從五位上居多神、授從四位上、

從五位下

從五位上

從四位上

已上弘安九年十一月五日依彼社祠官□□長氏盛命所見之至、且注出之候、

正四位下源朝臣(花押)

如此神事爲當家存知事、雖有面々口傳、未拜其職、所注出頗憚存者也、然而神不享非禮、所存□□何有過之、(花押)

正平三年戊子　紀元二千八百年　北朝貞和四年

五月大丁酉朔盡

十七日癸丑、直義、越後和田茂實ノ子福一丸ニ、奥山莊北條並ニ高野條水無村等ノ地頭職ヲ安堵セシム、

〔讀史堂古文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏　(直義)華押

下　三浦和田福一丸

可令早領知越後國奥山庄(北蒲原郡)北條内章連跡、並高野條内水無村等地頭職事、

章連跡

右任父茂實貞和三年八月十七日讓狀、可令領掌之狀如件、

貞和四年五月十七日

七月小丙申朔盡

八日癸卯、尊氏、佐渡本間有直ニ令シ、足利直冬ニ屬シテ、紀伊ノ南軍ヲ擊タシム、

〔佐渡志〕官員

紀伊國凶徒退治事、就院宣所差遣左兵衛佐(足利直冬)也、早可發向之狀如件、

南朝正平三年　北朝貞和四年八月六日

貞和四年七月八日

本間山城六郎殿（有直）

〔参考〕

〔佐渡本間系圖〕　泰宣山城兵衛尉、

賴秀左衛門尉、

秀直山城九郎左衛門尉、

有直山城六郎、貞和四年七月、爲二紀伊國凶賊討手一發向、

有直

八月大乙丑盡朔

六日庚午、山城賀茂社上棟ニツキテ、其社領越後石河莊等ヨリ、酒ヲ進メシム、

〔賀茂社諸國神戶記〕坤

在判

來八日御上棟、道々輩料可二進一酒庄郷事、

石河（南蒲原郡）他庄略レ之、本文見二于長洲庄下一、　六件本

右件酒當日早旦可二進一社領一之狀、所二廻如一件、

判

貞和四年八月六日

南朝後村上天皇　北朝崇光天皇

正平四年己丑　紀元二千九年　北朝貞和五年

正月小癸巳朔盡

五日丁酉、北朝叙位、越後權守大炊御門家信ヲ正三位ニ叙ス、

左中將越後權守、正月五日叙二正三位一、

〔公卿補任〕貞和五年　參議從三位藤家信（大炊御門）

○家信、越後權守ト爲ルコト明カナラズ、本書、貞和四年、家信ノ條ニ、三月廿日兼二越前權守一トアリ、六年ノ條ニハ何等ノ記事ナシ、姑ク疑ヲ存ス、

二月大壬戌朔盡

十五日丙子、北朝除目、文章生惟宗光宅ヲ越後掾ト爲ス、

〔園太曆〕十三　除目事　二月十六日、天晴、除目、今日申刻許陣儀了云々、聞書到來續之、

越後掾惟宗光宅文章生、

三月小壬辰朔盡

是月、佐渡本間季有、同有直ノ知行分年貢ヲ幕府ニ注進ス、

〔佐渡志〕田土

注進

佐渡國高家村本間山城(有直)六郎知行分御年貢進上之事、

高家村

一關東御代　漆貫文　如此之地也、

一吉良殿御代　拾貫文　始加增訖、

此内所濟分、

一伍貫文　於國本貞泰・賴直方貞和四年四月一日請取在之、

一參貫文　於國所海老名四郎左衞門尉方同年六月十三日、請取在之、

一壹貫文　當納所方同年十二月廿六日、御請取在之、

一壹貫文　同所十一月廿四日同前、

以上拾貫文、

右給解之狀如件、

貞和五年三月　日

十貫文

〔參考〕

(本間)源季有

系圖

〔佐渡本間系圖〕有直山城六郎、

季有山城弘二郎、貞治五年六月讓受濱屋保舟代保内上村長江村、

八月大己丑朔盡

十六日、甲辰、北朝、延暦寺衆徒、山門兒童ノ殺害ヲ怒リテ之ヲ訴フ、是日、其關係者大江景實ヲ佐渡ニ流ス、其他配流差アリ、

〔園太暦〕○柳原伯爵家本　忠嗣　貞和五年八月十七日、天晴、或云、今曉寅刻、實尊僧正以下配流事被宣下、上卿松殿中納言云々、是兒童殺害之由、山門訴申故云々、僧正周防、高眞律師、伊興、覺承法眼、常陸、大江景實佐渡、等云々、此事日來有縱横趣、門主大王結構、爲沒倒門室云々、更非尋常儀、種々經沙汰、不可説事也、遂及配流沙汰、但於門跡者、三條家門代々令門(入)室、仍此間御問答、公忠(三條)卿、可被入室云々、但此間沙汰之躰、每事背尋常之理、武家公家政道迷惑之時分也、祖神三寶垂加被、

配流ノ沙汰ニ及ブ

〔師守記〕○二十三帝國圖書館本　八月十一日、己亥、天陰、時々小雨下、今日小除目延引、可爲十三日云々、流人宣下延引、可爲十六日云々、

流人宣下

十六日甲辰、天晴、今夜流人宣下事、實尊、覺承、大江景實、上卿權中納言藤原忠嗣卿、權右中辨

南朝正平四年　北朝貞和五年八月十六日

同俊冬、藏人、奉行職事、權少外記康隆（源）、左少史秀職、官人右衞門少尉章倫等云々、無請印云々、毘沙門堂僧正實尊、殺害兒童之間、如此有沙汰、件兒童侵僧正妾物之間殺害云々、先代未聞珍事也、

〔華頂要略〕百四十二 諸門跡傳三　毘沙門堂

實尊大僧正　內大臣藤原公茂公第三男、法務、實超資、

實尊大僧正

正平五年庚寅　紀元二千十年 北朝觀應元年

二月 大 丙戌朔盡

二十五日、庚戌、和田茂長、遺領ニ就キテ幕府ニ訴訟ス、是日、茂長長女玄法ト、甥宗義ト和與シテ落着ス、

宗義田千二百町ヲ避ル

〔色部文書〕○羽前

もちなかの（茂長）御あとを、よしかのみのんのよし（義嘉カ）（マヽ）、うんたゑ申ておかれて候を（訴）、そうりやうより返てうんたへへきよしうけ給候あいだ（訴）、わよのきを（和與）（義）もんて（以）、たを（田）千二百町わ十郎むねよしさり申て（宗義）、わよせられ候うへは、そのしやうをやふり候て（證）、いらんわつらい申ましく候、十郎とのはいたわりにて候（違亂煩）、もしいかなる事候とも、身としてはへんかい申ましく候、むねよしのしやうのとく（證）、一ゑんにめされ候へく候、しよ事は一

子孫斷絶セバ總領ノ處置ニ任セン

人こゝをも御ふちあるへきよし（扶持）、おほせ候ほとにわよ申候、もししそんたへ（斷）候はゝ、そりやうは一ゑんにそうりやうの御はからいたるへく候よし（所領）、むねよしもしやうをしてまいらせられ候うゑは、身にもこのしやうをそむくましく候、よつて、しやうくたんのことし、

ちやうは六年二月廿五日

○茂長ノ女玄法ノ訴ニ依リ、幕府、長尾景忠ノ、越後奥山莊ノ地ヲ押妨スルヲ停メ、玄法ニ交付セシムルコト、興國五年閏二月四日ノ條ニ見ユ、コノ平氏女、恐クハ玄法ナラン、

三月 小 丙辰朔盡

二十九日、甲申、北朝除目、少目藤原爲孝ヲ越後介ト爲ス、

〔園太曆〕十四

除目三條大納言（公忠）申文執筆談合事、觀應元年三月廿九日、天晴、○中略

越後介藤原爲孝 兼　權介丹波篤直 兼

權掾藤原保英 文章生　少目藤井彥定 膳部 進物所

九月　大　癸丑　朔盡

三日乙卯、南軍、越後・信濃・常陸ノ諸國ニ蜂起ス、仍テ、上杉憲將、越後如法寺左藤ノ南軍ヲ擊タントシ、田口三郎ヲシテ、一族ヲ率ヰ、山園ヨリ後援セシム、

〔園太曆〕十五　觀應元年九月三日、天晴、濃州靜謐之由、祝著之處、信濃・常陸・越後已下四五ヶ國、蜂起之由有其聞云々、

〔南狩遺文〕三　安藤氏家臣田口茂右衞門藏

當國凶徒等執陣於如法寺左藤之間、爲對治、明日十七日、罷向候、爲後攻、相催一族等、自山園令發向、可被致軍忠候、仍執達如件、

觀應元年九月十六日　（上杉憲顯）兵庫頭判

田口三郎殿

十一月　大　壬子　朔盡

二十八日己卯、加治四郎代官左衞門尉貞朝、姓闕ク、越後奥山莊荒居村地頭職ヲ、和田茂實ニ交付ス、

〔續史堂古文書〕○羽前　伊佐早謙氏藏

越後國奥山庄（北蒲原郡）北條内荒居村地頭職事、任今年九月廿八日御教書之旨、沙汰付下地於和田下野權守茂實代候畢、仍渡狀如件、

觀應元年十一月廿八日　（加治）近江四郎代　左衞門尉貞朝花押

正平六年辛卯　紀元二千一年　北朝觀應二年　小　辛巳　朔盡

二月

十三日癸巳、尊氏、細川頼和ノ勳功ヲ賞シテ、越後白河莊上下條、及ビ遠江ノ地ヲ宛行フ、

〔野田文書〕○紀伊　（尊氏）（花押）

下　細河余一頼和、

可令早領知越後國白河庄上下條（北蒲原郡）、佐々木近江入道跡、遠江國相良庄安藝前司跡、事、

右爲勳功之賞所宛行也者、早守先例可致沙汰之狀如件、

觀應二年二月十三日

〔參考〕

〔系圖纂要〕清和源氏十四　細川

南朝正平六年　北朝觀應二年二月十三日

和氏　細川彌八郎、阿波守、從五下、管領、康永元年九ノ廿三頓死、四十七、補陀絡院、竹溪道倫、

清氏　彌八郎、左近將監、相模守、阿波、伊與守、從四下、執事、貞治元年七ノ廿四、於讃州白山討死、溪補陀、

賴和　左馬助、左近大夫、

將氏　九郎、兵部大輔、

六月大　戊寅朔盡

二十七日、甲辰、北朝光明上皇ノ院宣ヲ奉ジ、筑後守某、佐渡本間季忠ヲシテ、足利直冬ニ屬シ、紀伊ノ南軍ヲ擊タシム、

〔異本佐渡志〕官員

紀伊國凶徒退治事、就院宣所差遣左兵衛佐也、早爲發向之狀如件、（足利直冬）（可カ）

觀應二年六月廿七日　筑後守　判

本間刑部左衛門入道殿（季忠）

本間貞忠ノ訴ニ依リ、筑後守某旨ヲ奉ジ、本間季忠ヲシテ、佐渡泉保・新宮保等ノ地ヲ、貞忠代ニ安堵セシム、

〔佐渡志〕官員

本間新兵衛尉貞忠申、佐渡國泉保（雜太郡）・新宮保・金丸卿・宇津尾保・青木郷（加茂郡）事、守貞和五年十一月十三日御下文、可致沙汰付貞忠代之狀、依仰執達如件、

觀應二年六月廿七日　筑後守　判

本間刑部左衛門入道殿（季忠）

〔參考〕

〔佐渡本間系圖〕

泰定　源內兵衛尉、

泰昌　右兵衛尉・雜太郡竹田城主、

貞忠　新兵衛尉・泉保・新宮保・金丸郷・宇津尾保・青木郷領主、

泰季　民部丞、

季忠　刑部左衛門入道

無量壽院談議所憲空ノ訴ニ依リ、筑後守某旨ヲ奉ジ、佐渡錄職ヲ憲空代ニ安堵セシム、

〔佐渡志〕佛寺　談議所坊　眞言宗

無量壽院談議所憲空申、佐渡國錄職之事、貞和五年十一月十三日御下文可被沙汰付憲空代之狀、依仰執達如件、

觀應二年六月廿七日　筑後守（花押）

談議所憲空法印

〔參考〕

談議所坊

古義派ヨリ新義派ニ改ム

〔佐渡志〕佛寺　談議所坊　眞言宗山城國醍醐釋迦院ノ末寺○中略

雜太郎中原村ニ在リ、弘仁年中基ヲ開テ、本ハ古義ノ眞言ニテ有シカ、近キ世ヨリ新義ニ改ルト云リ、○中略中頃無量壽院ト唱ヘ、又長福寺トモ云ケルコト有シカ、其後舊名ニ復セリ、此寺ノ地殺生ヲ禁セラル以下三條ノ制札ヲ賜リテ、總門ニ建タリ、

八月小盡戊寅朔

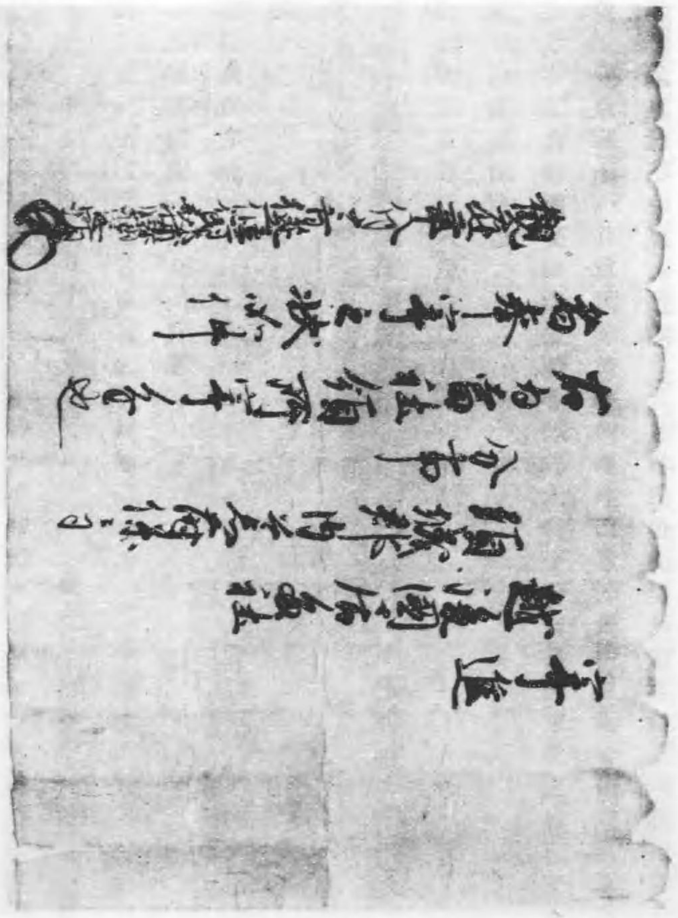
十日丁亥、尊氏、弟直義ト不和ト爲リ、直義ノ北陸ニ逃亡シ、越後ヨリ上野ニ入ルヲ懼レ、信濃守護小笠原政長ニ命ジテ、之ニ備ヘシム、

〔勝山〕小笠原文書〕○前越

高倉禪門（足利直義）下向北國之間、遣使者了、隨其左右、重而可被仰之由、先度雖被成御教書、若亂入當國（信濃）切塞通路、可被防戰旨、可相觸一族並地頭、御家人等、將又自越後國打入上野國者、率軍勢馳向彼處、可抽合戰忠節之狀如件、

觀應二年八月十日　　花押尊氏

小笠原遠江守（政長）殿



上杉憲顯等連狀

踏絵中頃紙継

所藏　東京帝國大學

尊氏直義不和

尊氏直義ト薩埵山ニ戰フ

直義降ル

尊氏直義ヲ殺ス

〔参考〕

〔京都將軍家譜〕下　尊氏治世二十五年、

七月、尊氏・惠源（直義）不和、惠源赴越中、九月、尊氏發向江州、惠源經北陸赴鎌倉、十月、尊氏東行（觀應二年）

使義詮守京師、十一月、尊氏陣於駿州薩埵山、惠源到伊豆國府、使關東軍兵圍之、

十二月、宇都宮公綱・藥師寺公義等應尊氏、發下野、自後面來攻之、尊氏下薩埵山、奮擊之、

關東兵敗走、惠源降參、

文和元年正月、尊氏入鎌倉、二月鴆殺惠源、

十三日、庚寅、上杉憲顯、越後頸城郡荒蒔保保司分ヲ、居多神社ニ寄進ス、

〔居多神社文書〕○越後

寄進

越後國居多社、

頸城郡（中頸城郡）内荒蒔保々司分事、

右爲當社領所寄進也者、奉寄之狀如件、

觀應二年八月十三日　　從五位上行民部大輔藤原朝臣憲顯（上杉）（花押）

○幕府、花崎盛光ヲシテ、居多神社ヲ修造セシムルコト、正平二年十一月十六日

南朝正平六年　北朝觀應二年八月十三日

ノ條ニ見ユ、

本間貞泰、佐渡長安寺ニ舞樂料トシテ、田地ヲ寄進シ、且國内ヲ勸進セシム、

〔長安寺文書〕○佐渡

佐渡國久知鄕陽雲山長安寺舞樂間事、

右於當寺、雖有可被興行舞樂意趣、更依無一塵新足、令默止間、爰源貞泰（本問）先寄進田地、雖奉加助成、尙以依爲其經營不足、國中將亦貞泰領分勸進、奉與彼舞樂新所也、令勸進處、全不可成公事思、面々各々被同心合力者、現在蒙神慮利生、子々孫々、菩頂（提カ）當來、結佛早（果カ）緣、可終無爲樂也、如此以趣、衆徒一同合掌無異儀、毎年三月十五日舞樂、至未來永劫、無闕如被勤行者、且天長地久寶祚榮運、且者寺中繁昌興隆佛法、到所定如件、

毎年三月十五日ニ舞樂ヲ行フ

觀應貳年辛卯八月十三日　左衞門尉貞泰（本問）（花押）○貞泰ノ系圖、元弘二年六月二日、幕府、日野資朝ヲ佐渡ニ斬ルノ條ニ收ム、

九月大丁未盡朔

二十日、丙寅、河村秀繼、其所領越後荒河保ノ地ヲ弟瀧鶴丸ニ讓ル、

〔色部文書〕○羽前

ゆつりわたす、ちうたいさふてんの所領、ゑちこの國荒河（岩船郡）の保内秀繼か知行分の事、

右下（岩船郡女川村）かつらに右衞門次郎のきふ（給）分

ますたのきう分三百苅、とう内三郎かきう分、五郎次郎かきう分、

源四郎のきう分、

一、うり田分六十苅、さわくち、

一、進士入道かいやしき（居屋敷）、手作ともに、

一、もちろくかしま十阿みた佛か作、まこ次郎かきう分、いまのいやしき、

一、大中島のこる處なくもつへし、

一、河のせきつねいりきりいて、ともにもし河くつるる事あらは、觀應二年のなかれををふへし、

一、女河に彌八か名田、藤太三郎か名田、藤三大夫名田、左衞門七郎の先きう分、女河右馬五郎かみやう田、たやなり、

一、女河宮田たう田、女河の山河入相たるへし、

一、下かつらのあしくら山二に分て、みねはくろくらをさかふ（界）、山口はたうのさわをさかふて、弟はひかしをしるへし、あにはにしをもつへし、

一、松山の田はん分地一日市に在二けん、これも弟とたきつる丸ゆつる、なりかやう

川崩レアラバ觀應二年ノ流域ニ據ルベシ

兄ニ男子ナクバ弟ニ譲ルベシ

弟男子ナクバ兄弟所有スベシ

にゆつるといへとも、あに男子なくは、をと〳〵一圓にもつへし、

をと〳〵男子なくは、あに一圓にもつへし、

もしいらんさまたけをいたさんにをきては、不孝の子(と脱カ)して、いつれも〳〵秀繼か

あとをもつへからす、

一、御公事は田ちやう(帳)にまかせて、はいふんしてあきらめへし、仍爲後日譲狀如件、

藤原(河村)秀繼(花押)

觀應二年九月廿日

○河村政秀、其所領荒河保ノ地ヲ二男瀧熊丸ニ譲ルコト、元弘二年八月十五日ノ條ニ見ユ、

公綱軍忠狀著到負傷

十一月(小盡 丁未朔)

二十日丙寅、尊氏ノ黨宇都宮公綱ノ兵、越後柏崎ニ戰フ、

〔宇都宮文書〕(尊氏)乾○常陸(花押)

著到

蓐生左衞門尉通高、分捕、　同六郎左衞門尉房高、被切レ額、訖、　同直五郎、膝節被レ射、訖、　藤河彌七

賴直、分捕、　荒(カ)蒔彌五郎氏忠、分捕、　宇賀地十郎左衞門尉、二腕被レ切、訖、　同五郎左衞門尉、

被レ射レ頸骨、訖、　同四郎兵衞尉、大股被レ射、訖、　太窪十郎、分捕、　角山太郎兵衞尉、分捕、　野澤勘解

由左衞門尉、被レ射二左二腕一、訖、　神主左衞門四郎、被レ切二左膝一、訖、

討死

打死名字

蓐生直七　同彦太郎　同左衞門太郎　芋河彦次郎

右宇都宮下□(野カ)守□(公カ)綱去年十一月廿日、於越後國柏崎(刈羽郡)手物軍忠如レ此、然早下賜御判、爲

備弓箭面目、著到如レ件○公綱ノ兵何人トカ戰フヤ詳ナラズ、

正平七年正月　日

〔參考〕

〔宇都宮系圖〕續群書類從百五十二

公綱

公綱治部太輔、正四位、左少將、左馬權頭、備前權守、宇都宮撿挍、引付衆、始高綱、母號二本地一、

延文元丙申十一月廿五日、五十五歲卒、法名理蓮、號二正眼菴一、元弘始、楠正成攝州住吉

天王寺出張、河內國於二千劔破城一數日鬪戰、從僕忠死、佳名如レ此、南都於二般若寺一軍屯時、

從後醍醐天皇賜二綸旨一、中院中將定平、楠兵衞正成誓紙文書幷、越後國於二柏崎一手者、依

軍忠尊氏卿賞二軍功一之證判于レ今有二箱底一、故京都還幸勤二供奉一、叡感之餘、如二前代一下野常

陸並伊豫、越後、伊賀兼領、昇殿等如レ此、觀應年中、將軍尊氏公駿州薩埵山合戰之砌、出

張於上州桃井合戰、薩埵山後攻之後、尊氏公被得勝利、斯時忠死高名爲恩賞、上州・信州守護並一族家僕任官○下略、

越後ヲ領ス

南朝後村上天皇　北朝後光嚴天皇

正平七年壬辰　紀元二千十二年　北朝文和元年　大乙亥朔盡

二月

二十九日、癸卯、侍從中院貞平、越後ノ村山信義等ノ南軍ヲ率キテ、北軍ヲ國府ニ擊ツ、尋デ、恒明親王之ヲ褒シ給フ、

〔村山文書〕○前羽

一見了（中院貞平）（花押）

村山右京亮信義軍忠事、

右去月廿九日、爲凶徒池一族等御退治、（貞平）中院（越後國府）殿當府御發向之間、相催信義一族等、最前馳參御方、致忠節、令宿直警固上者、下賜御證判、向後爲施弓箭面目、恐々言上如件、

正平七年閏二月　日

信義貞平ノ誉ヲ衛ル

最前參御方、致忠節之條、殊以神妙、彌可成其勇者、（恒明親王）式部卿親王令旨如此、悉之以狀、

正平七年閏二月九日　　侍從（中院貞平）（花押）

村山右京亮（信義）

〔源姓村山系圖〕○前羽　信義（村山右京亮、始中務入道西義）　○上略　正平七年二月

二十九日、越後之凶徒池一族御退治依、二品式部卿親王大塔宮（恒明親王下同ジ）御方、公卿中院左中將貞平朝臣當府江御發向、依信義相催一族等、守御方、令宿直警固、依軍忠從南朝後村上院御院宣、大判事侍從中納言公明卿以御證判賜下、從二品式部卿親王大塔宮、信義參御方致忠節條、殊以神妙也、彌可□（勵カ）興、令旨賜下、正平七年二月日、侍從中納言公明卿、以御證判、賜下依南朝奉守護、抽忠功、

〔參考〕

〔北越雜記〕七　蒲原郡三條　池伊豆守長久、從四位、初孫次郎、

元亨元年家督、當國守護蒲原郡魚沼郡領知、三條城主、直峰城抱持、建武元年亂に依て、池長久は尊氏公へ味方、村山彌次郎義（隆義）隆は義貞公へ屬し、依之池家越後旗頭之處、國中二ッ成、○中略　彌知、仁科以下爲退治、長尾次郎清景討手爲大將、沼川にて戰ひ、右兩家

池長久尊氏ニ黨シ

村山隆義南朝ニ應ズ

敗軍、依之池長久、長尾景爲兩大將にて、彌知・仁科へ加勢勝利、夫より村山幷長尾清景一族家臣之首三百五十七、池一黨にて討捕、（貞和五年正月、野吉正平七年、）南帝勅命、中院發向村山へ綸旨被下、池一黨と沼川にて對陣、村山信義初討死五百七拾八人、池方拾六人討死、（同年）

村山信義、討死ス

七月、（風間）正平七年、南帝より勅命、越後守發向、村山信義嫡子七郎義盛へ綸旨被下、蒲原郡藏王堂表にて戰、池一黨討負、彌知大炊助討死、池一類蒲原郡三條城へ引籠、足利將軍より關東並奥州・信州へ下知にて、國主池長久一族へ加勢、依之越後守越中へ懸り、吉野落行、尊氏公之武命に恐れ、村山一族都て吉野味方之一黨は池之幕下と成、是を山吉家にて三條衆と云、長尾へ屬す面々は、（る脱カ）長尾家にて譜代衆と云、

村山黨池氏ニ屬ス三條衆

〔官報〕○大正四年一月十日

贈正五位

故村山信義

是月、本間賴秀、佐渡長安寺ノ條規ヲ定ム、

〔長安寺文書〕○佐渡

定

佐渡國長安寺條々、任先規例事、

一興隆佛法事、

佛法興隆

寺田例役

一寺田例役事、

面々所役不可被闕如矣、

殺生禁斷

一殺生禁斷事、

此内不可被致殺生狼藉矣、

郷内ニテハ山野用物隨意地頭ヨリ使者ヲ入ルベカラズ

一山野用物於郷内者、爲寺中隨意非制限、

一從地頭方不可入使者事、

一寺中檢斷事、

寺中之沙汰不可綺權門之檢斷、一山會合盡理非極淵底、依衆議可是非隨但計之輕重悉可致付寺造營於難計事者、輙私不可成敗、經上訴可仰上裁矣、

右以前條々、一山別當並衆徒同心興代々舊記不可被違失狀如件、（ママ）（ママ）

左兵衞尉源賴秀（本間）（花押）

衆徒於螢雪修學並修理造營不可被如裁矣、（在）

觀應三年二月　日

○長安寺文書、別ニ翌閏二月、賴秀ノ同寺規例ヲ定メタルモノアレドモ、殆ド同文ナレバ略ス、

閏二月小乙巳朔盡

十六日、庚申、尊氏ノ黨和田茂實、越後黑川城ニ據リテ、南軍上杉憲顯ノ黨ヲ拒グ、尋デ、茂實マタ小國等ノ南軍ヲ擊タントシテ濱中ニ進ム、

〔色部文書〕○羽前

三浦關又次郎入道覺圓申軍忠事、

右覺圓老體之間以子息等爲代官、爲當國越後先守護上杉氏(民)部大夫憲顯余黨退治、今年閏二月十六日以來、屬總領三浦和田下野權守茂實手、楯籠當國黑河(北蒲原郡)城、致軍忠畢、次同八月八日爲小國以下凶徒退治、茂實致發向、同國濱中之時、子息彌五郎長義同令發向、致軍忠畢、然早爲賜證判、言上如件、

三浦覺圓軍忠狀

覺圓茂實ニ屬シ憲顯ヲ討ツ

覺圓ノ子長義

觀應三年十一月廿九日

承了(花押)

二十八日、壬申、是ヨリ先、新田義宗等、兵ヲ上野ニ起シテ、尊氏ノ軍ト戰フ、尋デ、征夷大將軍宗良親王、武藏ニ入リテ兵ヲ督シ給フ、是日、尊氏ノ軍ト小手指原ニ戰ヒテ敗レ、義宗越後ニ退ク、

尊氏所勞ノ風說

〔園太曆〕十八　閏二月廿五日、天晴、今日○中略又聞、鎌倉(足利尊氏)大納言所勞危急、或已及大事云々、近日浮說任雅意歟、眞僞可尋、

信濃ノ軍勢鎌倉ニ發向ス

廿六日、天陰、或曰、信濃諏方祝已下、一國軍勢發向鎌倉之由、去十六日立彼國云々披露、實否如何、

尊氏卒去ノ風說

廿八日、天陰、尊氏卿去十八日沒落之由有其說之由、准后(北畠親房)語之、或又去十三日卒去云々、

宗良親王御注進

關東敗北事

三月一日、晴不定、今日園三位基(隆)經卿送使者云、兼譽(覺カ)法印送狀、關東敗北事、妙法院宮(宗良親王)注進已下到來之間、今日持參八幡之由示之、所詮去十九日(七カ)尊氏卿沒落、大略不知行方、於武藏國、前守護代藥師寺一黨、上杉一類等合戰、御方乘勝了、又奧州大軍(北畠顯信)已到常州云々者、

尊氏沒落

陸奧ノ軍常陸ニ到ルトノ說

義宗ノ注進

新田注進事(義宗)

四日、新田注進、後日見及之間續之、

注進

今月十五日、於上州揚義兵、同十六日、對治國中凶徒、同日打越武州、打隨當國凶徒、同十八日攻入鎌倉候之處、尊氏已下凶徒已沒落、楯籠武州狩野河(神奈川)候之間、今日十九日、發向彼方仕候、決雌雄候者、重可注進候、以此旨被加御詞、可有洩御披露候、義宗恐惶謹言、

十五日義兵ヲ擧ゲ尊氏神奈川ニ遁ル

閏二月十九日

宗良親王マタ武藏笛吹峠ニ御出師

義宗關東ヲ警固ス義興等武藏ニ赴ク

北畠顯信白川ニ到着ストノ說

進上　御奉行所

基經卿叔父覺譽法印狀送之、書寫續之、

先日乍ニ物忩ニ參拜、恐悅候、抑去月十(七カ)八日、關東凶徒等、沒ニ落武州狩野川之城、官軍乘ニ勝攻懸、大王(宗良親王)以上州(下脫カ)・信州之堺(武藏笛吹峠カ)臼居塔下まて已出御候て、諸方大軍如ニ雲霞一、可ニ決ニ雌雄之條、不ニ可一レ廻ニ踵之間、新田者共注進昨日酉刻、到來、則申ニ入八幡一了、先度自ニ大王一被ニ仰下一之趣、悉以符合、不ニ參差一之條、返々目出畏入之外無ニ他候一、新田一族以下諸將、十五日立ニ上州一ニ對ニ治國中與黨殘黨一、打ニ越武州一及ニ關東發向一之間、尊氏以下不ニ堪一ニ防禁(禦カ)、逃落候云々、新田武藏守義宗ハ令ニ警ニ固關東一、奉ニ待ニ大王一、義興・義治(義宗舍兄)脇屋、以下諸將ハ、立ニ歸武州一、可ニ平ニ敵陣一云々、次奥州(北畠顯信)國司到ニ著白川關一、先懸勢宇津宮ニ相伴て一方發向、葉賀(芳賀)兵衞入道已討取之由、同載ニ此注進一候、旁以不ニ違ニ信州御(發意カ)廢立一、無ニ申計一存候、次江州凶徒引退、已及ニ沒落之企一候云々、其謂候哉、只今餘取亂候間任ニ筆一候、重又可ニ申入一候也、恐惶謹言、

三月五日　　覺譽

園殿

〔新葉和歌集〕十八雜歌下　東の方に久しく侍りて、ひたすらものゝふの道にのみ携りつゝ、征東將軍の宣旨など下されしも、思の外なるやうにおぼえて、よみ侍りし、　中務卿宗良親王

思きや手もふれざりし梓弓起きふし我身なれむものとは、

同し頃、武藏の國へうちこえて、こてさし(小手指原)はらといふ所におりゐて、手分なとし侍りし時、いさみあるべきよし、つはものともにめし仰せ侍りしついてに思ひつゝ

けゐ侍りし、

君の(かイ)爲世の爲何か惜しからむ捨てゝかひある命なりせば、

〔赤堀文書〕(尊氏)(花押)

上野國香林又太郎時秀息、小次郎直秀謹言○中略、今年閏二月十六日、新田左兵衞佐殿(義興)・同武藏殿(義宗)・自ニ東西一打出、燒ニ拂國中一之處、屬ニ芳賀伊賀守一、廿日・同廿八日兩度後攻仕訖、○中略下ニ賜安堵御判一、彌爲ニ致ニ忠節一、恐々言上如ニ件、

觀應三年五月日

〔源姓村山系圖〕○羽前　隆義　村山彌二郎、

義房　村山彌二郎

信義　村山右京亮

風間長頼

義盛　村山七郎、父村山右京亮源信義、共二品式部卿親王季守護、抽二忠功一、于時正平七年八月日、散々合戰、凶徒打負、楯二籠大面庄一之由依レ有レ聞、宮方中院左中將定平朝臣、侍從公明卿御發向、大將軍風間、凶徒後守、同右京亮信義並嫡男村山七郎源義盛代越後國奥郡凶徒、池、多功、石坂以下之輩、令二蜂起一、正平七年八月三日、押二寄吉野藏王堂江一、及二方切七郎光義差向、風間越後守屬二御手一、於二吉野（○吉野ノシニ字ハ衍スベシ）藏王堂大面庄一、交信義並同七郎依二軍忠一、從二南朝後村上院一、御院宣正平七年八月日賜下、觀應二年、南帝將軍御合體、亦被二打破一、將軍義詮公討而、震襟可レ奉レ休、勅使賜二新田義貞公次男新田左兵衛佐源義興、三男少將武藏守義宗、揚旗武藏國一、打越、鎌倉軍勢、悉責戰、于レ時閏二月廿八日、於二笛吹峠一、屬二新田武藏守義宗旗下一、越後勢加而抽二忠功一、戰死ス、

檜山義盛

笛吹峠ニ義宗ニ從ヒ義死ス

〔参考太平記〕三十一　新田義宗已下起二義兵事一、

義興義宗等武藏越後ノ間ニ匿ル

○上略、南北兩朝平和破レ、海内沸騰セルコトニ係ル、此時故新田左中將義貞ノ次男、左兵衛佐義興、三男少將義宗、從（イトコ）父兄弟左衛門佐（脇屋）義治三人、武藏・上野・信濃・越後ノ間ニ在所ヲ定メズ、身ヲ匿シテ、時ヲ得バ義兵ヲ起サント企テ居タリケル處ヘ、吉野殿（後村上天皇）イマダ住吉ニ御座有リシ時、由良新左衛門入道信阿ヲ（金勝院本第十八卷云、由良長濱、死二於金崎一、然無二新左衛門字一、今出二子此者一、似二相龜齬一、可二又云一）並見、勅使ニテ、南方ト義詮ト御合體ノ事ハ、暫時ノ智謀ナリト聞ユル處ナリ、仍テ節ニ迷ヒ時ヲ過スベカラズ、早ク義兵ヲ起シテ將軍ヲ追討シ、宸襟ヲ休メ奉ルヘシトソ

由良信阿勅旨ヲ傳フ

仰下サレケル、信阿急キ東國ニ下リテ、三人ノ人々ニ逢テ、事ノ仔細ヲ相觸ケル間、サラハ軈テ勢ヲ相催セトテ、廻文ヲ以テ東八箇國ヲ觸廻ルニ、同心ノ一族八百人ニ及ベリ、中ニモ石堂四郎入道（四郎、毛利家本作二左馬頭一、按俗名義房、）近年高倉殿（足利直義）ニ屬シテ、薩埵山ノ合戰ニ打負テ、甲斐ナキ命計ヲ助ラレ、鎌倉ニ在ケルカ、大將ニ憑タル高倉禪門ハ毒害セラレヌ、我トハ事ヲ起シ得ズ、哀謀叛ヲ起ス人ノアレカシ、與力セント思ヒケル處ニ、新田左兵衛佐・同少將ノ許ヨリ内狀ヲ通シテ、事ノ由ヲ知セタリケレハ、流レニ棹ストヽ悅テ、軈テ同心シテケリ、又三浦介、（按、名高通、三浦介高繼子、）葦名判官二階堂下野二郎、（按、名政元、下野守時元子也、）小俣宮内少輔モ、（異本或作二少輔二郎一、此下鎌倉合戰段、本文作二小次郎一、不レ一、按名義弘、仲義子也、）高倉殿方ニテ、薩埵山合戰ニ打負シカハ、降人ニ成テ命ヲハ繼タレトモ、人ノ見ル處、世ノ聞處、口惜キ者カナ、哀謀叛ヲ起サハヤト思ヒケル處ニ、新田武藏守・同左衛門佐ノ（毛利家本作二義興一、）方ヨリ憑ミ思フヨシヲ申タリケレバ、願フ處ノ幸カナト悅テ則與力シテケリ、此人々密ニ扇谷ニ寄合テ評定シケルハ、新田ノ人々旗ヲ擧テ上野國ニ起リ、武藏國ヘ打越ルト聞ヘハ、將軍ハ定テ鎌倉ニテヨモ待給ハシ、關戸入間河ノ邊ニ出合テソ防キ給ハンスラン、我等五六人カ勢何トナク共三千騎ハ（四源院本作二三千騎一、）アランスラン、將軍戰場ニ打出給ハンスル時、態馬廻リニ控ヘテ、合戰已ニ半ナランスル最中、將軍ヲ眞中ニ取籠奉リ、一

石堂義房新田氏ニ應ズ

三浦高通等亦應ズ

直義ニ屬セシ諸將參加ス

石塔三浦等ノ謀議

人モ殘ラズ打取テ、後ニ御陣ヘハ參候ヘシト、新田ノ人々ノ方ヘ相圖ヲ堅ク定テ、石堂入道・三浦介・小俣葦名ハ、ハタラカデ鎌倉ニコソ居タリケレ、諸方ノ相圖事定リケレハ、新田武藏守義宗・左兵衞佐義興・左衞門佐義治、此上、本文有二脫字一、今依二異本一補レ之、閏二月八日、園太曆作二十五日一、先手勢八百餘騎ニテ西上野ニ打出ラル、是ヲ聞テ國々ヨリ馳參ケル當家他門ノ人々、先一族ニハ江田・大館・堀口・篠塚、今川家本、作二松塚一、金勝院、西源院本、作二薮塚一、天正本、作二舞塚一、羽川・岩松・田中・青龍寺・小幡・大井田・一井・世良田・籠澤、毛利家・北條家・金勝院・西源院・南都・天正本、載二額田一、外様ニハ宇都宮三河三郎、北條家・南都本、作二三河守一、天野民部大輔政貞・三浦近江守・南木十郎・西本七郎、此上二人、金勝院本不レ出、酒勾左衞門・小幡左衞門、左、毛利家、天正本、作レ右、金勝院、西源院本不レ載、中金・松田・河村・大森・葛山・勝代、金勝院本、作二藤代一、蓮沼・小礒・大礒・酒間・山下・鎌倉・玉繩、毛利家・金勝院・西源院本、作二出繩一、非也、梶原・四宮・三宮、北條家・南都本、作二二宮一、南西、金勝院本、作二葛西一、高田・櫻井・若兒玉、丹黨ニハ安保信濃守・子息修理亮・舍弟六郎左衞門・加治豐後守、今出川家、天正本、作二豐前守一、同丹内左衞門・勅使河原丹七郎、七、金勝院本、作レ六、西黨・東黨・熊谷、金勝院本、不レ出、太田、西源院本、作二太山一、平山・私市、金勝院本、不レ出、村山・横山・猪俣黨・都合其勢十萬餘騎、十萬、毛利家本、作二五萬一、所々ニ火ヲ懸テ、武藏國ヘ打越ル、コレニ依テ武藏・上野ヨリ、早馬ヲ打テ鎌倉ヘ急ヲ告ル事、櫛ノ齒ヲ引カ如シ、サテ敵ノ勢ハ何程有リト問ヘハ、使者トモ皆二十萬騎ニハ劣リ候ハシト答ケル、仁木・細川ノ西源院本、作二畠山一、人々是ヲ聞テ、サテハユヽシキ大事ゴザンナレ、鎌倉中ノ勢千騎ニマサラジト覺ユルナリ、國々ノ軍勢ハ縱參ル共、今ノ用ニハ立カタシ、千騎ニ足ヌ御勢ヲ以テ、敵ノ二十萬騎ヲ防カン事ハ叶ヘキ共覺候ハス、只先安房・上總ヘ開セ給ヒテ、御勢ヲ附テ御合戰コソ候ハメト申サレケルヲ、將軍ツクツクト聞給ヒテ、軍ノ習落テ後利アル事千ニ一ノ事ナリ、勢ヲ催サン爲ニ、安房・上總ヘ落ナハ、武藏相模・上野、毛利家本、作二上總一、非也、下野ノ者共ハ、縱尊氏ニ志アリ共、敵ニ隔ラレテ御方ニ成事アルヘカラス、又尊氏鎌倉ヲ落タリト聞カハ、諸國ニ敵ニ成者多カルヘシ、今度ニ於テハ縱小勢ナリトモ、鎌倉ヲ打出テ、敵ヲ道ニ待テ戰ヲ決センニハシカシトテ、十六日早旦ニ、將軍僅ニ五百餘騎ノ勢ヲ率シ、敵ノ行合ンスル所マテト、武藏國ヘ下リ給フ、鎌倉ヨリ追著奉ル人々ニハ、畠山上野介、北條家・西源院・南都本、作二上總介一、按系圖及櫻雲記、畠山上野介高國、觀應二年二月、於二奥州一討死云々、觀應三年所謂上野介、未レ知二何人一、子息伊豆守・畠山左京大夫・舍弟尾張守、義深、舍弟大夫將監、清義、其次式部大輔、義熙、金勝院本、不レ出、仁木左京大夫・舍弟越後守・三男修理亮・岩松式部大夫・大島讃岐守・石堂左馬頭、異本或作二右馬頭一、赤混雜・蓋左馬助義基、今川五郎入道・同式部大輔、今川家本、作二民部大輔一、北條家・南都・天正本、作二上總介一、共言二心省子範氏一、田中三郎、天正本、作二二郎一、大高伊豫守、按、閏二月二十日、義詮敗二走江州一之時、大高在二京、逃二于東坂本一、而開二落段一、可二並見一、同土佐修理亮、同、毛利家、西源院、天正本、作レ高、金勝院本、作二高土佐守一、同修理亮一、爲二兩人一、大平安藝守・同出羽守・宇津木平

仁木細川等尊氏ニ安房上總ニ避ケンコトヲ勸ム

尊氏從ハズシテ武藏ニ入ル

三・宇津木、毛利家・天正本、作字都宮木、非也、完戸安藝守・山城判官・山城、西源院本作結城、曾我兵庫助・梶原彈正忠・諸本第二十九卷小清水合戰段云、梶原彈正忠討死、今出于此者恐非也、天正本不載之、爲得、二階堂丹後守・守、毛利家本作三郎、同三郎左衞門・金勝院、西源院本無、同字、爲二人、饗庭命鶴・和田筑前守・和田、毛利家・金勝院、西源院・天正本、作和泉、長井大膳大夫・同備前守・同治部少輔・子息右近將監等ナリ、右近、毛利家・北條家・金勝院、西源院・南都・天正本、作左近、元ヨリ隱謀有シカハ、石堂入道・三浦介・小俣宮内少輔・葦名判官・二階堂下野次郎、其勢三千餘騎ハ他ノ勢ヲ交ヘス、將軍ノ御馬ノ前後ニ透間モナクソ打タリケル、金勝院本云、左近將監三千餘騎ハ、他ノ勢ヲマシヘス、將軍ノ馬ノ前後ニソ打タリケル、元ヨリ謀有シカハ、石堂入道・三浦介・小俣少輔四郎、葦名判官、二階堂下野次郎、彼等モ同相順ケルカ、彌更將軍ニ少モ離レス附添ケル云々、久米河ニ一日逗留シ給ヘハ、河越彈正少弼、西源院本載于尊氏久米川ニ留ル發ニ鎌倉一日後至之列而西源院本重複、載下同上野介・同唐戸十郎左衞門、唐戸、異本或作唐子、西源院本載ニ佐竹一、江戸遠江守・同下野守・毛利家・北條家・金勝院・西源院・南都本、載ニ同上野介一、同修理亮・高坂兵部大輔・天正本作少輔一、同下野守・同下總守・同掃部助・豐島彈正左衞門・豐島、毛利家本作鹿島、同兵庫助・土屋備前守・同修理亮・同出雲守・同肥後守・土肥次郎兵衞入道・子息掃部助・舍弟甲斐守・同三郎左衞門・二宮但馬守・同伊豆守、毛利家本作伊豫守、同近江守、今川家本、作遠江守、北條家・南都本、載ニ同三郎左衞門一、同河内守・曾我周防守・同三河守・同上野介・子息兵庫助、此上三人、金勝院本不レ出、澁谷木工左衞門・同石見守・海老名四郎左衞門・子息信濃守・舍弟修理亮・小早川刑部大輔・同勘解由左衞門、澁谷石見守以下至レ此、金勝院本不レ出、豐田因幡守・豐田、今川家・毛利家・金勝院・西源院・天正本、作豐島一、狩野介・金勝院本不レ出、那須遠江守・本間四郎左衞門・本、本間、西源院本作木間一、鹿島越前守・北條家・南都本、作越後守一、島田備前守・島田、西源院本作鳴田一、淨法寺右近大夫・右、毛利家・北條家・西源院・南都・天正本、作レ左、白鹽下總守・高山越前守・天正本作中守一、小林右馬助・瓦葺出雲守・西源院本作出羽守一、見田常陸介・本間以下至レ此、金勝院本不レ載、古尾谷民部大輔・古尾谷、金勝院本作石尾一、西源院本作古屋一、下倣レ之、長峰石見守・長峯、今川家・天正本、作長崎一、都合其勢八萬餘騎、將軍ノ御陣ヘ馳參ル、已ニ明日矢合ト定ラレケル夜、石堂四郎入道、三浦介ヲ呼ノケテ宣ケルハ、合戰已ニ明日ト定ラレタリ、此間相謀ツル事ヲ、子息ニテ候右馬頭ニ、此上作左馬頭今又誤、天正本云名義基、曾テ知セ候ハヌ間、此者一定一人殘止テ將軍ニ討レ進ラセントヽ覺候、一家ノ中ヲ引分テ義卒ニ與シ、老年ノ頭ニ兜ヲ載クモ若望ミ達セハ後榮ヲ子孫ニ殘サントヽ存スル故ナリ、サレハ此事ヲ告知セテ、心得サセハヤト存スルハ、如何候ヘキト問給ヒケレハ、三浦ケニモ是程ノ事ヲ、告進ラセラレサランハ、後悔有ヘク覺候、急知セ進ラセ給ヘト申ケル間、石堂禪門、子息右馬頭ヲ呼テ、我薩埵山ノ合戰ニ打負テ、今降人ノ如クナレハ、仁木・細川等ニ押スベラレテ、人數ナラヌ有樣、御邊モ定テ遺恨ニソ思フラン、明日ノ合戰ニ、三浦介・葦名判官・二階堂ノ人々ト引合テ、合戰ノ最中將軍ヲ討奉リ、家運ヲ一戰ノ間ニ開カントヽ思フナリ、相構テ其旨ヲ心得テ、我旗ノ趣ニ從ハルヘシト云レケレハ、右馬頭大ニ氣色ヲ損シテ、弓矢ノ道貳心アルヲ以テ恥トス、人ノ事ハ知ス、某ニ於テハ、將

軍ニ深ク憑マレ進ラセタル身ニテ候ヘハ、後矢射テ名ヲ後代ニ失ハントハ、エコソ申マシケレ、兄弟父子ノ合戰、古ヨリ今ニ至マテナキ事ニテ候ハス、何様三浦介・葦名判官隱謀ノ事ヲ、將軍ニ告申サスハ、大ナル不忠ナルヘシ、父子ノ恩義已ニ絶候ヌル上ハ、今生ノ見參ハ、是ヲ限ト思召候ヘト、顏ヲ赤メ腹ヲ立テ、將軍ノ御陣ヘソ參ラレケル、父ノ禪門大ニ興ヲ醒シテ、急キ三浦カ許ニ行テ、（天正本云、石堂、三浦ヲ呼寄テ云々、）父ノ子ヲ思フ如ク、子ハ父ヲ思ハヌ者ニテ候ケリ、此事右馬頭ニ知セス、敵ノ中ニ殘テ討レモヤセンスラント思フ悲サニ、告知セテ候ヘハ、以ノ外ニ氣色ヲ損シテ、此事將軍ニ告申サテハ叶フマシキトテ歸候ツルハ、如何此者カ氣色、ヨモ告申サヌ事ハ候ハジ、如何樣聽テ討手ヲ向ラレント覺候、イサヽセ給ヘ、今夜我等カ勢ヲ引分テ、關戸ヨリ武藏野ヘ廻テ、新田ノ人々ト一ニナリ、明日ノ合戰ヲ致候ハント宣ヒケレハ、多日ノ謀忽ニ顯レテ、却テ身ノ禍ニ成ヌト恐怖シテ、三浦葦名・二階堂手勢三千餘騎ヲ（天正本作二二千一與レ前一、）繼幡、引分、寄手ノ勢ニ加ハラント、關戸ヲ廻テ落テ行、是ソハヤ將軍ノ御運盡サル所ナリ、

尊氏ノ幸運

武藏野合戰事

三浦カ相圖相違シタルヲハ、新田武藏守夢ニモ知ス、時刻ヨク成ヌト急キ、明レハ閏二月二十日辰ノ時ニ、武藏野ノ小手差原ヘ打臨給フ、一方ノ大將ニハ、新田武藏守義宗五萬餘騎、（五萬、金勝院・天正本、作二五百一、恐非也、）白旗中黑頭黑團扇ノ旗ハ兒玉黨、坂東八平氏赤驗一揆ヲ五手ニ引分テ、五所ニ陣ヲソ取タリケル、一方ニハ新田左兵衞佐義興ヲ大將ニテ、其勢都合二萬餘騎、（二萬、天正本作二三萬一、）カタハミ鷹羽一文字、十五夜月弓一揆、引テハ一人モ歸ラシト、是モ五手ニ一揆シテ四方六里ニ控ヘタリ、一方ニハ脇屋左衞門義治ヲ大將ニテ二萬餘騎、（二萬、西源院本作二三萬一、天正本作二三萬五千一、）大旗、小旗、下濃旗、鍬形一揆、母衣一揆、是モ五箇所ニ陣ヲ張、射手ヲハ左右ニ進マセテ、驅手ハ後ニ控ヘタリ、敵小手差原ニアリト聞ヘケレハ、將軍十萬餘騎ヲ十萬、（天正本作二二十萬一、）五手ニ分テ、中道ヨリソ寄ラレケル、先陣ハ平一揆三萬餘騎、小手ノ袋、（ヨノ、ハカマ、）四幅袴、旗、笠驗ニ至ルマテ、一色ニ皆赤カリケレハ、殊更耀テソ見ヘタリケル、二陣ニハ白旗一揆二萬餘騎、（二萬、天正本作二三萬一、下倣レ之、）白葦毛、白瓦毛、白佐目、（天正本作二星白一、）鶉毛ナル馬ニ乘テ、練貫ノ笠驗ニ（天正本作二白母衣一、）白旗ヲ差タリケルカ、（西源院本云、二陣ニハ八文字一揆、）（二萬餘騎、練貫ノ笠驗ニ八文字ヲ書タル白旗ヲ差タリ云々、下同、）敵ニモ白旗アリト聞テ、俄ニ短クソ切タリケル、三陣ニハ花一揆、命鶴丸ヲ大將トシテ六千餘騎、（六千、天正本作二二千一、）萠黃火威紫絲、卯花ノツマ取タル鎧ニ薄紅ノ笠驗ヲツケ、梅花一枝折テ兜ノ眞向ニサシタレハ、四方ノ嵐吹度ニ鎧ノ袖ヤニホフラン、四陣ハ御所一揆トテ（御所、西源院本作二白旗一、）三萬餘騎、（三萬、天正本作二五萬一、）二引兩ノ二、西

小田勢新手指原ニ赴ク

義宗ノ軍

義興ノ軍

義治ノ軍

尊氏中道ヨリ小手指原ニ向フ

櫻庭氏直

仁木頼章

源院本作レ、非也、旗ノ下ニ將軍ヲ守護シ奉リテ、御内ノ長者國大名閑ニ馬ヲ控ヘタリ、五陣ニ仁木左京大夫頼章舍弟越後守義長・三男修理亮義氏、天正本作二頼勝、頼勝彈正少弼也、西源院本載二畠山上總介父子二人、同阿波守兄弟四人、其勢三千餘騎、笠驗ヲモ著ス、旗ヲモ差ス、遙ノ外ニ引ノケテ馬ヨリ下テソ居タリケル、是ハ兩方大勢ノ合戰ナレハ、十度二十度懸合懸合戰ハンニ、敵モ御方モ氣ヲ屈シ力疲レヌ事有ヘカラス、其時新手ニ代リテ、敵ノ大將ノ控ヘタランスル所ヲ見澄シテ、夜討ニセンカ爲ナリケリ、金勝院本云、横合ニカ爲ナリ云々、去程ニ新田・足利兩家ノ軍勢二十萬騎、天正本作二五十萬騎一、恐非也、小手差原ニ打臨テ、敵三聲鬨ヲ作レハ、御方モ三度鬨ノ聲ヲ合ス、上ハ三十三天マテモ響キ、下ハ金輪際迄モ聞ユラント夥シ、先一番ニ新田左兵衞佐カ二萬餘騎ト二萬、此上天正本二萬五千、今相齟齬、平一揆カ毛利家本、平一揆上載二畠山高國一、按二系圖及櫻雲記一、畠山高國、觀應二年二月、於二奥州一戰死、既註レ上、可二合見一、三萬餘騎ト懸合テ、三萬、天正本作二萬一、追ツ返ツ分レツ、半時許相戰テ、左右ヘ颯ト引退タレハ、兩方討ルヽ兵八百餘人、創ヲ被ル者ハイマタ計ルニ遑アラス、二番ニ脇屋左衞門佐カ二萬餘騎ト、二萬、此上西源院本作二三萬一、今同二本文一、相齟齬、天正本作二一千一、赤非也、白旗一揆二萬七千餘騎ト、二萬七千、毛利家本作二二萬一、今相齟齬、東西ヨリ相懸リニ懸テ、一所ニ颯ト入亂レ、火ヲ散シテ戰フニ、汗馬ノ馳違フ音、太刀ノ鐔音、天ニ光リ、地ニ響ク、或ハ引組テ首ヲ取ルモアリ取ラルヽモアリ、或弓手妻手ニ相附テ、切テ落スモアリ落サルヽモ

小手差原ニ戰フ

義興平一揆ト戰フ

義治白揆一旗ト戰フ

義宗花一揆ト戰フ

アリ、血ハ馬蹄ニ蹴懸ラレ、紅葉ニ洒ク雨ノ如ク、尸ハ野徑ニ横テ尺寸ノ地モ餘サス、追靡ケ懸立ラレ、七八度カ程戰テ、東西ヘ颯ト別レタレハ、敵御方ニ討ルヽ者又五百人ニ及ヘリ、五百、金勝院・天正本、作二八百餘騎一、三番ニ饗庭命鶴、生年十八歳、容貌當代無雙ノ兒ナルカ、今日花一揆ノ大將ナレハ、殊更花ヲ折テ出立、花一揆六千餘騎カ眞前ニ驅出タリ、新田武藏守是ヲ見テ、花一揆ヲ散サン爲ニ、兒玉黨ヲ向ヘシ、團扇ノ旗ハ風ヲ含メル物ナリトテ、兒玉黨七千餘騎ヲ差向ラル、花一揆皆若武者ナレバ、思慮モナク敵ニ懸リテ、一戰戰フトソ見ヘシ、天正本云、兒玉黨、大將ノ殿命ヲ請テ、何カハ勇サルヘキ、馬ノ足ヲ一所ニ定テ、シツシツト進トソ見ヘタリケル、花一揆是ヲ見テ、敵ニ中ヲ破ラレシト、七千餘騎ヲ引圍テ、鞭ヲ進メテソ合タリケル云々、下同二本文一、兒玉黨七千餘騎ニ揉立ラレ、一返シモ返サスハツト引、自餘ノ一揆ハ、カクル時ハ一手、ニ成テカヽリ、引時ハ左右ヘ颯ト別レテ新手ヲ入替サスレハコソ、後陣ハ騷カテ懸違フタレ、是ハ其軍立甲斐ナクシテ、將軍ノ後ニ控ヘテオハスル陣ノ中ヘコホレ落テ引間、新手ハ是ニ蹴立ラレ進ミ得ズ、敵ハ氣ニ乘テ、勝鬨ヲ作懸作懸、攻附テ追カクル、角テハ叶フマシ、皆引退テ一度ニ返セト云程コソ有ケレ、將軍ノ十萬餘騎、ヒタ引ニ引立テ曾テ、後ヲ顧ス、新田武藏守義宗旗ヨリ先ニ進テ、天下ノ爲ニハ朝敵ナリ、我爲ニハ親ノ敵ナリ、只今尊氏カ首ヲ取テ軍門ニ曝サスンハ、何ノ時ヲカ期スヘキトテ、自餘ノ敵共ノ南北ヘ分レテ引ヲハ少モ

尊氏敗退ス

義宗尊氏ヲ追フ

目ニ懸ス、只二引兩ノ大旗ノ引ニ附テ、何クマテモト追懸給フ、引モ策ヲ擧、追モ逸足ヲ出セハ、小手差原ヨリ石濱マテ、坂東道已ニ四十六里ヲ（天正本作五十餘里）、片時カ間ニソ追附タル、將軍石濱ヲ（天正本作隈田川）打渡給ヒケル時ハ、已ニ腹ヲ切ントテ、鎧ノ上帶切テ拋捨テ、高紐ヲ放サントシ給ヒケルヲ、近習ノ侍共二十餘騎（二十、西源院本作二千）、返合テ、追カクル敵ノ、河中マテ渡懸タルト引組引組討死シケル、其間ニ、將軍急ヲ遁レテ、向ノ岸ヘカケ上リ給フ、（天正本云、近習ノ者共二十餘騎、河中ニテ返合セ支ヘ戰ヒシ其間ニ、將軍急ヲ逃レテ、石濱入道カ宿所ヘソ入ラモ給ケル云々、）落行敵ハ三萬餘騎、追懸ル敵ハ五百餘騎、河ノ向ノ岸高クシテ、屏風ヲ立タル如クナルニ、數萬騎ノ敵返合セテ此ヲ先途ト支タリ、日已ニ酉ノサガリニ成テ、河ノ淵瀨モ見ヘサレハ、新田武藏守義宗、續テ渡スニ及ハス、跡ヨリ續ク御方ハナシ、安カラヌ者カナト、牙ヲ嚙テ本陣ヘト引返サル、又將軍ノ御運ノツヨキ所ナリ、新田左兵衞佐ト脇屋左衞門佐トハ一所ニ成テ、白旗一揆カ二三萬騎北ニ分レテ引ケルヲ、是ソ將軍ニテオハスラン、何クマテモ追追テ討ントテ、五十餘町迄追懸テ行處ニ、降參ノ者共カ馬ヨリ下、各對面シテ色代シケル程ニ、是ニ會釋セントテ、所所ニテ馬ヨリ控ヘ會釋シ給ヒケル間、軍勢ハ皆北ヲ追テ東西ヘ隔リヌ、義興ト義治ト僅三百餘騎ニ成テソオハシケル、（天正本無三百餘騎字）、仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長ハ、（西源院本載畠山）、元來加樣ノ所ヲ伺テ、イマタ

尊氏自殺セントス

尊氏虎口ヲ脫ス

仁木頼章等義興義治等ヲ攻ム

一戰モセス、馬ヲ休メテ葦原ノ中ニ隱レテ居ラレタリケルカ、是ヲ見テ末々ノ源氏、國々ノ附勢ヲハ何千騎討テモ何カセン、アハレ幸ヤ、天ノ與ヘタル所カナト悦テ、其勢三千餘騎只一手ニ成テ推寄タリ、敵大勢ナレハ、定テ鶴翼ニ開テ取籠ンスラント推量シテ、義興・義治魚鱗ニ連テ、轡ヲナラヘテ敵ノ中ヲ破ント見繕フ處ニ、仁木越後守義長是ヲ屹ト見テ、敵ノ馬ノ立樣軍立、尋常ノ葉武者ニアラス、小勢ナレハトテ侮リテ中ヲ破ラルナ、一所ニ馬ヲ打寄テ、敵懸ル共懸合スナ、前後ニ常ニ目ヲ賦テ、大將ト覺シキ敵アラハ組テ落テ首ヲトレ、葉武者カヽラハ射テ落セ、敵ニ力ヲ盡サセテ、御方少モ漂ハス、無勢ニ多勢勝スヤト、委細ニ方便ヲ成敗シテ、一所ニ勢ヲソ圍タル、按ニ違ハス義興・義治、目ノ前ニ引ヘテ欺ク敵ニコラヘ兼テ、（此上本文、文義差謬、今依異本改之、）三百餘騎ヲ（三百、天正本作五百、下倣レ之、）一手ニ成シ、敵ノ眞中ヲ懸破テ、蜘手十文字ニ懸立ントヽ喚テ懸リケレトモ、仁木越後守（西源院本、畠山ニ載ル、）些モ聶カス、眞中ヲ破ラルナ、敵ニ氣ヲ盡サセヨト下知シテ、彌馬ヲ立寄、透間モナク控ヘタレハ、面ニアル兵計互ニ討レテ、颯ト引ケレ共追テモ更ニ懸ラス、裏ヘ通リテ戰ヘトモ、面ハ些モ騷カス、東ヘ廻レ共西ハ閑ナリ、北ヘ廻レ共南ハ曾テ聶カス、懸寄レハ打違、組テ落レハ落重ナル、千度百度懸レ共、強陣勢堅クシテ、大將退ク事ナケレハ、義興・義治氣疲レテ、東ヲ差テ落テ行、（金勝院本云、義長是ヲ見テ、餘スナ

義興義治奮戰シテ

悉討取トテ追カケケルカ、單己無類ニ成ニケレハ、今ハ是迄ナリトテ引退云々、二十餘町落延テ、誰誰討レタルト計ルニ、三百餘騎有ツル兵共、百餘騎討レテ二百餘騎ソ殘リケル、北條家・南都本云、二百ニタラスナリニケル云々、天正本云、五百餘騎有ツル兵、二百餘騎ニソナリニケル云々、義興兜ノシコロ、袖ノ三ノ板切落サレテ、天正本云、兜ノシコロ鎧草摺三枚切落サル云々、小手ノ餘リ臑當ノハツレニ薄手三所負レタリ、義治ハ太刀カケ草摺ノ横縫皆撞切レテ威毛計續タルニ、鍬形兩方切折レ星モ少々削ラレタリ、太刀ハ鐔本ヨリ打折ヌ、中間ニ持セタル長刀ヲ持レタリケルカ、ミネハサヽラノ子ノ如ク切ラレテ、刃ハ鋸ノ樣ニソ折タリケル、馬ハ三所マテ切ラレタリケルカ、下テ乘替ニノリ給ヘハ、倒テ軈テ死ニケリ、兩大將如此自戰テ創ヲ被ル上ハ、其已下ノ兵共痛手ヲ負、切創ノ二三箇所負ヌ者ハ希ナリ、新田武藏守將軍ヲ討漏シヌ、今日ハ日已ニ暮ヌレハ、勢ヲ集テ明日石濱ヘ寄ントテ、天正本云、石濱入道カ宿所ヘ寄ントテ云々、小手差原ヘ打歸ル、兵衞佐殿何クニカ控ヘ給ヒヌト、行合フ兵共ニ問給ヘハ、兵衞佐殿ト脇屋殿トハ、一所ニ控ヘテ御渡リ候ツルカ、仁木殿ニ西源院本載ニ畠山一、打負テ、東ノ方ヘ落サセ給候ツルナリトソ答ケル、サテ爰ニ見ヘタル籌ハ、敵カ御方カト問給ヘハ、此邊ニ御方ハ一騎モ候マシ、是ハ仁木殿兄弟ノ勢カ、白旗一揆ノ者共カ、燒タル籌ニテソ候ラン、天正本云、是ハ仁木殿御兄弟、白旗一揆ノ者共カ燒タル籌火ニテ候、味方ハ一人モ候マシトソ答ケル、義宗是ヲ聞テ、角テハ如何セント思按シ給フ處ニ、御内ノ者トモ一同ニ申ケルハ、此下文異而意同ニ本文一、小勢ニテ此邊ニ御座

義宗石濱ヨリ小手指原ニ引還ス

傷ク

義宗笛吹峠ニ退ク

義興義治死ヲ決シテ鎌倉ニ向フ

候ハン事ハ如何ト覺候ヘハ、夜ニ紛レテ急キ笛吹峠ノ方ヘ打越サセ給ヒ候テ、越後・信濃勢ヲ待調ヘラレ候テ、重テ御合戰候ヘカシト申ケレハ、武藏守暫思按シテ、ケニモ此議然ルヘシトテ、笛吹峠ハ何クソト問々夜中ニ落給フ、

鎌倉合戰事

新田左兵衞佐・脇屋左衞門佐二人ハ、纔ニ二百餘騎ニ打成レ、武藏守ニ離レヌ、御方ノ勢共ハ何地ヘカ引ヌラン、浪ニモ著ス、礒ニモ離レタル心地シテ、皆馬ヨリ下居テ休マレケルカ、此勢ニテハ上野ヘモ歸リ得マシ、落テ行ヘキ方モナシ、打死スヘキ命ナレハ、鎌倉ヘ打入テ、足利左馬頭ニ名基氏、按園太曆、將軍三男基氏、號鎌倉三郎、文和元年八月、任左馬頭、然則是蓋追稱耳、逢テ、命ヲ失ハヤト宣ヘハ、諸人皆此議ニ同ジテ、一向討死セント心サシ、思思ノ母衣懸テ、鎌倉ヘトソ赴カレケル、

天正本云、義興・義治ハ、一所ニ成テ、打漏サルヽ勢共ヲ引具シ、武藏守ニハ離給ヒヌ、味方ノ勢ハ皆落失ヌ、馬ヨリ下リテ休給ヒケルカ、此勢ニテハ、落テ行ベキ方モナシ、打死スベキ命ヲ徒ニ捨ンヨリハ、鎌倉ヲ打落サンニ、合戰難儀ナラハ、ソコニテ尸ヲ曝セカシ、角テ此彼ニサマヨハン事ハ、本意ニ非スト宣ヒケレハ、義治モ相從フ兵共モ、然ヘシトソ同ジケル、サレ共僅ノ勢ニテ鎌倉ヲ落サン事ハ有カタケレ

ハ、面々皆是ヲ最期ト覺ヘテ、不覺ノ涙ヲ鎧ノ袖ニソ洒ケル、大將二人モ流石心細クヤ思ハレケン、是程ニ成迄面々相伴フ志、今生一世ノ契ニアラズ、冥途迄モ諸共ニ、修羅鬪諍ノ苦ヲ受ン事ハ、誠ニ謝シテモ餘リ有トテ、互ニ涙クミテソオハシケル、角テ夜明ナハ叶フマシトテ、ヒシヒシト打立、急キ鎌倉ノ合戰ヲ以テ、安否ヲ定ムベシトテ、既ニ關戸ヲ打過給ヒケル處ニ、勢ノ程五六千騎モ有ント覺シクテ、西ヲ指テソ下リケル云々、（下同ニ本文ニ）

關戸ニテ石堂義房三浦高通ニ會ス

夜半過ル程ニ關戸ヲ過給ヒケルニ、勢ノ程五六千騎モ有ラント覺テ、西ヲ指テ下ル勢ニ行合給ヒテ、是ハ搦手ニ廻ル勢ニテソ有ラン、サテハ鎌倉マテモ行著スシテ、關戸ニテソ尸ヲハ曝スヘキニテ有ケリト、面面ニ思定メ、一處ニ馬ヲ懸寄セ、是ハ誰殿ノ勢ニテ御渡候ソト問レケレハ、是ハ石堂入道・三浦介・新田殿ヘ御參候ナリトソ答ケル、義興・義治、手ヲ拍テ、コハイカニト悅給フ事限ナシ、只魯陽カ朽骨二度連テ、韓（本文）作ニ韓構ニ、非也、今改レ之、ト戰ヲ致セシ時、日ヲ三舍ニ返セシ悅モ、是ニハ過シトソ覺ケル、軈テ此勢ト打連レテ、神奈河ニ（金勝院本作ニ龜川ニ）著テ、鎌倉ノ樣ヲ問給ヘハ、鎌倉ニハ將軍ノ御子息左馬頭基氏ヲ警固シ奉リ、南遠江守（宗繼）（天正本作ニ高南掃部亮ニ、下倣レ之、）安房・上總ノ勢三千餘騎ニテ、假莊坂・巨福呂坂ヲ切塞テ、用心密ク見ヘ候シカ、昨日ノ朝敵三浦ニ在ト聞テ、打散サントテ

南宗繼基氏ヲ擁シテ鎌倉ヲ守ル

義興等鎌倉ヲ攻ム

向ハレ候シカ共、虛言ニテ有ケリトテ、只今鎌倉ヘ打歸ラセ給ヒテ候ヨトソ語リケル、サテハ只今ノ合戰ゴザンナレ、爰ニテ軍ノ用意ヲセヨトテ、兵粮ヲツカヒ、馬ニ糠ヨリ眞下リニソ推寄タル、鎌倉勢ハ、唯今三浦ヨリ打歸テ、イマタ馬ノ鞍ヲモオロサス、鎧ノ上帶ヲモ解ヌ程ナレハ、若宮小路ヘ打出テ、只一處ニ控ヘタリ、小俣小次郎ヲハ、今日ノ軍奉行ト今朝ヨリ定ラレタリケレハ、手勢七十餘騎（今出川家本作ニ三十餘騎ニ、毛利家・北條家・金勝院・西源院・南都本、作ニ七十三騎ニ、）引勝テ、敵ノ群立テ控ヘタル中ヘツト懸入、火ヲ散テ切亂ス、三浦・葦名・二階堂ノ兵共、案内ハ知タリ、人馬イマダ疲レス、此ノ谷彼ノ小路ヨリトツト喚テハ懸入、颯ト懸破テハ裏ヘ拔、谷々小路小路ニ入亂テソ戰フタル、兵衞佐義興ハ、濱面ノ在家ノハツレニテ、敵三騎（毛利家本、作ニ二騎ニ、）切テ落シ、大勢ノ中ヲツト懸拔ケル處ニテ、小手ノ手覆ヲ切ナカサルル太刀ニテ、手綱ノマカリヲツント切レテ、弓手ノ片手綱土ニサカリ、馬ノ足ニ蹈レケルヲ、太刀ヲハ左ノ脇ニ挾ミ、（左、毛利家・北條家本、作レ右、）鎧ノ鼻ニ落サカリ、左右ノ手綱ヲ取合テ結ハレケルヲ、敵三騎、能隙カナト馳寄テ、兜ノ鉢ト總角附トテ、三打四打シタヽカニ切ケレ共、義興些モ騷カズ、閑ニ手綱ヲ結ヒテ鞍坪ニ直リ給ヘバ、三騎ノ敵ハツト馬ヲ懸ノケテ、アハレ大剛ノ武者ヤト、高聲ニ二聲三聲感ジテ、御方

義興ノ奮戰

義治小俣義弘南宗繼ヲ破ル

ノ勢ニソ馳著タル塔辻ノ合戰難儀ナリト見ヘケレハ、脇屋左衞門佐ト、小俣少輔二（義弘）郎ト一手ニ成テ、二百餘騎（二百、金勝院本作三三百）喚テ懸ラレケルニ、南遠江守懸立ラレテ、旗ヲ卷テ引退ヲ見テ、谷々ニ戰ケル兵共、十方ヘ落散ケル間、一所ニ打寄ル事叶ハスシテ、百騎二百騎、思思ニ落テ行、サレ共三浦・石堂カ兵共、餘ニ戰クタヒレテ、サシモ敵ヲ追サリケレハ、南遠江守ハ、今日ノ合戰ニ打洩サレ、左馬頭ヲ具足シ奉リテ、石濱ヲ差シテ落ラレケリ、新田左兵衞佐・脇屋左衞門佐、二月十三日（二月、毛利家本作三三月、非也、北條家・南都本作閏二月二十三日、爲レ得、十三日、今川家・毛利家・金勝院・西源院本、作二十三日、按、本文脫レ字明矣、）鎌倉ノ軍ニ打勝テコソ、會稽ノ恥ヲ雪ルノミニ非ス、兩大將ト仰カレテ、暫八箇國ノ成敗ニ居ラレケリ、〇中略

宗繼基氏ヲ擁シテ石濱ニ走ル

義宗笛吹峠ニ陣ス

大江田氏經等ノ越後勢義宗ニ應ズ

笛吹峠軍、附義宗退越後、義興・義治籠河村城事

新田武藏守ハ、將軍ノ御運ニ退緩シテ、石濱ノ合戰本意ヲ達セザリシカバ、武藏國ヲ前ニナシ、越後・信濃ヲ後ニ當テ、笛吹峠ニ陣ヲ取テソオハシケル、是ヲ聞テ打ヨル人々ニハ、大江田式部大輔（氏經）・上杉民部大輔（憲顯）・子息兵庫助・中條入道・子息佐渡守・田中修理亮・堀口近江守（堀口、金勝院本作二堀河一、非也、近江天正本作二遠江一）・羽川越中守・荻野遠江守・酒匂左衞門四郎・尾澤八郎・風間信濃入道・舍弟村岡三郎（金勝院本無二村岡字一、作二惡三郎一）・堀兵庫助（堀、西源院本作二堀口一）・蒲屋美濃守・長尾右衞門（右、今川家・毛利家・北條家・金勝院・西源院・南都・天正本、及第三十卷本文、作レ左）・舍弟彈正忠・仁科兵庫助（助、北條家・西源院本作レ頭）・高梨越前守・

宗良親王ノ軍笛吹峠ニ出陣ス

尊氏ノ石濱ノ軍ニ會スルモノ八萬餘騎

大田瀧口・千屋左衞門大夫（千屋、毛利家・金勝院・天正本、作二千屋一、西源院本作二千脈一）・矢倉三郎・藤崎四郎（藤崎、天正本、作二藤澤一）・瓶尻十郎（金勝院本、戴二同源五一）・五十嵐文四・同文五・高橋大五郎・同大三郎・友野十郎（友野、西源院本、作二神野一、下倣レ之）、滋野八郎・禰津小二郎・舍弟修理亮・神家一族三十五人（今川家・毛利家・北條家・金勝院・南都・天正本、作三三十二人一、今出川家・西源院本、作二三十一人一、毛利家・金勝院・西源院本、作二十人一、北條家・南都本、作二二十餘人一）、滋野一族、天正本不レ出、）都合其勢二萬餘騎、先朝（後醍醐帝）、第二宮上野親王ヲ（按、宗良也、或稱二信濃宮一、或稱二上野宮一、爲二征東將軍一、出二新葉集一、下倣レ之、西源院本作二五宮一、天正本作二六宮一、皆非也、說見二第一卷一）大將ニテ、笛吹峠ヘ打出ル、將軍小手差原ノ合戰ニ、事故ナク石濱ニオハスル由聞ヘケレハ、馳參リケル人々ニハ、千葉介・小山判官・小田少將・宇都宮伊豫守（金勝院本有二同字一、可レ疑、）・常陸大掾・佐竹右馬助（佐竹、西源院本作二左手一）・同刑部大輔・白川權少輔・結城判官・長沼判官（金勝院本不レ出、）・河越彈正少弼（少弼、毛利家本作レ忠、）・高坂刑部大輔・江戸豐島（自二河越一至レ此、西源院本不レ出、）・古尾谷兵部大輔（按、此上新田義宗起二義兵一段、作二三日一、前後不レ一、未レ知二孰是一、）・三田常陸介（西源院本不レ出、）・土肥兵衞入道（今川家・毛利家・金勝院・西源院本、兵衞上有二次一、）・同修理亮・同出雲守（天正本、戴二岡崎一、）・下條小三郎・二宮近江守・四郎左衞門・本間（今川家本有二左衞門字一、）・澁谷（西源院本有二右馬允字一、）・曾我三河守・同周防守・同但馬守（金勝院・西源院本、戴二同伊豆守一、）・曾我上野介・海老名（今川家・毛利家本、戴二同伊豫守一、）・同河內守・同但馬守・同能登守（今川家本作二五郎一、）・同不レ出、）板垣三郎左衞門・逸見美濃守・白洲上野介・天野三河守・同和泉守・

義興義治鎌倉ニ在リ

尊氏先ヅ義宗ヲ伐タントス

狩野介・長峰勘解由左衞門（長峰、今川家本作二長崎一、第十卷諸本並載二長崎由非濱合戰一、而不レ知レ所レ終、可レ疑、）都合其勢八萬餘騎、將軍ノ御陣ヘ馳參ル、鎌倉ニハ、義興・義治七千餘騎ニテ、著到ヲ附ルト聞ヘ、武藏ニハ（異本作二當吹一、時義宗在二當吹一、）新田義宗（西源院本有二上野字一、）上杉民部大輔（毛利家・天正本云、名顯憲、北條家、南都本、作二義兼一、而此下南帝八幡御退失段、作二顯兼一、前後齟齬、且皆非也、當レ作二憲顯一、註二于前一、）二萬餘騎ニテ控タリト聞ユ、何クヘ向ヘシト評定有ケルカ、（天正本云、尊氏暫思按有テ宣ケル、下同二本文一、）先勢ノ勞セヌ前ニ、大敵ニ打勝ナハ、鎌倉ノ小勢ハ戰ハス共退散スベシト、衆議一途ニ定テ、將軍閏二月二十五日（毛利家本作二三月二十八日一、非也、）石濱ヲ立テ武藏府ニ著給ヘハ、甲斐源氏武田陸奥守・同刑部大輔・子息修理亮（此下蓋衍文也、）武田上野介・同甲斐前司・同安藝守・同彈正少弼・舍弟薩摩守・小笠原近江守・同三河守・舍弟越後守（今川家・毛利家・西源院本、作二越前守一、而此上自二小笠原一至レ此、金勝院本不レ出、）一條四郎・板垣四郎・逸見入道・同美濃守・舍弟下野守（今出川家本作二上野介一、）南部常陸介・下山十郎左衞門（自二武田上野介一至レ此、北條家・南都本不レ出、武田陸奥守、同安藝守、同彈正少弼、同薩摩守、逸見美濃守、及一條・板垣・小笠原、既出下于上赴二石濱陣一之列上、今重出、蓋衍文也、）都合二千餘騎ニテ（二千、今川家・毛利家・北條家・金勝院・西源院・南都本、作二三千一、）馳參ル、（自二甲斐源氏一至レ此、天正本不レ載、）

北條家・南都本云、將軍閏二月二十五日ニ、石濱ヲ立テ武藏府ニ著給ヘハ、甲斐源氏武田刑部大輔・子息修理亮ヲ始トシテ、都合其勢三千餘騎ニテ馳參ル、云々、天正本云、將軍石濱ヲ御立有テ、武藏國府ニ著給ヘハ、三方ヲ伺テ、イマタ何方ヘモ屬ヌ勢、路次ニテ馳加リ、馳加リ雲霞ノ如ク充滿タリ云々、

尊氏笛吹峠ヲ攻ム

同二十八日、（毛利家本作二三月二十九日一、非也、）將軍笛吹峠ヘ推寄テ、敵ノ陣ヲ見給ヘハ、小松生茂テ前ニ小河流タル、山ノ南ヲ陣ニ取テ、峯ニハ錦御旗ヲ打立、麓ニハ白旗（毛利家・北條家・金勝院・西源院・南都本、天正本、載二赤旗一、）中黑・櫻襴葉・梶葉ノ紋書タル旗共（梶、天正本作レ桐、）其數滿々タリ、先一番ニ新手案內者ナレハトテ、甲斐源氏三千餘騎ニテ推寄タリ、新田武藏守ト戰フ、是モ新手ノ越後勢、同三千餘騎ニテ相懸ニ懸リテ、半時許戰フニ、逸見入道以下、宗徒ノ甲斐源氏百餘騎討レテ引退ク、二番ニ千葉介・宇都宮・小山・佐竹カ勢、相集テ七千餘騎、上杉民部大輔カ陣ヘ推寄テ、入亂入亂戰フニ、信濃勢二百餘騎討レケレハ、寄手モ三百餘騎討レテ、相引ニ左右ヘ颯ト引、引ケハ兩陣入替テ追ツ返ツ、其日午刻ヨリ酉刻終マテ、少モ休ム隙ナク、終日戰ヒ暮シテケリ、

天正本云、千葉介・宇都宮・小山・佐竹七千餘騎、新手ニ成テ入替タリ、上杉民部大輔（憲顯）滋野一族二千餘騎、颯ト入亂テ喚叫テ鬪フタリ、何レモ共ニ勇士ニテ、互ニ名ヲ惜ミケル間、命ヲ限ト心サシ、追ツ返シツ、今朝巳刻ヨリ酉終ニ至迄、二十餘度ソ攻鬪ケル、將軍ハ大勢ニテ、入替入替攻入給ヘハ、笛吹峠ハ小勢ナリシカハ、信濃勢二百餘人、思々ニ討死ス、將軍方ニモ五百餘人手負討レテ引退、兩陣共ニ鬪屈シテソ見ヘタリケル云々、（下同、）

夫小勢ヲ以テ大敵ニ戰フハ、烏雲ノ陣ニシクハナシ、烏雲ノ陣ト申ハ、先後ニ山ヲアテ、左右ニ水ヲ界フテ、敵ヲ平野ニ見下シ、我勢ノ程ヲ敵ニ見セスシテ、虎賁狼卒替ル替ル射手ヲ進メテ戰フ者ナリ、此陣幸ニ烏雲ニ當レリ、待テ戰ハヽ利アルヘカリシヲ、武藏守若武者ナレハ、毎度廣ミニ懸出テ、大勢ニ取卷レケル間、百度戰千度懸破ルトイヘトモ、敵目ニ餘ル程ノ大勢ナレハ、新田上杉遂ニ打負テ、笛吹峠ヘソ引上リケル、上杉民部大輔カ兵ニ、長尾彈正、根津小次郎（宗貞）トテ、大力ノ剛者アリ、今日ノ合戰ニ打負ヌル事、身一ノ恥辱ナリト思ヒケレハ、紛レテ敵ノ陣ヘ馳入、將軍ヲ討奉ラント相謀テ、二人ナカラ俄ニ二引兩ノ（西源院本ニ作二一引兩一）笠驗ヲ著替、人ニ見知レシト、長尾ハ亂髪ヲ顏ヘ颯ト振懸、根津ハ刀ヲ以テ、己カ額ヲツキ切テ、血ヲ面ニ流シカケ、切テ落シタリツル敵ノ首鋒ニ貫キ、トツ附ニ取著テ、只二騎將軍ノ陣ヘ馳入、

新田氏敗ル

長尾彈正根津宗貞尊氏ヲ狙フ

北條家・南都本云、長尾ハ黑絲威ノ大アラメナル鎧ニ、同毛ノ鍬形ノ兜ノ緒ヲシメ、五尺八寸ノ太刀ニ、金作ノ太刀一振佩ソヘテ、六尺三寸ノ長刀ノ、タヒラ廣ニテ金蛭卷シタルヲ、馬ノ平頸ニ引添テ、鬼栗毛トテ、八寸二分アリケル名馬ノ太ク逞シキニ、金蒔繪ノ鞍敷テ、水色ノ厚總カケテ、十幅一丈ノ金紗ノ縅、山風ニ颯ト吹ナヒカセタリ、（根）禰津小次郎ハ、フスベ革ノ鎧ニ、同毛ノ兜著テ、七物山ノ如クニ取附テ、鹿毛ナル馬ニ馬鎧カケテ、薄紅ノ大笠驗ニ、一丈アマリニ見ヘタルカナサイ棒、誠ニ輕ケニ提ケテ、分捕シタル敵ノ首、馬ノサンヅニ取附テ、只二騎將軍ノ陣ヘ懸入云々、（下同ニ本文ニ）

數萬ノ軍勢道ニ横ハリテ、誰手ノ人ソト問ケレバ、是ハ將軍ノ御内ノ者ニテ候カ、新田ノ一族ニ、宗徒ノ人人ヲ組討ニ討テ候間、首實檢ノ爲ニ、將軍御前ヘ參候ナリ、開テ通サレ候ヘト、高ラカニ呼ハリテ、氣色バウテ打通レハ、目出タフ候ト感スル人ノミ有テ、思ヒトカムル人モナシ、將軍ハ何クニ御座候ヤラント問ヘハ、或人アレニ控ヘサセ給ヒテ候ナリト、指ヲ指テ教フ、馬ノ上ヨリノヒアカリ見ケレハ、相隔タル事草鹿ノ的山許ニ成ニケル、アハレ幸ヤ、タヽ一太刀ニ切テ落サンスル者ヲト、二人屹ト目動シテ、中々馬ヲ閑々ト歩マセケル處ニ、猶モ將軍ノ御運ヤ强カリケン、見知人有テ、ソコニ紛レテ近ツク武者ハ、長尾彈正ト根津小次郎トニテ候ハ、近附テタハカラルナト呼リケレハ、將軍ニ近附奉ラセシト、武藏・相模ノ兵共三百餘騎、（三百、北條家・南都本、作二四五百一、）中ヲ隔テ左右ヨリ颯ト馳寄ル、根津ト長尾ト、支度相違シヌト思ケレハ、鋒ニ貫キタル首ヲ拋テ、亂髪ヲ振揚、大勢ノ中ヲ破テ通ル、彼等二人カ鋒ニ廻ル敵、一人トシテ兜ノ鉢ヲ胸板マテ、眞二ニ破著ラレ、（天正本云、或ハ馬ノ平頸三頭打落サル云々、）腰ノツカヒヲ切テ落サレヌ

尊氏災難ヲ免ル

ハ無リケリ、北條家・南都本云、サレハ將軍ノ御馬廻二千餘騎ヲ、五六度懸破テ、東西ニ追靡ケ、南北ニ追立ル云々、下同ニ本文ニ、サレ共敵ハ大勢ナリ、是等ハ只二騎ナリ、十方ヨリ矢衾ヲ作テ散々ニ射ケル間、叶ハシトヤ思ヒケン、アハレ運强キ足利殿ヤト、高ラカニ欺テ、閑々ト本陣ヘソ歸リケル、夜ニ入ケレハ、兩陣共ニ引退テ、陣々ニ篝ヲ燒タルニ、將軍ノ御陣ヲ見渡セハ、四方五六里ニ及テ、銀漢高クスメル夜ニ、星ヲ列ルカ如クナリ、笛吹峠ヲ顧レハ、月ニ消行螢火ノ、山陰ニ殘ルニ異ナラス、義宗是ヲ見給ヒテ、終日ノ合戰ニ、兵許多討レヌトイヘトモ、是程マテ陣ノ透ヘシトハ覺ヌニ、篝ノ數ノ餘リニサヒシク見ユルハ、如何樣勢ノ落行ト覺ルソ、道々ニ關ヲ居ヨトテ、栽田山ト信濃路ニ嚴ク關ヲ居ラレタリ、夫士卒將ヲ疑フ時ハ、戰利アラスト云事アリ、前ニハ大敵勝ニ乘テ、後ハ御方ノ國々ナレハ、今夜一定越後・信濃ヘ引返サンスラント、我ヲ疑ハヌ軍勢有ヘカラス、船ヲ沈メ糧ヲ捨テ、二度歸ラシト云心ヲ示スハ、良將ノ謀ナリトテ、皆馬ノ鞍ヲオロシ鎧ヲ脫テ、引マシキ氣色ヲ人ニ見セヨトテ、大將鎧ヲ脫給ヘハ、士卒悉鞍ヲ卸シテ馬ヲ休ム、宵ノ程ハ、皆心ヲ取靜メ居タリケルカ、夜半許ニ續松夥シク見ヘテ、將軍ヘ大勢ノツヽク勢見ヘケレハ、明日ノ戰モ叶ハシトヤ思ハレケン、上杉民部大輔、篝許ヲ燒棄テ信濃ヘ落ニケレハ、新田武藏守其曉越後ヘ落ラレケリ、北條家・南都本云、義宗越後國ヘ落給ヘハ、上杉ハ其曉信濃方ヘ落ラルヽ云々、斯リシ後ハ、只今

義宗栽田山ニ關ヲ設ク

上杉憲顯信濃ニ奔ル

義宗越後ニ退ク

義興義治國府津山ニ退ク

マテ新田・上杉ニ附從ツル武藏・上野兵共モ、イマタ何方ヘモ附スシテ、一合戰ノ勝負ヲ伺見ツル上總・下總者共モ、我先ニト將軍ヘ馳參リケル程ニ、其勢程ナク百倍シテ、八十萬騎ニ成ニケリ八十、毛利家・北條家・南都本、作ニ五十ニ、新田左兵衞佐義興・脇屋左衞門佐義治ハ、六千餘騎ニテ尙鎌倉ニオハシケルカ、將軍已ニ笛吹峠ノ合戰ニ打勝テ、八箇國ノ勢ヲ率シテ、鎌倉ヘ寄給フ由聞ヘケレハ、義興モ義治モ、只此ニテ討死セント宣ヒケルヲ、松田・河村ノ者共、某等カ所領ノ內、相模河ノ河上ニ、究竟ノ深山候ヘハ、只ソレヘ先引籠ラセ給ヒテ、京都ノ御左右ヲモ聞召、越後・信濃ノ大將達ヘモ牒シ合サレ候テ、天下ノ機ヲ得、諸國ノ兵ヲ集テコソ、重テ合戰モ候ハメト、ヨリヨリ强テ申ケレハ、義興・義治諸共ニ、三月四日、鎌倉ヲ引テ、石堂・小俣二階堂・葦名判官・三浦介・松田・河村・酒勾以下、六千餘騎ノ勢ヲ率シテ、國府津山ノ奥ニソ籠リケル、國府津山、金勝院本、作ニ小宇都山ニ、西源院本、作ニ古宇都山ニ、

南帝・八幡御退失、附四條隆資卿討死、并高德入道奉勅下向關東事、

○上略、南朝後村上天皇京都御回復ノ軍ヲ起シ給ヒシガ、山城八幡ノ軍利アラズシテ、大和賀名生ヲ退キ給フコトニ係ル、

今度僞テ京都ヲ攻ラレンタリケルヲ、是カ一大事ナレハ、急東國・北國ニ下リテ、新田義貞カ姪子共ニ義兵ヲ興サセ、小山・宇都宮以下、便宜ノ大名ヲ語ヒテ、天下ノ大功ヲ即時ニ致ス樣ニ、智謀ヲ運

西源院本、作ニ忠繼ニ、下倣ヒ之、召レテ參リ爲ニ、先住吉天王寺ヘ行幸成タリシ時、兒島三郎入道志純（高德）モ

セト仰出サレケレハ、志純夜ヲ日ニ繼テ關東ヘ下リタレハ、東國ノ合戰早事散シテ、新田義興・義治ハ、河村ノ城ニ楯籠リ、武藏守義宗ハ、越後國ニソ居タリケル、勅使東國・北國ニ行向テ、君已ニ大敵ニ圍マレサセ給ヒテ、助ノ兵力疲ヌ、若神龍化シテ釣者ノ爲ニ捕ハレサセ給ヒナハ、天下誰爲ニカ爭ハント、義ノ重キニ依テ、命ヲ輕ンスヘキ習ヲ申ケレハ、小山五郎（今川家・毛利家・北條家・金勝院・西源院・南都本作「西郎」）宇都宮少將入道モ、勅定ニ隨フナリトテ、東國靜謐ノ計略ヲ運スヘキ由約諾ス、義興・義治ハ尙東國ニ逗リテ將軍ト戰ヒ、新田武藏守義宗・桃井播磨守直常・上杉民部大輔吉良三郎滿貞・石堂入道・東山・東海・北陸道ノ勢ヲ率シ、二手ニ成テ上洛シ、八幡ノ後攻ヲ致シテ、朝敵ヲ千里ノ外ニ退ヘシト、諸將ノ相圖ヲ定テ、勅使先立テソ上リケル、去程ニ新田武藏守義宗ハ、四月二十七日、越後津張ヨリ立テ七千餘騎、越中放生津ニ著ハ、桃井播磨守直常、三千餘騎ニテ馳參ル、（三千、天正本作「二千」）都合其勢一萬餘騎、九月十一日、（按、五月八幡沒落、至「九月」何有「此事」、毛利家・北條家・金勝院・西源院・南都・天正本作「五月」、爲「得」）前陣已ニ能登國ヘ發向ス、

〔參考〕

〔官報〕（大正四年十一月十日）

贈正五位

（兒島高德勅使トナリ東國北國勤王ノ兵ヲ募ル）

（義宗越後津張ヨリ京都ニ向フ）

（桃井直常之ニ應ズ先陣能登ニ至ル）

（村山義盛贈正五位）

故村山義盛

八月（大盡辛丑朔）

三日、（癸卯）、越後ノ南軍風間越後守・同長賴等、村山義盛代方切光義等ヲ率キ、同國ノ尊氏黨池・多劫・石坂諸氏等ト藏王堂ニ戰ヒテ之ヲ破リ、進ンデ大面莊ニ戰フ、

〔村山文書〕（前○羽）

着到

村山七郎義盛代方切七郎光義軍忠事、（○義盛ノ死セルコト、本年閏二月二十八日ノ條ニ見ユ、）

右越後國奥郡（南蒲原郡）凶徒池・多劫・石坂以下之輩令蜂起、今月三日押寄藏王堂、及散々合戰、凶徒等打負、楯籠大面庄（古志郡）之由依有其聞、大將軍風間越後守殿御發向之間、屬于彼御手、同五日馳向當庄、令致軍忠候上者、給御證判、爲備後證、恐々言上如件、

正平七年八月　日

承了（花押）

〔參考〕

〔越後野志〕（十六古志郡）

藏王堂城　古城趾　藏王堂城

大島莊藏王村ニ在、城主長尾新次郎爲重、後ニ堀美作守親直居城、

九月（大盡辛未朔）

三日、（癸酉）、足利義詮、上杉憲顯ニ令シ、丹波安國寺雜掌ニ、越後鵜河莊安田條ノ地ヲ

沙汰付ゼシム、

〔安國寺文書〕乾○丹波

丹波國安國寺雜掌申、越後國鵜河(刈羽郡)庄内安田條上方事、訴狀具書遣之、子細見狀畢、莅彼所、來月十日以前可沙汰付雜掌於下地、若令違犯者、任事書之旨、可致沙汰(義詮)之狀如件、

(花押)

觀應三年九月三日

守護(上杉憲顯)

正平八年癸巳　紀元二千十三年　北朝文和二年

十月大乙未朔盡

六日庚子、南朝折橋兵庫助名闕ノ、功ヲ賞シテ、越後頸城郡本郷ノ内、西時員跡ヲ賜フ、

〔色部文書〕○羽前

〔折橋兵庫助殿〕(包紙)

勘解衞門花押

越後國頸(城)木郡下(中頸城郡)本郷内西六郎三郎時員跡、爲勳功賞、可令知行者、天氣如此、悉之以狀、

正平八年十月六日

勘解由次官(花押)

折橋兵庫助殿

十一月大乙丑朔盡

八日壬申、越後ノ北軍和田義成・景茂父子、阿賀川ヲ越エテ、南軍ヲ河内城ニ擊チ、進ミテ小國ノ南軍ト新堀宿ニ戰フ、是日、又、宗良親王、新田義宗竝ニ脇屋義治等ト乙面ニ戰ヒテ、之ヲ走ラス、

義成軍忠狀

〔三浦和田文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

三浦和田三郎左衞門尉義成軍忠事、

當國越後御發向之間、自最前馳參、同時渡阿賀河追籠河内凶徒等城内、今月五日出張小國城御敵之間、於新堀(西蒲原郡)宿致合戰、同六日古志郡(三島郡)乙面陣仁馳付候之處、同八日夜一品宮(宗良親王)、新田武州(義宗)脇谷金吾(義治)以下沒落候了、同十三日至于藏王堂(古志郡)下着、致忠節候了、此等子細御見知之上者、爲賜御證判之狀如件、

藏王堂ニ着ス

文和二年十一月十六日

(裏花押)

(裏花押)

景茂軍忠狀

三浦和田余三景茂軍忠事、

當國越後御發向之間、自最前馳參、十月廿五日越阿賀河追籠河内凶徒等城内、今月五日小國御敵出張之間、於新堀宿致合戰、同六日古志郡乙面陣仁馳著候之處、同八日夜一

品宮新田武州脇谷金吾以下沒落候了、同十三日至藏王堂下着候了、此等子細御存知上者、賜御判爲備向後支證之狀如件、

文和二年十一月十八日　（裏花押）

〔村山文書〕○羽前

人皇九十九代　北朝後光嚴院御院宣　細川伊豫守繁氏（宇都宮氏綱ナラン）公證判、

越後國凶徒一品宮（宗良親王）以下對治之間、親父（高直）討死之條、忠功之至、甚神妙也、可有其賞之狀、依仰執達如件、

文和二季十二月九日　村山熊王殿（隆直）　伊豫守（宇都宮氏綱）

○宗良親王並ニ義宗等、宇加地ヲ攻メ、景茂之ヲ援フコト、正平九年九月二十三日ノ條ニ、隆直、風間長賴ニ從ヒテ、南軍ヲ擊ツコト同十年三月四日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔源姓村山系圖〕○羽前

系圖

- 隆義　村山彌二郎、
- 西義　村山中務入道、
- 高直　村山九郎、　高直長尾清景ニ屬シテ南軍ト戰フ　高直戰死ス　熊王丸名チ隆直ト改ム
  - 康永四年二月、越後國凶徒彌智大炊助、仁科右馬助以下爲退治而長尾太郎二郎清景發向、向沼川之間、屬清景、可致軍忠旨、北朝人皇九十七代光明院御院宣下賜依、正月晦日馳向、同二月六日合戰有軍忠、文和二年十二月九日、越後國凶徒一品宮御退治戰、抽忠戰討死、
  - 熊王丸　文和二年、父村山九郎高直、越後國凶徒一品宮御退治戰討死、依レ之北朝人皇九十九代後光嚴院賜レ下御院宣、父高直討死、忠功之至、依御堂之狀、執事細川伊豫守繁氏以證判賜、後村山大膳介隆直ト改、本氏相續、

平姓三浦和田系圖　和田系圖

〔羽前〕○伊佐早謙氏所藏

- 茂明七郎、
- 茂繼三郎、
- 茂資土佐守、
- 茂泰羽黑八郎、
  - 茂連和田三郎左衛門尉、
  - 義成三郎左衛門尉、
  - 景茂余三、

南朝正平八年　北朝文和二年十一月八日

河内山

〔越後野志〕六古城趾　蒲原郡　河内山　紙屋庄、河内谷ノ南方ニ在リ、白山ノ東南ニ連續シテ、高峯峻嶺、數十百相連リ、十餘里ニ亘ル、山峽谷中、村落十三邑アリ、之ヲ河内谷ト名ツク○下略

雷城

〔越後野志〕十六古城趾　蒲原郡　雷城　紙谷庄、河内谷、水戸野村、山中ニ在テ堅固ノ城地也、山中八分ニ水アリ、○下略、河内ノ城址ハ後世雷ト稱スルモノニ當ルカ、明瞭ヲ缺ク、

正平九年甲午　紀元二千十四年　北朝文和三年

二月小盡甲午朔

八日、辛丑、尊氏、宇都宮氏綱ヲシテ、和田茂資ニ、越後豐田莊、並ニ奥山莊金山郷ノ地ヲ沙汰付セシム、

〔讀史堂古文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

三浦和田土佐守茂助(資)申、越後國豐田庄(北蒲原郡)、並、同國奥山庄(北蒲原郡)金山郷事、任今月六日御下文之旨、可致沙汰付茂資之狀、依仰執達如件、

文和三年二月八日　　(畠山國清)修理權大夫

宇都宮伊豫守(氏綱)殿

○茂資、本條ノ地ヲ牛法師等ニ讓ルコト、正平十年八月二十五日ノ條ニ見ユ、

三月大盡癸亥朔

二十八日、戊子、北朝除目ヲ追行ス、參議葉室長顯ヲシテ、越後權守ヲ兼ネシム、

〔公卿補任〕文和三年　參議從三位藤長顯(葉室)、三十、三月廿八日、兼越後權守、元備前權守、去年秩滿、

八月小盡庚寅朔

二十二日、辛亥、和田茂資、越後奥山莊中條ノ内鼓岡ノ地ヲ、大輪寺ニ寄進ス、

〔大輪寺文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

奉寄進　大りん寺(北蒲原郡中條町)の寺領の事、

ふちこの國奥山の庄(北蒲原郡)中條のうち、つゝみ(鼓岡)をかの村田・さいけ・山野一ふんに、さしん申處也、四至界はいにしへよりさたまり候なり、

右の心ざしは、父祖のため、つきに茂資が現當二世のため也、もし茂資が跡を知行せん子孫にをひて、かの寺りやうに、いろいくつかへす事候はゝ、身かためにはふけうたるへく候、なかく茂資か跡を知行すへからす、かみの御はからいとして、茂資か跡をけつしよにめしおかれ、此寺をは、公方の御寺となさるへく候、仍後日のために寄しん狀如件、

文和三年八月廿二日　　土佐守茂資(和田)花押

○茂資ノ子政義、マタ是地ヲ大輪寺ニ寄進スルコト、正平二十三年二月二十五日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔北越雜記〕八　平田山大林（輪）寺曹洞宗　足羽郷奥山庄中條

大林寺平田和尚ノ開基

當寺開基は平田和尚にて、その名を以て山號とす、平田和尚は南禪寺の住持にて、一源會統和尚の師なり、其行狀名僧行錄にくわしけれども、爰に擧ず、當寺地藏堂の傍に梵文字の古碑あり、平田和尚の建る所にして、貞和二年戊八月と記せり、

九月大盡己未朔

二十三日、辛巳、宗良親王、新田義宗・脇屋義治等ト越後宇加地城ヲ攻メラル、是日、和田茂資之ヲ援フ、

和田景茂軍忠狀義成茂資ニ屬シ宇加地城ヲ援フ

〔三浦和田文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

「（端裏書）三浦和田三郎左衞門尉代目安文和三十七」

三浦和田三郎（義成）左衞門尉代子息余三景茂申

右當國御敵一品親王（宗良親王）千種相掌（顯經カ）家新田武衞（義宗）脇谷（義治）金吾（屋）、並魚沼一族等打出、御方宇加地（北魚沼郡）城責之間、爲後攻、被發向三浦和田土佐（茂資）守之間、屬于彼手、去九月廿三日馳向、致忠節畢、仍此等次第御見知之上者、賜御證判、爲備後證、言上如件、

文和三年十月五日　花押（裏ニ）

○和田義成父子、宗良親王並ニ義宗等ト乙面ニ戰テ、之ヲ破ルコト、正平八年十一月八日ノ條ニ、又之ヲ志都乃岐大島ニ破ルコト、同十年四月二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔越後野志〕一郷莊保谷　魚沼郡　宇賀地郷有十村

宇賀地郷

十月大盡己丑朔

六日、甲午、沙彌宗長、越後小泉莊牛屋條ノ地、並ニ在家ヲ姉色部氏ニ讓ル、

〔色部文書〕○越後櫻井市作氏所藏

ゆつりまいらせ候所りやうの事、

越後國小泉庄牛屋條の内、長□（法名宗長）知行分田千束苅、並に在家一宇（親證房在家）、いろへのあねこにゆつりまいらせ候、但御公事御年貢惣領のしさいに御さたあるへく候、又御一この後は、うしやの惣領のちきやうたるへし、よてゆつり狀如件、

田千束刈在家一宇

文和三年十月六日　沙彌宗長

十二月大盡戊午朔

二十七日、甲申、尊氏、常陸ノ佐竹義春ヲシテ、北陸ノ南軍ヲ擊タシム、

〔秋田藩採集文書〕四

北國凶徒蜂起之間、已所發向□□近江也、早存其旨於國可致忠□□（節之カ）狀如件、

文和三年十二月廿七日　（尊氏）（花押）

佐竹（義春）三郎入道殿

正平十年乙未（大盡 丁亥朔）　紀元二千十五年　北朝文和四年

三月

村山隆直軍忠狀

隆直長頼ニ屬シ憲將等ト戰フ

六角峰陷ル

柿崎城陷ル

四日、庚寅、上杉憲將、宇佐美一族等、兵ヲ起シテ、越後顯法寺城ニ據ル、北軍風間長頼之ヲ攻メテ陷ル、尋デ、憲將等、更ニ柿崎城ニ據ル、長頼マタ攻メテ之ヲ陷ル、

〔村山文書〕○前

村山大善介（膳）隆直申軍忠事、

右當國（越後）御敵上杉（憲將）武庫・宇佐美一族已下、去三月四日於佐美庄（中頸城郡）顯法寺城旗揚之間、屬風間右京亮長頼御手、打入佐美庄（中頸城郡）、同十二日致散々合戰、追落六角峰（中頸城郡）御敵、攻寄彼城數日致合戰、同廿五日、自東尾追落畢、然ニ彼御敵等栖籠柿崎城（中頸城郡）之間、同廿六日馳向當城、致散々合戰之處ニ、四月十四日、彼凶徒等、或沒落、或令降參畢、仍軍忠之次第、長頼御見知之上者、給御證判、爲備後證、恐々言上如件、

文和四年四月日　承了（花押）

隆直

隆直長頼ニ屬ス

〔源姓村山系圖〕○前○羽　隆直　南朝後村上院奉守護、于時文和四年三月四日、越後國御敵上杉兵庫頭憲房（將カ）・宇佐美一族以下、泉州（ヾ）於佐美庄（中頸城郡）顯法寺城揚旗、風間右京亮長頼屬御手、村山大膳介隆直打入佐美庄江、同十二日、致散々（合戰脫カ）御敵追落六角峯、然御敵數日彼之城責、同二十五日至、自東尾追落、御敵等退而栖籠柿崎之間、同二十六日、不時（ヾ）日不移、馳向當城、戰事及于數日、散々合戰之處、同四月十四日至、彼凶徒等或沒落、令降參、仍軍忠長頼見知之上奏聞、依南朝後村上院應安四年三月崩、依之暫合戰之旗揚事止、依南朝退、上野國車郡住村山右京亮源隆直ト改、

後上野ニ住ス

○村山系圖、年月地名等ニ錯誤アリ、記事疑フベキモノアリト雖モ、姑ク茲ニ揭記シテ、參考ニ資ス、又長頼、南軍トシテ尊氏黨池多劫諸氏ト藏王堂ニ戰フコト、正平七年八月三日ノ條ニ、憲將、小笠原長基ト戰フコト、四月十六日ノ條ニ見ユ、

四月（小盡 丁巳朔）

二日、戊午、北軍和田茂資、河内城ノ南軍ト越後青海莊賀茂口陣峰ニ戰ヒテ、之ヲ破

ル、尋デ、又宗良親王・脇屋義治等ト志都乃岐荘・木野島・大島荘平方原等ニ戰フ、

〔三浦和田文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

和田義成軍忠狀

三浦和田三郎左衞門尉義成軍忠事、

右當國越後凶徒等蜂起之間、屬三浦和田土佐守茂資手、不レ廻二時日一馳向之處、河内(中蒲原郡)御敵等出張、差塞路次之間、今月二日青海庄賀茂口於陣峰(南蒲原郡)致散々合戰、追落畢、同三日藏王堂(古志郡)仁馳著、同七日一品宮(宗良親王)脇谷(脇屋義治)金吾以下御敵等、志都乃岐(古志郡)庄於木野島出向之間、守護相共致散々合戰之時、被切乘馬、吉田彌次郎時綱被疵、弓手脇被レ切、同日於大島(古志郡)庄平方原、致散々合戰畢、此等次第御見知之上者、賜證判、爲レ備二支證一、言上如レ件、

義成等藏王堂ニ着ス

文和四年四月廿九日

承了(花押)

○和田義成等、南軍ト戰ヒ、宗良親王並ニ新田義宗等逃レ去ルコト、八年十一月八日ノ條ニ、又親王、並ニ千種宰相・義宗等ト、宇加地城ニ戰フコト、九年九月二十三日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

陣峯城

〔越後野志〕十六古城跡　蒲原郡　陣峯城　青海荘八幡村林中ニ在、

〔越後野志〕一郷庄保谷　古志郡　土土野岐庄　東鑑、土作レ度、後世作二祓拔荘一、

十土野岐荘

十六日、壬申、上杉憲將、信濃禰津孫次郎等ト共ニ、足利義詮ニ屬セル小笠原長基ト戰フ、

〔勝山小笠原古文書〕乾

上杉兵庫助(憲將)禰津孫次郎以下凶徒等、致二合戰一由事、去月十六・十七兩日戰功注進狀披見訖、致二忠節一云々、尤以神妙也、爰於二國人等不參輩一者、爲有二殊沙汰一、可レ注二申交名一也、相殘敵陣城等者、不日可二對治一之狀如レ件、

文和四年五月廿六日　小笠原兵庫助(長基)殿　(義詮)(花押)

○憲將、越後柿崎城ニ據リ、風間長頼ニ攻陷セラルヽコト、三月四日ノ條ニ見ユ、

六月大乙卯盡朔

二十九日、癸未、駿河守某氏名ヲ闕ク、和田茂資ニ、越後小泉荘ノ内二分方ヲ渡付セシム、

打渡狀

〔伊佐早謙氏所藏文書〕○羽前

小泉庄(岩船郡)内貳分方事、任二被仰下一之旨、所二打渡(マヽ)一和田土佐守茂助(資カ)也、仍渡狀如レ件、

文和四年六月廿九日　駿河守

七月小盡 乙酉朔

三日、丁亥、藤原頼文、阿闍梨祐安ニ、越後浦佐天王堂院主職ヲ安堵セシム、

〔浦佐普光寺文書〕○越後

宛行

越後國浦佐天王堂

院主職事

右彼於院主職者阿闍梨祐安不可有相違、如先々可致御祈禱之忠所也、仍爲後日安堵之狀如件、

文和四年七月三日　藤原頼文（花押）

〔参考〕

〔越後野志〕十佛寺　魚沼郡　普光寺

同郷浦佐ニ在、毘沙門堂別當ニテ寺領五十石、毎年正月十五日・十六日、諸人毘沙門堂ニ參詣シ、香花ヲ捧テ拜スル者夥シ、又八月三日・十三日・二十三日同上、此ヲ毘沙門市ト名ツケ、諸方ノ商客輻湊シ、貨物ヲ買賣ス、

〔附錄〕

〔特別保護建造物並國寶目錄〕

普光寺毘沙門堂　桁行五間、梁間五間、單層、屋根入母屋造、茅葺、　南魚沼郡浦佐村　普光寺

八月小盡 甲寅朔

二十五日、戊寅、和田茂資、其所領越後奥山莊中條等ヲ牛法師等ニ讓ル、

〔伊佐早謙氏所藏文書〕○羽前

豐田莊　瀬波郡　嫡子孫松　小法師

今度まかりたち候はんもしいかなる事も候はゝ、茂資がほんりやう、ゑちこの國を（北）蒲原郡）く山のしやう中條あいのかつうち山、又をしやうの地かな（金）山とへたのしやう（豐田）、せな（瀬波郡）みこほりの二ぶ（二分）方ともに、うし（牛法師）はうしにゑいたいゆつるところ也、代々もんしよは、そめやの介にあつけをきてんとられ候へし、ちやくしまこ松は、小そう（僧）たる間、ゆつるにまとりつす（マヽ）、中條のうちついちの（築地）村は、ついちはこほう（小法師）しにとらする、こほうしいかなる事も候はゝ、によし（女子）二人いちこしりてのちは、うしほうしそうりやうたるうへは、ちきやうすへし、よつて爲後ゆつり狀如件、

文和四年八月廿五日　土佐守（和田）茂資花押

○尊氏、宇都宮氏綱ヲシテ、茂資ニ、豐田莊並ニ奥山莊金山郷の地を沙汰付シムルコト、九年二月八日ノ條ニ見ユ、

十二月大壬子朔盡

二十二日、癸酉、越後稱念寺遊行一鎮寂ス、

〔遊行歴代譜〕　六祖一鎮（藤澤三代元七條三代二祖御弟子元學阿）　九十五代後醍醐天皇嘉暦二丁卯四月一日於越後國曾禰津長福寺、賦算五十、遊行十二年、九十九代後光嚴院即位四年、文和四乙未年十二月廿二日於相州藤澤山（清淨光寺）入寂、七十九、入戒十九、獨住十八年、當代藤澤轉敷地而再興、八十一坪之堂也、

傳記　遊行六代曾根津長福寺

〔參考〕

〔越後頸城郡誌稿〕二十六　西方山稱念寺、時宗、寺領百五拾石　高田表寺町

稱念寺

本寺　相劦藤澤清淨光寺、

本尊　阿彌陀如來、惠心僧都作、

開基　遊行六代藤澤三代、一鎮上人世ニ鐙上人ト稱ス、

正慶二年頸城郡國府、此地今ノ五智ト善光寺濱トノ間ナリ、ニ於テ一寺創立シ、應稱寺ト號ス、當時二世蔭阿上人ノ代ニ稱念寺ト改ム、後上野國山名廣臺寺ヲ建立、文和四年乙未十二月廿二日寂、

鐙上人ト稱ス　應稱寺ヲ創建ス

一鎮上人四十三歳ノ眞像

鐙上人略緣記

抑當寺開山遊行六代一鎮大和尚ノ濫觴ヲ奉尋ニ、御生國ハ當國魚沼郡妻有ノ庄中庄民部ノ一子ナリ、御年十三歳ノ春、同國曾根津長福寺但阿和尚ノ弟子ト成給ヒテ、諱ヲ一鎮ト申ケルナリ、生得怜悧ニシテ一ヲ聞テ十ヲ開悟シ玉ヘハ、師ノ御房モ此僧ハ凡僧ニアラサル事ヲ悟リ、塵涯邊土ニ留ムヘキニアラスト、正安三乙丑年三月、御年十六歳ニテ、洛陽七條道場遊行二世眞教上人ノ御許ヘ遣シ給フ、彼ノ地ニ於テ、螢雪ノ勤學怠慢ナク、廿五年ノ法臘ヲ滿シ、諸經論ノ奥議ヲ究メ、三十六歳ニシテ遊行御修行ノ衆頭トナラセ玉ヒ、嘉暦二卯年ノ秋、當國ニ下向マシ〳〵テ、曾根津長福寺ニ於テ、彌陀本願ノ趣ヲ弘通アラセ給フニ、貴賤群集シ、信心肝ニ徹シテ聽聞シ、念佛往生ノ安心ニ本ツキケルトナン、然ルニ嘉暦三年、遊行五代安國上人御隱遁ニ付、六代上人御交代ハ、四月朔日ト定メ、諸國ノ末山三月中ニ藤澤山ヘ相詰申ヘキ由ノ御沙汰ニヨリ、各寺追々登山セラレケレハ、長福寺和尚モ、御弟子一鎮長老ヲ留守居トナシテ登山致サレケレハ、趾ニテ一鎮長老モ登山致シ、遊行上人繼目ノ御式ヲ拜シ度思ヒ立、夜ヲ日ニ繼テ、頸城郡關山ニ至リ、師ノ御馬ニ追ツキ、拙僧モ是非ニ御召連ナシ下サレ度ト願ハレケレハ、御師ハ以ノ外ニ立腹マシ〳〵テ、鐙ヲ以テ長老ヲ

鐙上人略緣起　魚沼郡妻有莊ノ産　一鎮ト稱ス　眞教ノ弟子トナル　越後長福寺ニ住ス

蹴玉ヘケレハ、額ヨリ血流レテ悶絶シ給フヲ、里人見ルニ忍ヒス、イタワリ介抱申シ上ケレハ、程ナク心附、痛ミ所ヲ鉢巻シテ、路次ヲ急キ給ヘハ、師ノ御房ヨリ先達テ御着有テ、遊行交代ノ式ヲ忍ンテ拜サント、椽ノ下ニ隱レ給フニ、諸國ノ御末山相詰、御繼目ノ法要始リ、既ニ三日月ノ初夜ノ御和讃ノ中頃ニ至リテ、不思議ヤ熊野大神ノ御正殿ノ内ヨリ、一筋ノ光明椽ノ下ヘ指ケレハ、一會ノ大衆コレヲ見テ、椽板ヲ引放チ見ルニ、一鎮長老居玉ヘハ、是則神慮ニ叶ヘ玉フ御方ナレハトテ、法衣ヲ改メ、神前ニ於テ法燈相承殘ル所ナク相濟、右ノ趣ヲ奏聞アリケレハ、則遊行六代一鎮ト御綸旨成シ下サレケレハ、直ニ關東御化導ヲ始メサセ給フ、世ニ鐙上人ト申奉ルハ、此一鎮上人ノ御事ナリ、爾ルニ上人末世有緣濟度ノ德マシ〳〵ケルニヤ、御十念ノ御札ヲ拜受セシ人々ハ、聾者足ナヘシ者マテモ利益ヲ蒙リ、其痛ヲ免レシコト擧テ數ヘ難シ、夫ヨリ奥劔筋御巡行遊ハサセラレ、當國ニ移リ、國府ニ來リ給ヘケルニ、不思議ナルカナ、紫雲虛空ニ棚引、雲中ニ聲有テ告給ハク、此地ハ上人有緣ノ所也、自ノ形像ヲ殘シ、一宇ヲ建立シテ、永ク末世ノ衆生ヲ法緣セヨト告玉ヘハ、上人希有ノ思ヲナシ、等身ノ形像ヲ彫刻シ、當寺ヲ建立シ、御信仰ノ阿彌陀如來ヲ安置シ奉リ、西方山無量壽院稱念寺ト號シ、上人當寺ヲ御創立ヨリ、凡五百有餘年ノ星霜ヲ經ルト雖トモ

遊行六代トナル

稱念寺ヲ開創ス

于、今上人四十三歳ノ御肖像、誠ニ靈驗新タニシテ、諸願滿足ノ御誓願空シカラス、サレハ參詣ノ人々、異口同音ニ唱名トモロトモ禮拜アルヘキモノナリ、

正平十一年丙申　紀元二千十六年　北朝延文元年

三月小壬午朔盡

二十二日、癸卯、僧白木、越後應稱寺ニ時宗ノ念佛ヲ弘傳ス、

〔遊行歷代譜〕　九代白木六代御弟子元界阿

九十九代、後光嚴院即位八年、延文元丙申三月廿二日、於越後國府應稱寺、今稱念寺、賦算四十二、遊行十二年、同帝十九年、貞治六丁未六月十八日、於駿州府中長福寺入滅、五十四、

入滅

八月小己酉朔盡

六日、甲寅、駿河守某、和田茂實ノ所領、越後奥山莊鹽谷・堰澤・鍬江・荒居等ノ地ヲ、誤リテ給人ニ渡付セルニ依リ、更ニ之ヲ茂實ニ安堵セシム、

〔讀史堂古文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

越後國奥山庄内（北蒲原郡）鹽谷・堰澤・鍬江・荒居等事、誤雖被付給人、理運無子細之上者、如元可有知行狀如件、

延文元年八月六日　駿河守

和田下野權守殿（茂賢）

○幕府、和田茂長ノ女玄法ノ訴ニ依リ、長尾景忠ノ鹽谷・堰澤等ノ地頭職ヲ押妨スルヲ停メシコト、興國五年閏二月四日ノ條ニ見ユ

十月（大丁未朔盡）

二十三日、己巳、上杉憲將、長尾景友・市河經高等諸氏ヲ率キテ、信濃小菅要害ヲ攻メ、尋デ、平林ニ戰フ、

〔市河文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

市河備前守經高軍忠之事、

右屬大將上杉兵庫頭（憲將）殿御手、今月廿三日、小菅用害搦手馳向大菅口、致散々合戰、御敵高梨二位阿闍梨・同三郎五郎打取畢、同廿八日、平林（信濃上水内郡）合戰、致軍忠畢、此等次第、長尾勘解（景友）由左衞門尉見知上者、賜御證判、爲備龜鑑、恐々言上如件、

正平十一年十月　日

承了（花押）

市河備前權守經高軍忠之事、

右當國凶徒爲對治、大將（上杉憲將）御發向之間、屬御手、去十月廿一日、高井郡取陣處、不廻時剋、御敵寄來間、致散々合戰、追歸畢、同廿三日、小菅寺合戰分取、並郎等被疵候、同廿八日、平林合戰、致軍忠候畢、此等次第大將御見知之上者、賜御證判、備向後龜鏡、恐惶謹言、

正平十一年十二月　日

一見了（花押）

〔參考〕

〔上杉系圖〕續群書類從百五十三　上杉氏系圖

憲顯　執權、民部大輔、從五位下、越後守、安房守、

- 憲將　兵庫助、母木戸氏、號楊嚴院如然爾公、貞治五年六月二十六日死、
- 能憲　重能養子、號宅間修理亮、
- 憲英　兵部少輔、藏人大夫、陸奥守、始號憲定、
- 憲春　刑部大輔、
- 憲賢　越後次郎、
- 憲方　右京亮、安房守、
- 憲榮　童名龍樹丸、

越後次郎

南朝正平十一年　北朝延文元年十月二十三日

十二月（小丁未朝盡）

九日、乙卯、駿河守某、幕府ノ命ヲ承ケテ、越後ノ村山隆直ヲ誘招ス、

〔村山文書〕○羽前

參御方、被致忠節者、於本領、不可有相違由候也、仍執達如件、

延文元年十二月九日　駿河守（花押）

村山（隆直）右京亮殿

○隆直、北軍風間長頼ニ從ヒ、上杉憲將ヲ擊ツコト、正平十年三月四日ノ條ニ見ユ、

正平十二年丁酉（紀元二千十七、北朝延文二年）

正月（大丙子朔盡）

二十五日、庚子、左衞門尉某（氏名闕ク）、舊ニ仍リ、鎌倉覺園寺ニ、其所領越後埴生保ヲ渡付ス、

〔覺園寺文書〕○相模

越後國荊羽郡埴生保之内、覺音寺（園）領事、

右任先例、知行不可有相違、仍渡狀如件、

延文二年正月廿五日　左衞門尉（花押）

六月（大甲辰朔盡）

十一日、甲寅、幕府、越後小泉莊ノ内二階堂行貞跡・城介入道跡・後藤信濃入道跡等ノ地ヲ、兵粮料トシテ色部長忠ニ預置キ、軍功ニ從ヒテ、一族ニ分配セシム、

〔色部文書〕○越後櫻井市作氏所藏

當國瀨波郡（岩船郡）小泉庄内城介入道跡、五藤（後）信乃入道跡、二階堂山（行貞）城入道跡等事、爲兵粮料所、々被預置也、一族並同心之輩、依忠淺深、可被配分之由候也、仍執達如件、

延文二年六月十一日　伊賀守（花押）

色部（長忠）遠江守殿

○幕府、上杉憲顯ニ令シテ、城入道等跡闕所分ヲ處分セシムルコト、興國四年三月四日ノ條ニ見ユ、

九月（大壬寅朔盡）

十五日、丙丑、淨阿、越後長松ニ、供養塔ヲ建ツ、

〔供養塔〕○北魚沼郡藪神村大字長松所在

正平十二年九月十五日　淨阿敬白

○長松所在ノ供養塔、類ヲ以テ左ニ合叙ス、

○梵字一略ス、

正平ノ塔

〔供養塔〕

正平□□□□一〇梵字略ス、

應安七年四月八日ノ塔

應安七年四月八日一〇梵字略ス、

孝子敬白

應安ノ塔

應安□□□□三〇梵字略ス、

孝子敬白

〔參考〕

長松ノ古牌五

〔新編會津風土記〕百十七小出島組　外篇越後魚沼郡之七江口村古蹟　古碑五　共ニ枝村長松ノ東、道ノ側ニアリ、東端ニアルモノ長一尺計、應安七年四月八日孝子敬白ト彫付アリ、其西ハ長一尺、其次ハ長二尺計、共ニ孝子敬白トアリ、其餘文字アレトモ、剝缺シテ辨スヘカラス、其次ハ長一尺五寸餘、正平十二年九月十五日淨阿敬白トアリ、最西ナルハ半ヨリ折テ文字詳ナラス、皆野面石ニテ、上ニハ梵字ヲ鐫ル、村民往々ニ田間ヨリ掘出セシトソ、

魚沼三郡內ノ供養塔鰐口

○魚沼三郡內ニ在ル供養塔、鰐口等、文保ヨリ至德年間ニ至ルモノ、類ヲ以テ便宜左ニ合收ス、

文保六年三月ノ塔

〔供養塔〕〇南魚沼郡大富村大字思川所在

文保六年三月

貞和三年七月ノ塔

〔供養塔〕〇北魚沼郡吉谷村大字吉谷所在、高一尺五寸、横七寸、厚一寸、板碑左右ニ花瓶ヲ刻ス、

貞和三年丁亥七月　日　〇梵字之略ス、

貞和三年十月十日ノ塔

〔供養塔〕〇南魚沼郡大崎村大字大崎字諏方ノ木龍谷寺所在

貞和三年十月十日

孝子敬白

貞和六年二月十五日ノ塔

貞和六年二月十五日

□□敬白

貞和六年四月十日ノ塔

貞和六年四月十日

觀應元年中夏十五日ノ塔

諭一字一石英奄倖刹界三

皆觀應元年中夏十五日

千群品窮竪三世盡橫十方

印□敬白ノ覺智行者字略ス、〇表ノ梵

正平十年二月十日塔ノ　正平十年二月十日　○梵字略ス、　施主敬白

貞治六年十一月廿八日塔ノ　貞治六年十一月廿八日　○梵字略ス、　敬白

貞治六年十二月十八日塔ノ　右志者爲過去悲母聖靈故也、○梵字略ス、　貞治六年十二月十八日

應安八年四月五日ノ塔　右志者爲具法禪尼奉造立故也、○梵字略ス、　應安八年四月五日　孝子敬白

應安八年七月八日ノ塔　應安八年七月八日　○梵字略ス、　孝子敬白

永德元年七月ノ塔　勢至足音（マヽ）四魔三陲元臨刑陰廣單不臨　永德元年七月日　孝子敬白

應安二年六月ノ塔　應安二年六月吉日　○梵字略ス、

康曆ノ塔　康曆□□□□

永德二年三月ノ塔　永德二戊年三月吉日　孝子敬白

龍谷寺

〔參考〕

〔新編會津風土記〕百十六　滑郡六　外篇越後國魚沼郡大崎村　龍谷寺　村南ニ在リ、山號ヲ八海山ト云、上野國小川村嶽林寺ノ末寺曹洞宗ナリ、開基ノ年代ヲ詳ニセス、モトハ村南堂平山ニアリシヲ、天文年中嶽林寺二世宗積ト云僧此ニ移セリ、

正平九年八月十日塔　正平九年八月十日

〔供養塔〕○南魚沼郡大崎村大字大崎字阪ノ下所在

永德某年九月十六日ノ塔　永德□年九月十六日

至德四年ノ塔　至德四年□□

正平二年ノ塔　正平二年　○梵字一略ス、

〔供養塔〕○中魚沼郡中野村大字坪山所在

南朝正平十二年　北朝延文二年九月十五日

〔供養塔〕○中魚沼郡中野村大字友重所在

正平二年ノ塔

正平二年□□□　○梵字一略ス、

〔供養塔〕○南魚沼郡三和村大字東泉田所在

貞和五年六月ノ塔

貞和五年六月　○梵字略ス、

〔供養塔〕○中魚沼郡橘村大字仁田所在

正平十四年九月下旬道阿塔

正平十二年九月下旬　道阿敬白

〔供養塔〕○新編會津風土記百九、魚沼郡之三、○梵字十日町組、仁田村、古碑ノ條ニ見ユ、三略ス、

〔供養塔〕○南魚沼郡城内村大字藤原法音寺所在

正平八年八月ノ塔

正平八年八月　日

〔參考〕

法音寺

〔新編會津風土記〕百十四、外篇越後魚沼郡之五　法音寺○中略村ヨリ未申ノ方二町六日町組藤原村ニアリ、山號ヲ繁城山ト云、眞言宗京都智積院ノ末寺ナリ、開基ノ始詳ナラス、天平中、藤原房前公ノ再興ニテ、聖武天皇ノ勅願所ナリトソ、○下略

貞治五年六月鰐口

〔鰐口〕○南魚沼郡三和村大字東泉田永昌庵所藏

蓮華寺　貞治五丙午六月○新編會津風土記百十三、魚沼郡東泉田村ノ條ニ見ユ、

〔供養塔〕○南魚沼郡五十澤村大字京岡字糖山所在

永和元年十月ノ塔

過去見阿沙彌爲、

永和元年十月　日　○梵字一略ス、

孝子敬白

三十五日奉造立攸也

〔供養塔〕○中魚沼郡蘆ケ崎村大字赤澤所在

永和四年七月十七日ノ塔

永和四七月十七日　○梵字三略ス、

孝子敬白○新編會津風土記百十四、魚沼郡、法音寺村、古蹟ノ條ニ見ユ、

〔供養塔〕○南魚沼郡城内村大字法音寺字愛宕山所在

永和四年十二月廿日ノ塔

永和四年十二月廿日　○梵字一略ス、

〔供養塔〕○南魚沼郡城内村大字田崎字山腰所在

□□□□□□□禪尼

孝子敬白

至德二年二月廿一日ノ塔

至德二年二月廿一日　○梵字一略ス、

乃至法界衆生平等利益

正平十三年戊戌　紀元二千十八年　北朝延文三年

三月大己亥朔盡

三十日、戊辰、北朝除目、非參議從三位大炊御門宗實ヲシテ、越後權守ヲ兼ネシム、

〔公卿補任〕延文三年　非參議從三位藤原宗實（大炊御門）　正月六日叙、同日左中將如元、三月卅日

兼越後權守、

正平十四年己亥　紀元二千十九年　北朝延文四年

三月　小甲午朔盡

二十五日、戊申、北朝除目、中原師香ヲシテ、越後介ヲ兼ネシム、

〔園太曆〕三十二　延文四年三月廿六日、天陰、自去夜雨猶甚、除目、三ヶ夜無爲、及翌朝、御前儀了、○中略入眼上卿萬里小路（仲房）中納言兩相公候、淸書云々、

越後介、中原師香兼、

十月　小辛酉朔盡

二十二日、壬午、足利義詮、佐々木彌童子丸ヲシテ、養父秀氏ノ讓狀ニ任セ、越後白河莊・近江長岡郷等ノ地頭職ヲ安堵セシム、

〔佐々木文書〕四　○周防（足利義詮）ほうけう院殿様

御判

下佐々木彌童子丸、

可令早領知近江國長岡郷・美濃國鞍智郷一方・同國鑄物師屋郷・同國小築郷・同國大諸郷・上總國且塚郷・越後國白河庄（北蒲原郡）等地頭職事、

右任佐々木對馬守秀氏（鏡）延文三年二月廿五日讓狀、女子古々女爲一子之上者、以相嫁仁一爲養子、所讓與也、若有不快之儀者、爲不孝仁、不可相綺所領、古々女一圓可管領之由、裁之、領掌可有相違之狀如件、

延文四年十月廿二日

古々女彌童子丸ニ嫁ス

十二月　小庚申朔盡

九日、戊辰、北朝除目、藤原賴英ヲ佐渡守ト爲ス、

〔園太曆〕三十二　延文四年十二月九日、天晴、京官除目云々、○中略

佐渡守藤原賴英○下略

正平十五年庚子　紀元二千二十年　北朝延文五年

四月　大丁巳朔盡

三日、己未、越後ノ尼教淨、京都ニ上リ、本願寺ノ僧光玄（存覺）、ニ請ヒテ、本尊及ビ歷世祖師ノ畫像ヲ附與セラル、尼淨圓モ亦、本尊ヲ附與セラル、

〔存覺袖日記〕○佛教大學所藏

延文五歲庚子、閏四月日越後國柿崎庄（中頸城郡）

教淨房、子息後藤次同道、本尊和朝增賀書之、百疋口別儀、

本尊

源空親鸞
如信
覺如

兩上人（源空親鸞）之外、

如信上人、覺一（如）上人マテ奉載之、（信空聖覺略之、）

惠心文　太子文

端前和八字、　端聖文八字、

尙部八字、　堀曰九字、

大□也　吾□山八字、

寛□日八字、

奥御□六八字、　入□屋八字、

臨□靈八字、　之□之八字、

山□令八字、　威德

還□矣六字、

已上惠心兩方各四行ニ、別八字、

太子兩方各三行ニ、別八字、但九字一行、如此書了、兩色紙各横段、先同、仍如此書之、

淨圓ハ柿崎ノ人

越中國水橋門徒、越後國柿崎住人尼淨圓本尊也、

如此二十字軸本ニ一行ニ書了、

寂證　夫寂心　夫寂圓　後藤次

妻　寂蓮　聟光念　妻　教淨

教淨房ハ柿崎ノ人

寂心ハ同國々府ヨリ下ヘ七里マナコノ人ナリ、寂圓モ同所人也、教淨房ハ柿崎人ナリ、而ニ寂圓ニ嫁シテマナコニ住ス、而ニ國ノ作法旁アキテ、教淨本居ノ柿崎ヘ歸時、寂圓モ伴テ居ス、其後動亂ノ時、寂心モ柿崎ヘ來テ住ス、貞和三年丙戌十月十七日入滅、五十九、頓口時往生、

寂蓮ハ、其後家今年延文五、三月十六日逝去、五十五、光念ハ其聟、同四月二日他界、其翌日、三日、教淨進發云々、尼淨圓ハ寂心女、光念後家也、今本尊主也、次第手繼人々ヲモ可載歟ニ雖申之、重々有子細略了、

寂蓮・光念二人依教淨望入過去帳、

寂證入滅十月八日歟、□年號不明、

寂心年號モ不分明、一兩年歟と申間、貞和三ト勘了、

是歳、上杉憲顯、石河妙圓・同光親等ヲ率キテ、越後三寶寺城等ニ戰ヒ、又赤田城竝ニ上田・妻有兩城ヲ攻ム、

〔八住所藏文書〕古文書所載

目安、

石河遠江入道妙圓、并舍弟刑部少輔光親申軍忠事、

右去延文四年、越後國御發向之間、最前馳參三寶寺城（西頸城郡）、致忠節、其後於東城寺城（刈羽郡東條）、向陣田尻御陣（刈羽郡）、致宿直、同五年、赤田城（刈羽郡）責之時、光親子息隼人佐光經被疵之間、被檢知訖、又於上田・妻有兩城（中魚沼郡）、所致數ケ度忠勤也、將又鎌倉御共仕、抽忠道者也、然則下給御證判、爲備末代龜鑑、恐々言上目安如件、

光親ノ子光經

貞治三年十一月　日　　（上杉憲顯）承了花押

○東城寺・田尻・赤田ノ地、何レモ越中礪波・射水・新川三郡竝ニ越後刈羽郡南魚沼郡ニアリテ、果シテ孰レニ擬スベキカ、明カナラズ、故ニ今姑クコヽニ掲ゲテ後考ヲ俟ツ、

正平十七年壬寅　紀元二千二十二年　北朝貞治元年　大歲丁丑朔

二月

九日乙酉、藤原爲顯、父爲幸ノ素志ニ依リテ、越後刈羽郡原田保ノ地ヲ同地正壽寺ニ寄進ス、

〔善照寺文書〕○越後

奉寄進　正壽寺

越後國刈羽郡原田保內田數事、

原田保ノ內田數

一參百苅　坪本柳町　一貳百苅　垣根田

一百五十苅　垣根田并　一百八十苅　同所

並同保內竹町分田事、

一八十苅坪本、一堰、御前作、

右於彼所者、爲顯重代相傳所領也、然而任亡父爲幸素意、限永代、所奉寄進也、若背此旨、於致違亂子孫者、爲不孝之仁、永不可知行爲顯跡、然則申公方、可令安堵給者、仍寄進狀如件、

康安二年壬申貳月九日　　藤原爲顯（花押）

（裏書）任此狀可有全知行之狀、如件、

上杉憲榮安堵狀

永和二年六月十二日　　（上杉憲榮）散位（花押）

〔參考〕

正壽寺

〔曼荼羅山覿傳錄〕上　正壽寺與善照寺同異事、

故先師(尊澄)曰、正壽寺善照寺在原田保內、同寺別號矣、今精澄曰、先考未允當、兩院其岐大異歟、所以文明十年戊戌十二月十六日雜事段錢證文云、善照寺領段錢事云々、次云、齋藤惣領分云々、其次云、原田正壽寺領坪附云々、如此一紙三所之領格別、增珍師投毫之詳識知、兩寺差降隔卅里、兩寺本尊阿彌陀(陀脫)如來二軀現堂々、唯々恂々可仰信之、能珍師住正壽寺、增珍師住善照寺、能珍崎嶇之後、兼帶正壽寺、其證見段錢證狀、正壽破壞之刻、常什具等集船丸精舍之祕筥、大古事跡雖難勘窺、其源委而已矣、

善照寺增珍正壽寺ヲ管理ス

六月小乙亥盡朔

二十七日、辛丑、上杉憲顯、越後保倉保ノ地ヲ山城天龍寺ニ寄進ス、

〔天龍寺重書目錄〕○山城

越後國頸城郡五十公郷內保倉保北方事、奉寄進之候、永代可有御知行候、恐惶敬白、

(中頸城郡)

(上杉憲顯)道昌在判

貞治元年六月二十七日

天龍寺方丈侍者御中

十一月大壬寅盡朔

六日、丁未、義詮、大友氏時ノ戰功ヲ褒シテ、越後風間入道某名闕、跡、及ビ河內・攝津等ノ地ヲ宛行フ、

〔大友文書〕四○筑後

(義詮)(花押)

下大友刑部大輔氏時、

可令早領知越後國風間入道跡、河內國田井庄、道誓跡、攝津國貴志庄闕所分等事、

右募大宰筑後(少貳頼尙)入道本通跡替不足分、並今度勳功賞、所宛行也者、早守先例、可致沙汰之狀如件、

少貳頼尙跡替不足分

貞治元年十一月二日

斯波義將奉書

越後國風間入道跡事、任今月二日御下文、可被沙汰付大友刑部大輔氏時代之狀、依仰執達如件、

貞治元年十一月六日

上杉民部大輔(憲顯)入道殿

(斯波義將)治部大輔(花押)

○風間入道其名ヲ闕キ、又其領地ノ所在亦明カナラズ、延元二年四月十六日、妙法寺日成寂スルノ條ニ據レバ、三島郡村田附近ナルベキカ、

〔參考〕

〔諸家系圖纂〕十六下大友　貞宗――

氏泰（足利尊氏）

氏時（等持院殿賜二諱字一、童名宮松丸、孫三郎、從四位下、刑部大輔、法名天祐玉安、於二關東一號二吉祥寺一、於二豐後一號二大應寺一、自二氏泰一家相續、建二豐後稱名寺一、屬二將軍家一、遥年戰功武名甚多、三月廿一日逝去、）

十三日、甲寅、藤原隆重、其所領佐渡物部莊惣案主職ヲ香宗我部甲斐次郎（名闕カ）ノ母ニ賣渡ス、

〔西山所藏文書〕土佐國蠹簡集拾遺所載

佐渡物部（雜太郡）庄内惣案主職事、

右所領は、隆重々代相傳之所帶也、然而依有二要用一、代拾漆貫文、香宗我部甲斐次郎殿母儀太夫殿、所限二永代一御渡申候者也、雖然後々將來不レ可レ有二他人妨一、仍爲二後日一御券狀如レ件、

康安二年十一月十三日　藤原隆重判

正平十八年癸卯（小盡辛未朔）　紀元二千二十三年　北朝貞治二年

三月

二十四日、甲午、足利基氏、上杉憲顯ヲ、越後ニ徵シテ、鎌倉管領ト爲ス、尋デ、憲顯、越後ヲ發シテ、鎌倉ニ赴ク、

十七頁文

〔上杉古文書〕○羽前

天下ノ爲メニ職ニ就カンコトヲ勸ム

關東管領事、自二京都一、度々雖二被レ仰候一、時儀難治候間、令二延引一候、今時分不レ可レ有二子細一候、不レ廻二時日一、可レ被レ參候、就二是非一構候、不レ可レ及二異儀一候、且爲二天下一候間、如レ此申候也、若遲々候者、支申仁なとも出來すへく候者、此事多年念願事候間、此時就レ願大慶候、委細旨希源可レ申候、謹言、

（正平十八年）三月廿四日　基氏（足利）（花押）

民部大輔（上杉憲顯）入道殿

〔鹿苑寺文書〕○山城

憲顯越後ヲ發ス

上相（憲顯）殿去月廿八日進發候き、東國定可レ屬二無爲一候歟、抑爲二花嚴塔修理一、鎌倉間別御教書去年申成候き、管領無二御座一候之間、執事施行申成候、預二御成敗一候者、悦入候、他事期二後信一候、恐惶謹言、

（正平十八年）卯月十日　妙葩（花押）

二階堂駿河入道殿

〔鎌倉九代後記〕　貞治二年、上杉憲顯入道桂山、管領トス、去觀應年中、直義ニ屬ス、其罪ヲ赦シテ、越後ヨリ招キテ、管領トス、上杉家管領職ノ始ナリ、

上杉氏關東管領ノ始メ

南朝正平十八年　北朝貞治二年三月二十四日

〔上杉系圖大概〕　民部大輔憲顯（憲房）、雪溪嫡子、法名道昌、字桂山、國清寺殿是也、錦小路殿。
大休寺殿古山元公、基氏將軍瑞泉寺殿玉岩昕公、彼二代在鎌倉執權柄、

四月小庚子朔盡

廿一日庚申、義詮、上杉憲顯ヲシテ、越後赤澤・武直二村ヲ西大寺雜掌ニ交付セシム、

〔西大寺文書〕五〇大和

（表書）「奉行安威入道　上杉民部大輔（憲顯）入道殿　義詮」

西大寺雜掌越後國（脱カ）佐味庄内、赤澤・武直（二村共ニ中頸城郡ニ在リ、武直、今竹直ニ作ル、）（脱カ）兩村事、就ニ先度之施行、（有）於ニ生前者、遵行事、當國漸靜謐歟、其上嚴重寺領也、軍勢之妨、一圓可レ令レ打ニ渡雜掌一之狀如レ件、

貞治二年四月二十一日　（義詮公）判

上杉民部（憲顯）大輔入道殿

八月大丁酉朔盡

十八日甲寅、宇都宮氏綱、上杉憲顯ノ關東ニ赴クヲ要擊セントス、足利基氏之ヲ聞キ、出デ、氏綱ヲ擊ツ、氏綱ノ族芳賀禪可、之ヲ拒ギテ敗レ、尋デ、氏綱、基氏ニ降ル、

基氏小野崎某ヲ黴ス

〔宇都宮氏家藏文書〕上〇常陸

依ニ上杉入道（憲顯）參上、宇都宮下野守（氏綱）可レ及ニ合戰一之由、有ニ其聞一之間、既來廿日、所ニ發向一也、不レ廻ニ時刻一、可ニ馳參一條如レ件、

貞治二年八月十八日　（足利基氏）華押

小野崎伊勢守殿

憲顯ヲ越後ノ守護職ト爲ス

〔參考太平記〕三十九　芳賀禪可與ニ足利基氏一合戰事

如レ此近年ハ、敵ニ成タリツル人々ハ、皆降參シテ、貞治改元ノ後ヨリ、洛中・西國靜ナリトイヘトモ、東國ニ亦不慮ノ同士軍出來シテ、里民樵蘇ヲ樂マス、其事ノ起リヲ尋レハ、此三四年カ先ニ、按、尊氏、直義構レ隙、合ニ戰於薩埵山一者、觀應二年也、至ニ貞治一則十餘年（尊氏直義）兄弟ノ御中惡ク成給ヒテ、合戰ニ及シ刻、上杉民部大輔（天正本云、名顯憲、非也、當レ作ニ憲顯一）、故高倉（直義）禪門ノ方ニテ、始ハ上野國板鼻ノ合戰ニ、宇都宮ニ打負テ、後ニハ薩埵山ノ軍ニ御方ノ負ヲシタリシカ、兎角シテ信濃國ヘ逃下リ、宮方ニナリテ、猶此所存ヲ遂ハヤト、時ヲ待テソ居タリケル、上杉懸ル不義ヲ致シケレトモ、鎌倉佐馬頭（左兵衛督ノ誤下同ジ）基氏、幼少ヨリ上杉ニ抱キソタテラレタリシ舊好、捨カタク思ハレケレハ、別儀ヲ以テ、先越後國守護職ヲ與ヘテ、上杉ヲソ呼出サレケル、此時芳賀兵衞入道禪可ハ、越後國守護ニテ有ケルカ、降參不忠ノ上杉ニ思ヒ替ラレ奉リ

憲顕禪可ト越後ニ戰フ

テ、抽賞恩補ノ國ヲ召放サルヘキ樣ヤアルトテ、上杉ト芳賀ト、越後國ニテ合戰ニ及フ事數月ナリ、禪可遂ニ打負シカハ、當國ヲ上杉ニ奪ハルヽノミナラス、一族若黨其數ヲ知ス、落サマニ皆討レニケリ、禪可是ヲ忿テ、哀不思議モ有テ、世ノ中亂ヨカシ、上杉ト一合戰シテ、此恨ヲ散セント憤ケリ、懸ル處ニ、上杉已ニ左馬頭ノ執事ニ成テ、鎌倉ヘ越ルト聞ヘケレハ、禪可道（直カ）ニ馳向テ戰ハントテ、上野板鼻ニ陣ヲ取テソ待タリケル、然トモ上杉上野國ヘモ入サル先ニ、左馬頭宣ヒケルハ、何ソ我意ニ任テ、加樣ノ狼藉ヲ致スヘキ、所存アラハ、逐テ訴訟ヲ致スヘキ處ニ、合戰ノ企奇怪ノ至ナリ、所詮對治ヲ加フヘシトテ、自大勢ヲ率シテ、宇都宮ヘソ寄セラレケル、西源院本云、上杉カ勢ハイマタ上野ヘ入モサルニ、左馬頭大勢ニテ、宇都宮ヘ寄ラルト云聞ヘアリ云云、○中略、禪可ノ子高貞、基氏ノ兵ト武藏ニ戰ヒテ、敗ルヽ事ニ係ル、軍散シケレハ、軈テ宇都宮ヲ對治セラルヘシトテ、左馬頭八十萬騎ノ（北條家・南都本作二十萬、天正本作二六十萬）勢ニテ、先小山カ館ヘ打越給フ、小山、金勝院本作小林、非也、神明鏡云、懸ル處ニ、宇都宮（按、伊豫守氏綱、公綱子也、）急キ參シテ申ケルハ、禪可カ此間ノ擧動全ク我同意シタル事候ハス、主從向背ノ科自遁カタキニ依テ、其身已ニ逐電仕ヌル上ハ、（天正本云、伊賀守兄弟ハ討死仕候云云、）御勢ヲ向ラルマテモ候マシト申ケレハ、左馬頭モ深キ慮ヤオハシケン、翌日軈テ鎌倉ヘ打歸給ヒニケリ、

基氏小山城ニ入リ氏綱ヲ擊ツ　氏綱基氏ニ降ル

〔神明鏡〕　八月廿日、宇都宮對治ノ爲ニ、基氏御發向有、芳賀伊賀守高貞八百餘騎率、武州若林ニテ奉馳付、及散々合戰、高貞打負引込、基氏爲退治、小山祇園城ヘ入御、宇都宮氏綱降參、

武藏若林ノ戰

十月（小丁酉朔盡）

二日、（戊戌）、越後西生寺養智院弘智寂ス、

〔海雲山岩坂弘智法印傳記〕　夫弘智法印生緣は、下總國香取郡まさきのがう、（正木鄕）やま（山桑村）くはむら、兒玉氏の裔、けみやうはしんたい、實名は弘智、同州大浦村蓮花寺の住僧なり、具戒修學の後、觀修のたよりよき幽寂の地をたづねて、所々へんれきし給ひ、關左の國々、奥州出羽をめくり、北陸道をへて、南紀高野山にのぼらんとて、當國一之宮彌彦神社をはいし、猿ケ馬場といふ峠にいたる、此山のはの北にあたりて、三寶鳥の聲しきりに佛法僧々々々とよぶをきゝ、ふしぎのおもひをなし、聲をしるへに分のぼり給へば、地境しん〳〵として、水石いさぎよく、蒼海漫々として、眺望きはまりなし、聞にこれ海雲山のおくのゐん、不動瀧いはさかといふ所となん、まことに寂靜安樂の靈地、多年所望のだうちやうこゝなりとて、すなはち鉢錫をとゞめ、一宇の草坊をむすひ、養智院と號し、御手つからしやうみやうしふを書寫し給ひ、深入禪定の座をしめ、いくほどなく三密瑜伽の悉地をえて、しやくねんとして氣息をとゞむ、人その

傳記下總ノ人

彌彦神社ニ詣ス

養智院ヲ建立ス示寂

辭世

入滅の觀念かの體相を知さること數句なり、

于時貞治二年みつのとの卯のとし十月二日、辭世とて詠したまへる和歌にいはく、

いはさかのあるしはたそと人とはゝ墨繪にかきし松風のおと

かねて左右にかたつていはく、我終焉の後、かならず遺身を葬埋することなかれ、ことのまゝにして、彌勒下生のあかつきをまたんと誓願し玉ふと云々、

○コノ傳記ハ、後世ノ製作ニカヽリ、稍信據シ難シト雖モ、他ニ徵證スベキモノナキヲ以テ姑クコレヲ揭グ、

遺骸完備シテ枯木ノ如シ

〔道海和尚事歷〕

端坐岩臺首少傾、上人行履作麼生、若無墨畫松風詠、脫體千年野狐精、

德昌寺虎班

〔北越詩話〕

誰言枯骨失精靈、我謂髑髏開眼睛、請看身心原不二、雲山月白又風淸、

〔良寛上人詩集〕　題弘智法印像

鄰燹烏藤朽夜雨、禪衫袈裟化曉烟、誰知此老眞面目、畫圖松風千古傳、

〔輶軒小錄〕　僵尸之事

越後國ヤ彥ト云所ニ、弘智法印ト云亡僧ノ遺骸アリ、三百年ノ人ナル由、今ニ四體完具シテ、槁木ノ如ク存在セリ、何ノ頃カ、拏鎗人アリテ、鎗ニテ彼骸ヲ破ルト云リ、先年京江戸ヘモ出シテ、衆ニ示シテ敎化ス、此モ唐ニモアルコトナリ、皇明類苑ニ倦遊雜錄ヲ引テ云、苑岳張起谷岩石下、有僵尸齒髮皆完、春時遊人多以酒瀝口中、呼爲臥仙、好事者作木榻以薦之ト云々、

西生寺

西生寺ノ謂レ

〔參考〕

〔越後名寄〕四三島郡佛閣　西生寺　野積浦　除地拾石

號海雲山瀧泉院、人皇四十五代聖武帝ノ御宇、行基登山シ、往古ノ靈佛一寸五分ノ像ヲ胸中ニ籠、上品ノ彌陀ノ大像ヲ彫刻シヌ、一度拜シ信心セバ、西方極樂ニ往生セシメン、ト云々、此語ヲ中略シテ、西生寺ト號　又本堂ノ上ヲトビカ峯ト云リ、行基天竺象頭山ニカタトリ、彌勒堂ヲ建立有シトカヤ、今ハ名ノミ計也、南大門ノ坂ノ上ニ口アケ石ト云石有、大門ヨリ餘程東南ノ方ニテ、石高二丈餘也、是ハ古ヘ此浦ノ民家ニ酒ヲ造リオキノル(ヌカ)者多アリシニ、何モカモセシ酒ノ初ヲ此石ニソナヘ、地主神ヲ祭リテ、幸ヲ得シト也○中略

上總ノ人トノ說

上總國山桑村ノ產蓮華寺ノ住僧弘智法印、此山ヲ尋來リ岩坂ト云ヘル幽谷ニ庵ヲ結ヒテ、西生寺ヨリ少東ノ方、

岩坂の主をたそと人とはは墨繪に書し松風の音

カク詠、又弘智眞筆ノ稱名書アリ、

弘安年中、南都興福寺ノ住僧壽奎上人、當寺再建ノタメ、鎌倉ヨリ御下文ヲ帶シ、登山シテ、越後・出羽・奥州三ケ國ノ大勸進トナレリ、其時ノ執事最勝園寺貞時(北條)力ヲ合セ、修飾有シトカヤ、又六壇等ハ、德治二年、蒲原ノ津永阿彌ト云者、三十貫ヲヨセテ、南京ヨリ作リ下セシト也、是等ノ結構、應仁・文明ノ亂世ニ零落ス、又明應二癸丑年六月十八日ノ震動ニテ、一時ニ破壞ス、住持弘秀、領主長尾信濃守爲景ノ命ヲ請テ、國中棟別ノ勸進ヲ企テ建立スト云々、

蒲原津ノ永河彌六堅ヲ寄進ス

高十石山林竹木共ニ除地、慶安二己丑年五月十日　　近藤五郎右衞門
　　設樂源右衞門

正平十九年甲辰　紀元二千二十四年　北朝貞治三年

六月大癸巳朔盡

十八日、庚戌、越後ノ尼妙蓮、道實姓闕ク、ノ遺言ニ依リ、京都本願寺ノ僧光玄存覺、ニ請ヒテ、本尊阿彌陀佛畫像ヲ附與セラル、

〔存覺袖日記〕○佛教大學所藏

越後人上洛之時、同道三郎四郎、マムキ本尊、

マムキ本尊

此表書誂之、仍書之、貞治三甲辰六、十八、

畫工增賀

方便法身等年號畫工增賀也、等悉如常、

願主道實死去云々、存生之時、

遺言云、我有尊號及畫圖、

去春點之、汝等可書云々、

仍爲後家妙蓮尼書之、

五箇浦

願主越後國蒲原郡五箇浦內

鹽見岩屋比丘尼釋妙蓮

道源房

依所望如此書了、昨日十七日道源房、

七月小癸亥朔盡

八日、庚午、義詮、大友氏時ノ讓狀ニ任セテ、其子氏繼ニ、豐後・筑後兩國守護職及ビ越後紙屋莊等、諸國ノ所領ヲ安堵セシム、

〔大友文書〕四○筑後

豐後・筑後兩國守護職、幷處々所領等事、任氏時之讓補、侍領(儕カ)不可有相違之狀、如件、

南朝正平十九年　北朝貞治三年七月八日

貞治三年七月八日

大友孫三郎（氏繼）殿

加冠名字事

源氏繼

貞治三年二月十二日

注進

氏時當知行散在所領所職等事、

相模國大友郷（付延清名、）　同國三浦長坂郷、

上野國利根庄（號土井出庄、）　美濃國中村庄

伊勢國塔世御厨（北方、）　越後國紙屋庄（中蒲原郡）○中略

越後紙屋莊

右注進如件、

貞治三年二月　日

○氏泰、初メテ紙屋莊ヲ領スルコト、延元二年五月二十二日ノ條ニ、足利義滿、大友親世ヲシテ、其所領ヲ嗣ガシムルコト、弘和二年十月七日ノ條ニ見ユ、

（足利義詮）華押

系圖

〔參考〕

〔諸家系圖纂〕十六下　大友

氏時

氏績（繼）童名宮松丸、利根孫太郎、從五位下、修理大夫、號二不二能一依レ爲二宮方一、非二家督一、十二月廿七日、於二朽綱一卒去、

貞宗

二十五日、丁亥、越後守護上杉憲顯、幕府ノ命ヲ嫡子守護代憲將ニ傳ヘ、越後佐味莊內赤澤・武直ノ二村ヲ、西大寺雜掌ニ交付セシム、

〔西大寺文書〕○五大和

正守護施行

表上

兵庫頭殿

西大寺雜掌申、越後國佐味庄（中頭城郡）內赤澤・武直兩村事、去年四月廿一日御教書案文遣之、○同日ノ條參看

然早任被仰下之旨、可被沙汰付下地於雜掌之狀如件、

越後守護上杉民部大輔入道道昌判

貞治三年七月廿五日

南朝正平十九年　北朝貞治三年七月二十五日

嫡子守護代
兵庫頭（憲將）殿

是歳、秀海、越後岩谷藥師如來ノ寶印ヲ造ル、

〔藥師如來寶印〕○東蒲原郡三川村岩谷平等寺藥師堂（木製彫銘）

貞治三甲辰　秀海

正平二十年乙巳　紀元二千二十五年　北朝貞治四年

二月小庚寅朔

五日、乙未、北朝、春日神社ヲ造營スルヲ以テ、越後・佐渡ニモ、マタ棟別錢ヲ課ス、

〔春日社文書〕○大和

春日社造替料諸國棟別拾文、事、所被下綸旨也、越後國分可致嚴密沙汰之狀如件、（足利義詮）（花押）

貞治四年二月五日

上杉民部大輔（憲顯）入道殿

棟別十文越後

佐渡

春日社造替料諸國棟別拾文、事、所被下綸旨也、佐渡國分可致嚴密沙汰之狀如件、（足利義詮）（花押）

貞治四年二月五日

佐渡國守護

十月小乙卯朔

十四日、戊辰、足利基氏、上杉憲顯ニ命ジ、鹽澤孫次郎ノ越後奥山莊金山郷・鹽澤條ヲ濫妨スルヲ停メ、和田行連ニ還付セシム、

〔色部文書〕○前羽

三浦遠江（和田）前司行連代道玄申、越後國奥山庄内金山郷（北蒲原郡）同鹽澤條地頭職事、道玄訴狀副具書、如此、子細見外、寄事於世上擾亂、鹽澤孫次郎去觀應已來、非分押妨云々、事實者甚不可然、早止彼妨、沙汰付下地於道玄、可被全向後所務之狀、依仰執達如件、（上杉憲藥）左近將監花押

貞治四年十月十四日

上杉民部大輔（憲顯）入道殿

行連代道玄

觀應以來濫妨ス

○幕府、上杉憲藥ニ令シ、孫次郎等ノ本條ノ地ヲ濫妨スルヲ停メ、和田道誠ニ還付セシムルコト、二十三年十一月二十四日ノ條ニ見ユ、

正平二十一年丙午　紀元二千二十六年　北朝貞治五年

三月大癸未朔

十日、壬辰、佐渡本間有直、其所領ヲ子季有ニ讓ル、

〔佐渡志〕官員

南朝正平二十一年　北朝貞治五年三月十日

長江村

譲渡佐渡國長江(加茂郡)村一圓事

右當所者、有直拜領相傳のしよたいなり、しかるを子息本間山城彌二郎季有に、ゑいたいをかきりて、ゆつりあたうる物者(也カ)、またくたのさまたけ有へからす候、仍ゆつりわたす狀如件、

貞治五年三月十日

(本間)有直判

蒲屋保舟代保ノ防

ゆつりわたす所りやうの事

ゆつりわたす、さとのくに、かまやの(加茂郡)ほう三分二、ふなしろ(雑太郡)のほうのうち、上村、なかへのむら、子息本間の山城の彌二郎にゆつりわたすところ、しちなり、たのさまたけあるへからす候、仍爲後日、ゆつり狀如件、

貞治五年六月十八日

(本間)源有直判

安堵狀

任此狀、領掌不可有相違之狀如件、

貞治五年十二月廿八日

〔參考〕

系圖

〔佐渡本間系圖〕　泰宣山城兵衛尉、

有直山城六郎、貞和四年七月、爲紀伊國凶賊討手發向、

季有山城弘(彌)二郎、貞治五年六月、讓受蒲屋保・舟代保内上村・長江村、

六月小壬子盡朔

二十六日、丁丑、上杉憲將京都ニ卒ス、

〔上杉系圖大概〕　兵庫頭憲將、桂山(憲顕)嫡子、母方木戸、法名道爾、字如然、楞嚴院殿是也、自少伴父桂山、平諸陣、自越後州、上京洛、貞治五年丙午六月廿六日逝去、御子一人、

〔羽前米澤上杉家譜〕

憲將兵庫頭、

母ハ木戸氏、幼ナキヨリ憲顕ニ從ヒ、戰功アリ、越後ヨリ上洛、貞治五年六月廿六日卒、越後上杉祖、

越後上杉氏ノ祖

七月大辛未盡朔

二十三日、癸未、左兵衛尉某、佐渡國分寺別當職但馬房ニ、別當職分ヲ宛行ハシム、

〔佐渡國分寺文書〕○佐渡

宛行

南朝正平二十一年　北朝貞治五年六月二十六日　七月二十三日

南朝正平二十二年　北朝貞治六年是歳　南朝正平二十三年　北朝應安元年二月二十五日　六二〇

本間有泰寄進

佐渡國國分寺別當職分、波多郷（雜太郡）内新田一町、並一反所當米六斗、令（本間）有泰寄進候者也、

右於彼別當職者、以但馬房宛行所候也、小破之時者、可預修理者也、仍宛狀如件、

貞治五年七月廿三日　左兵衛尉（花押）

正平二十二年丁未（紀元二千二十七年　北朝貞治六年）

是歳、越後守護上杉憲榮遁世ス、後足利義滿ニ起用セラレテ、復タ遁世ス、

〔上杉系圖大概〕

夫大（左近）將監憲榮、小曰龍樹丸、母方北條時政苗裔、桂山（憲顯）末子、法名道久、字大遠、如意輪寺開基是也、以父桂山之讓、領越後、以霜臺之讓、領國衙、雖然不染世緣、歳十八、捨國遁世矣、自鹿苑院（源義滿）殿、被召還、强令在京、依其志不可奪、終蒙免許、歳廿八再遁世、在但馬月潭會下、撥草瞻風、粗明心月、後到伊豆州大見郷山本如意輪寺、勤修日夕不怠、手親汲水採薪、以供晨炊、晝則看讀首楞嚴維摩經、夜則修安盤三昧、或燒香禮佛、有人參控不擇、緇素不雜言語、一目視之耳、三衣一鉢之外無長物、〇下略

但馬月潭寺ニ入ル　伊豆如意輪寺ニ入ル

〇憲榮、歿スルコト、應永二十九年十月二十六日ノ條ニ見ユ、

正平二十三年戊申（紀元二千二十八年　北朝應安元年）

二月小（壬寅）盡

二十五日、丙寅、和田政義、舊ニ仍リ、越後奥山莊石曾禰ノ地ヲ大輪寺ニ寄進ス、

〔大輪寺文書〕〇羽前（伊佐早謙氏所藏）

重寄進申

大りんし寺領事

越後國おくやま（北蒲原郡）庄中條石曾禰内、

右田地者、政義現當二世の爲に、寄進申所也、御寺の南北四至界、是をさたむる所也、かの寺領者、亡父茂資先日のきしん狀にまかせて、子々孫々いろゐあるへからす、就中當所公方御貢事等、一向所停也、仍寄進狀如件、

貞治七戊申二月廿五日　（和田）平政義（花押）

〇政義ノ父茂資、是地ヲ大輪寺ニ寄進スルコト、正平九年八月二十二日ノ條ニ、

又政義、大輪寺圓融庵ニ地ヲ寄進スルコト、文中元年七月十日ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔平姓〕三浦和田系圖〕　茂資（土佐守、）

政義（彌三郎、土佐守、政資改名也、）

政義初名政資

南朝正平二十三年　北朝應安元年二月二十五日

南朝長慶天皇　北朝後光嚴天皇

正平二十三年戊申（紀元二千二十八年　北朝應安元年）

四月小（辛丑朔）

十五日、癸丑、色部長忠、越後加納方色部・岩船・粟島等ノ地頭職ヲ、嫡子氏長ニ讓ル、

〔色部文書〕○羽前

讓與

越後國加納方色部（岩船郡）岩船並青島（粟島）之地頭職事、

合田數坪付在所名字者、別紙在之、

右於所領者、長忍（色部長忠）重代相傳知領也、然を嫡子鶴童（氏長）丸惣領として、代々具書を相副、讓與之處也、無他妨、可知行者也、但恆例臨時御公事、守先例、可致其沙汰也、仍讓之狀如件、

貞治七年戊申卯月十五日　沙彌長忍

七月大（己亥朔）

是月、新田義宗・義治、兵ヲ越後・上野ノ間ニ擧グ、上杉憲顯、其子能憲・憲春ヲシテ、千葉・宇都宮・結城・小山等ノ諸族ヲ將ヰテ、之ヲ擊タシム、義宗戰ニ敗レテ、陣歿シ、義治出羽ニ逃ル、

〔喜連川判鑑〕　從三位左兵衞督氏滿　應安元年七月、新田義宗・義治、越後・上野ノ境ニ旗ヲ揚ク、憲顯（上杉）是ヲ聞テ、嫡男憲將○憲將、正平二十一年六月二十六日ヲ以テ卒ス、誤リナルベシ、二男能憲・三男憲春、追手ノ大將トシテ、千葉・宇都宮・結城・小山ヲ差向ラル、新田敗北、義治ハ出羽ヘ落去リ、義宗ハ討死、

〔太平記評判〕　左馬頭基氏逝去事

上杉・春王（金王カ、足利氏滿）殿ヲ守奉テ、國法（成）政敗、故基氏ノ例ニ不違シカハ、自然ニ世ハ治リケリ、其後三箇年過テ、新田義宗・義治、越後・上野ノ兩國ニ發リテ、諸國ニ又吉野殿ノ方人出來ニケレトモ、上杉（憲顯）ノ入道、其身ハ鎌倉ニ有リナカラ、子息ノ彈正（憲將）少弼・次男藏人（能憲）太夫・三男越後（憲春）守ヲ大將ニテ、武藏ニ兵ヲ遣シカハ、千葉・宇都宮ヲ始トシ、小山・結城ノ人々大勢ニテ、下野ヨリ發シテ、搦手ニ向ヒ、鎌倉勢ハ、武藏ヨリ向テ戰ヒケルニ、五十餘日ノ內ニ追落シテケリ、其後義宗ハ、越後ニテ被討、義治ハ出羽國ヘ北下リシトニヤ、○上下略

〔官報〕○明治四十二年九月十一日

贈從三位

九月小（己亥朔）

故新田義宗

憲顯法號

十九日、丁巳、鎌倉管領安房守上杉憲顯卒ス、次男能憲、家ヲ嗣ギ管領ニ補セラル、

〔喜連川判鑑〕　應安元年九月十九日、執事上杉民部大輔憲顯死去、法名桂岩道昌ト號ス、次男兵部少輔能憲執事職ニ補セラル、上杉中務少輔憲藤カ男、彈正少弼朝房、能憲ニ相並テ執事ト成ル、是ヲ兩上杉ト號、朝房ハ後ニ在京シテ都城ニシテ死ス、

兩上杉

〔武家補任〕　鎌倉　源氏(足利)滿自レ是關東武士、稱二氏滿一、爲二御所一、稱二上杉一、爲二管領一　管領　上杉能憲兵部大輔、剃髮號道禮、應安元年任レ之、　政所　藤行康山城宮內入道、應安元年任レ之、

〔上杉系圖大概〕　民部大輔憲顯、雪溪(憲房)嫡子、法名道昌、字桂山、國清寺殿是也、錦小路(足利直義)殿、大休寺殿瑞泉寺殿古山元公、基氏(足利)將軍玉岩昕公、彼二代在二鎌倉一、執二權柄一、公初拜二鎌倉宅間功臣山報國寺一、開山佛乘禪師天岸慧廣長老、執二弟子禮一、其後於二伊豆州奈古谷一、創レ寺曰二天長山國清萬年禪寺一、昔天台智者大師記曰、寺若成、國即清之義也、將請二天岸一、令レ爲二開山一、堅辭不レ赴、故佛眞禪師無礙妙謙長老爲二開山一、第一祖義堂和尚所レ製、國清二世元叟本公山門疏序具載二于此事一、武州上州諸陣悉平後、京都安全、關東大治、皆此公計略也、御子男女共十六人、應安元年九月十九日、於二足利御陣一卒、六十三、

國清寺ヲ創建ス

京都關東ノ治マレルハ憲顯ノ功ニ依ル

系圖

〔諸家系圖纂〕十五上杉　憲房

憲藤

憲顯　執權、民部大輔、從五位下、越後守、安房守、康永元年四月晦日管領、同二年、上州・豆州・越州守護、應安元年、戊申、豆州國清寺建立之、同年九月十九日、於二足利御陣一卒、六十三、號國清寺殿桂山道昌、

憲顯越後守護トナル

憲將　兵庫助、母木戸氏、號榜殿院如然爾公、貞治五年六月二十六日死、

憲將

能憲　重能養子、號二宅間修理亮一、兵部少輔、

憲英　兵部少輔、藏人大夫、陸奥守、始號二憲定一、臨鼻和祖、法名常興大宗、號國濟寺、

憲春　刑部大輔、

憲賢　越後次郎、

憲賢越後次郎ト稱ス

憲方　右京亮、安房守、

憲榮

憲榮　號葛見左近將監、童名龍樹丸、憲賢之跡相續、

女子　朝房室、號晋門院性海了善大姉、

〔妙法寺記〕　貞治六、九月十九日、上梠入道、○本書前年ニ係クルハ誤レリ、(上杉)憲房の二男民部大輔憲顯、山の內の先祖是也、此人は尊氏公と錦小(直義)路殿御兄弟不和のとき、錦小路殿の味方に參しゆへ、將軍御にくみありけれとも、案者第一の人にて、關東のかため、此人にあらすんは叶ましと思召けれは、被二召出一けり、

憲顯山內ノ祖ト爲ル

子孫代々管領トナル

其上基氏公の御乳母の子にて、おさなきよりいたきそたて被申ける間、旁々可然由にて、越後・安房兩國を下され、鎌倉の御後見にて、山の内殿の先祖是也、此子孫代々爲管領、

十一月（小己卯盡朔）

二十四日、壬寅、幕府、越後守護上杉憲榮ニ令シテ、鹽澤孫次郎、及ビ武藏稱名寺雜掌等ノ、奥山莊内金山郷・鹽澤條ヲ濫妨スルヲ停メ、之ヲ和田道誠ニ還付セシム、

〔色部文書〕○前羽

三浦（和田）遠江入道々誠代志道申、越後國奥山庄（北蒲原郡）内金山郷・同鹽澤條地頭職事、重訴狀具書如此、度々被仰之處、鹽澤孫次郎並金澤稱名寺雜掌濫妨未休云々、招重科候、不日止彼妨、沙汰居下地於志道、可被執進請取、使節不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

應安元年十一月廿四日　　中務大輔（花押）

上杉左近將監（憲榮）殿

○是利基氏、上杉憲顯ニ命ジ、孫次郎等ノ本條ノ地ヲ濫妨スルヲ停メ、和田行連ニ還付セシムルコト、二十年十月十四日ノ條ニ見ユ、

正平二十四年己酉　紀元二千二十九年　北朝應安二年

是歲、覺山、越後龍澤寺ニ達摩像ヲ造リテ安置ス、

〔新編會津風土記〕百六下條組外篇越後國蒲原郡之六　寺院

龍澤寺○略中白山神社ノ西ニアリ、少林山ト號ス、草水觀音寺ノ末山、曹洞宗ナリ、開基詳ナラズ、○略中本尊達磨客殿ニ安ス、長二尺、應安二己酉年、大旦那覺山新造立ト書付アリ、

建德元年庚戌　紀元二千三十年　北朝應安三年

三月（小庚寅盡朔）

二十七日、丙辰、北朝、參議土御門保光（土御門）ヲシテ、越後權守ヲ兼ネシム、

〔公卿補任〕應安三年　參議正三位藤保光　三月廿七日兼越後權守、

南朝長慶天皇　北朝後圓融天皇

文中元年壬子　紀元二千三十二年　北朝應安五年

正月（小庚戌盡朔）

二十二日、辛未、禪光院覺成、奈良興福寺僧徒ノ訴ニ依リ、譴ヲ北朝ニ受ケテ、佐渡ニ

流サル、

〔後愚昧記〕　應安五年正月廿二日、今夜流人宣下也、上卿土御門中納言、定具卿、流人宣下次第事、藤中納言（柳原）忠光卿、尋送之間、借遣了、彼上卿黄門忠光卿親類也、仍便宜事加扶持云々、

大政官符治部省

應令還俗前僧正法印大和尚頼乗權大僧都法眼和尚位覺成權少僧都法眼和尚位實玄傳燈大法師位教信善寛憲實懐實等事、

右正二位行權中納言源朝臣定具宣、奉勅、件頼乗等坐事遠流、宜仰被有先令還俗者、省宣承知、依宣行之、符到奉行、權右中辨藤原朝臣（資康カ）、

應安五年正月廿二日　左大史小槻宿禰

大政官符

安養院

覺成僧都佐渡

岸田門里

覺成等ヲ還俗セシム

〔愚管記〕十六　應安五年正月廿三日、壬申、晴陰不定、時々雪飛散、

被下勅書南都間事、條々被仰下、去夜流人宣下、配國交名一紙被注下之、注裏、

配流交名

配流交名

實玄僧都伊豆、　教信禪師土佐、

頼乗僧正隱岐、　覺成僧都佐渡、

善寛法師常陸、　憲實法師安房、

懐實法師周防、

〔花營三代記〕　應安五年正月廿二日、流人宣下事、

一乗院實玄僧都伊豆、

大乗院教信禪師土佐、

安養院頼乗僧正隱岐、

禪光院覺成僧都佐渡、

相模都維那師善寛常陸、

藏人寺主憲實法師安房、

憲實法師周防、

應安五年正月廿二日

宣旨公卿

辨

參陣官人

七月（小丙午朔盡）

十日、乙卯、沙彌秀和、（名闕ク、）和田政義ト一族和樂ノ爲ニ、地ヲ越後大輪寺塔頭圓融庵ニ寄進ス、

〔大輪寺文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

奉寄進（北蒲原郡中條町）大輪禪寺之內圓融庵田地事、

合千伍百苅者、（坪付在別紙、）

千五百刈

右田地、爲父母並先祖菩提杲滿、且爲秀和現當二世所願成就、且爲祈兄弟親族和合豐樂、與惣領中條殿、（實名政義、）俱評定詮義（議）而限永代、奉寄進當庵主職撰仁、可爲本寺住持計也、

庵主撰仁

秀和並惣領（政義、）一類子子孫々、於寄進田地、若致煩、成競望、自本寺本庵、致訴訟、公方御沙汰被止違亂競望、可致（破カ）處罪過候、仍爲後々末代、寄進狀如件、

平政義（和田）（花押）

應安五年壬子七月十日

土御門中納言（有世カ）

藏人右少辨俊任（坊城）

章弼　章忠

○政義、奥山莊中條ノ地ヲ大輪寺ニ寄進スルコト、正平二十三年二月二十五日ノ條ニ見ユ、

沙彌秀和（花押）

十月（大甲戌朔盡）

是月、本間直泰、佐渡長安寺ニ田地ヲ寄進シテ、父有泰ノ病氣平癒ヲ祈ラシム、

〔長安寺文書〕○佐渡

長安寺　佛神田事、

合壹町者、

一町

右於彼田地者、如元可被寺務、加賀守源有泰立所可被致平癒之祈禱之誠精、爲息災延命祈誠、仍狀如件、

加賀次郎源直泰（本間）（花押）

應安五年十月　日

○直泰ノ系圖、天授六年六月二日ノ條ニ見エ、

文中三年甲寅（紀元二千三十四年　北朝應安七年）

四月（大丙申朔盡）

二十七日、壬戌、毛利憲廣、其所領越後鵜川莊ノ內安田條地頭職ヲ其子憲朝ニ讓ル、

〔毛利安田文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

下文以下ノ重書ハ惣領之ヲ帶ス

上杉憲景書狀

譲與　所領事

越後國鵜川庄（刈羽郡）内安田條地頭職事

右所領者、爲恩賞之地、道幸（毛利憲廣）令拜領之間、御下文已下重書等者、惣領帶之、彼安田條者、修理亮朝廣（憲朝）、限永代、所譲與也、於御公事已下者、任惣領支配、可致其沙汰、若背憲廣命、企異儀者、爲不孝仁、不可知行道幸跡、委細旨面々置文在之、敢不可背此旨、仍譲狀如件、

おうあん七ねん四月廿七日　　道幸（花押）

鵜河庄安田條内、井河内山境事、去廿八日、任御奉書之旨、可爲毛利修理亮（憲朝）知行分内之由、可有存知候也、謹言、

四月廿九日　　憲景（上杉）（花押）

宮浦三二郎殿

○幕府、憲廣ノ、丹波安國寺領鵜河莊内安田上方ヲ支障スルヲ停メシムルコト、天授三年七月二十二日ノ條ニ、又將軍義滿、毛利憲朝ヲシテ、是地ノ地頭職タラシムルコト、天授六年六月二十八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔毛利系譜〕○羽前伊佐早謙氏所藏　　賴元（毛利五郎、大膳大夫、道依、始領越後佐橋庄）

系圖

安廣（彌五郎、越中守、）

長元（彦五郎、和泉守、）

憲廣（宮内少輔、道幸、）

憲廣

屢有忠功、室町將軍幷鎌倉公方賜數箇所領地、老衰之後、隱居于安田、代々相傳佐橋庄、譲嫡子元豐加增領地、苅羽郡鵜河庄安田譲二男朝廣、法名無量壽院殿是佛道幸大居士、

憲朝

元豐（三郎、稱石曾根氏、）

父憲廣譲佐橋庄、

憲朝（毛利修理亮、刑部少輔、常全、始五郎朝廣、稱毛利、安田兩氏、）

應安七年四月廿七日、父道幸譲越後鵜川庄安田條地頭職、康暦二年六月廿八日、將軍義滿、賜安田條地頭職之證書、至德四年五月廿一日、氷室左近將監榮音、氷室

判宮眞興、以山東(三島)郡內小加禮井村、讓憲朝、六月廿五日、上杉憲方公、小加禮井村知行無相違之旨賜御書、永德二年十一月朔日、長尾豐前守景治、小加禮井村證書出之、法名證覺常全、(證覺一作松岳)

五月(小盡 丙寅朔)

二十六日、(己卯)北朝、奈良興福寺ノ訴訟ニ依リテ、赤松範顯ヲ越後ニ、同入道性準ヲ上總ニ流ス、是日、共ニ京都ヲ發ス、

〔愚管記〕十七　慶安六年八月十三日、壬午、時々雨降、及晩被下勅書、性準(赤松肥前入道)・範顯(同廣瀨兵庫助)配流事被裁許、去年落居條々、又以同前、此上者僧綱忿可上洛之由、以寺門之雜掌、被仰之云々、十一月十二日、戊寅、晴、藤中納言送狀云、神木事、此兩三日、就武家形勢、被經御沙汰候、若落居之篇出來候者、重可申之由示之、且承悅無極之由返答了、

流人宣下

十三日、己卯晴、今夜流人宣下云々、性準(赤松肥前入道)、下野國、範顯(同兵庫助、稱廣瀨)、越後國云々、上卿平中納言親顯卿、參陣宣下云々、此宣下已後、寺門雜掌、可下向南都、先召賴之(細川)朝臣許、可問答子細有之云々、

性準節顯ハ赤松ノ一族

〔後愚昧記〕　十一月十二日、今夜有流人宣下事、性準上總國、範顯越後國、件兩人赤松一族、仍南都訴訟如此歟、行流刑云々、依之神木入(可カ)有歸座(所)之由、雖有風聞、南都衆徒可存、未申左右云々、

京都ヲ發ス

〔花營三代記〕(應安七年)五月廿六日、赤松兵庫助範顯、(越後國)、同遠江入道性準、(上總國)、爲流人出京、依南都訴訟也、

○性準ノ流罪地、愚管記ニ下野ト爲シ、後愚昧記及ビ花營三代記並ニ上總ト爲ス、今後者ニ從ヒテ揭書ス、又後愚昧記十二日ト爲スハ、十三日ノ誤ナラン、且ツ赤松入道性準・同範顯ハ、共ニ赤松系圖ニ見エズ、赤松系圖、範資ノ二男師則、肥前守トアリ、其子則康、亦肥前守ナレハ、此入道性準ハ、恐クハ師則ナルベシ、又同系圖ニ廣瀨ト稱スル者、範資ノ四男師賴、即チ師則ノ弟アレバ、範顯或ハ師範ナルヤモ知ルベカラズ、

八月(小盡 甲午朔)

十七日、(庚戌)幕府、越後守護上杉憲榮ニ令シテ、宇佐辨中務丞等ノ西大寺領同國佐味莊內武直村ヲ押妨スルヲ止メ、之ヲ寺家雜掌ニ交付セシム、

〔西大寺文書〕○大和

「奉行與多入道」

(上包)「上椙左近大夫將監殿　(憲榮)　(細川)武藏守賴之」

西大寺領越後佐味庄(中頸城郡)内武直村事、雜掌申狀如此、子細見狀、止守佐辨中務丞・同十郎入道昌政以下輩妨、沙汰付下地於寺家、可被執達請取之狀、依仰執達如件、

應安七年八月十七日　　正守護憲榮　上杉左近大夫將監殿

○上杉憲顯、幕府ノ命ヲ同憲將ニ傳ヘ、武直村ヲ西大寺雜掌ニ渡付セシムルコト、正平十九年七月二十五日ノ條ニ見ユ、

天授元年乙卯　紀元二千三十五年　北朝永和元年

九月　大盡　戊午朝

六日、癸亥、足利義滿、越後鵜河莊内安田條上方ヲ丹波安國寺ニ寄附ス、

〔安國寺文書〕○乾　○丹波

義滿教書

寄附　丹波安國寺元光寺

越後國鵜河(刈羽郡)庄内安田條上方事、

右所寄附也、任本主(上杉)朝定狀等、知行不可有相違之狀如件、

永和元年九月六日　　參議左近中將(足利義滿)源朝臣(花押)

細川頼之奉書

越後國鵜河庄内安田條上方事、任去九月六日御寄附狀、可被沙汰付丹波安國寺元光寺、雜掌之狀、依仰執達如件、

永和元年十二月十二日　　武藏守(花押)

上椙左近(憲榮)大夫將監殿

○憲榮、長尾景春ニ令シテ、是地ヲ安國寺雜掌ニ交付セシムルコト、天授二年九月二日ノ條ニ見ユ、

天授二年丙辰　紀元二千三十六年　北朝永和二年

六月　小盡　甲申朔

十八日、辛丑、越後加治四郎、名闕、援ヲ陸奥會津熊野新宮社人ニ請ヒテ、兵ヲ擧グ、北黨和田茂實之ヲ禦グ、是日、守護代長尾高景、之ヲ犒フ、

〔讀史堂古文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

其後久不申承候、于今背本意存候、

抑加地近江四郎馮會津新宮、打出候由聞候、雖不始事、其方諸事御一人、御心勞之由承候、隨而親衞(上杉憲榮)モ悅喜被申候、何樣依國之體、可罷下候、其時懸御目、此間之義可申承候、雖無于今事候、評有之(マヽ)時者、相構可承候、飛脚候間、不能委細、萬事期後信候、恐々謹言、

六月十八日(天授二年)　　高景(長尾)花押

南朝天授二年　北朝永和二年六月十八日

謹上　和田下野守殿（茂實）

〔参考〕

長尾氏系圖

〔長尾系圖〕○上杉伯爵家本

景政　鎌倉權五郎、

景經　鎌倉權太郎、

景弘　長尾次郎、住相模國鎌倉郡長尾郷、

定景　長尾新六、

胤景　六郎、

景基　新左衛門尉、

景能　新五郎、

景爲　新五郎、

景恒　彈正左衛門尉、豐前守、越後府中長尾祖、

越後府中長尾ノ祖

高景足利直義ニ屬シテ上野ヲ守ル上杉房方ノ執事ト爲ル

高景

孫六、筑前守、正慶元年生、到此時、信州大井原安堵、于時二十歳、觀應二年十月、足利尊氏東征到駿州薩埵山、直義圍之、孫六高景、同氏平三相共卒三百騎、屬于直義、固上野警衛、他日迎上杉憲方二男龍命丸於越後、爲主、使居頸城郡府内城、按、今高田郷、稱民部太輔房方、爲高景執事職、住鉢カ峰城、後號春日山、○下略、全文ハ元中六年二月二十八日、高景戰死ノ條ニ見ユ、

閏七月小盡　癸未朔

十日、壬辰、越後守護上杉憲榮、長尾彈正左衛門尉名闕ク、ニ令シテ、加地時秀法師跡ヲ、相模圓覺寺雜掌ニ渡付セシム、

〔圓覺寺文書〕○相模

越後國加地（北蒲原郡）庄内、佐々木（加地）備前々司時秀法師跡事、任御寄進狀並御奉書之旨、可被沙汰付圓覺寺雜掌之狀、如件、

永和二年壬（閏）七月十日　　散位花押（上杉憲榮）

長尾彈正左衛門尉殿

南朝天授二年　北朝永和二年閏七月十日

○幕府、圓覺寺領加治莊地頭職ノ諸役ヲ免ズルコト、天授四年四月二十一日ノ條ニ見ユ、

九月大盡　壬午朔

二日、癸未、憲榮、長尾景春ニ令シテ、鵜川莊内安田條上方ヲ丹波安國寺雜掌ニ渡付セシム、尋デ、幕府、憲榮ヲシテ、毛利憲廣ノ是地ヲ支障スルヲ停メ、更ニ寺家雜掌ニ渡付セシム、

〔安國寺文書〕○丹波

憲榮奉書

丹波國安國寺雜掌申、越後國鵜川庄（刈羽郡）内安田條上方事、度々被成御教書處、未事行之條、不可然、早任被仰下之旨、可被渡付下地於寺家雜掌之狀、如件、

永和二年九月二日　　（上杉憲榮）散位花押

長尾景春

長尾（景春）豐前入道殿

長尾景春注進狀

丹波國安國寺領、越後國鵜河庄（刈羽郡）内安田上方事、任被仰下之旨、莅彼所、欲沙汰付下地於寺家雜掌候之處、稱當知行、毛利宮内少輔（憲廣）入道道幸支申候、若此條僞申候者、八幡大菩薩御罰ヲ可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

永和三年五月十三日　　（長尾景春）沙彌道繼判

進上　御奉行所

細川頼之奉書

丹波國安國寺雜掌申、越後國鵜河庄内安田條上方事、如注進狀者、毛利宮内少輔入道支申云々、甚以無其謂、早任先度被仰之旨、不日可被沙汰付寺家雜掌、更不可有遲怠之狀、依仰執達如件、

永和三年七月廿二日　　（細川頼之）武藏守花押

上杉左近大夫（憲榮）將監殿

打渡狀

丹波國安國寺雜掌申、越後國鵜河庄内安田條上方事、度々被仰之處、毛利宮内少輔入道支申云々、甚不可然、早可被打渡下地於寺家雜掌之狀、如件、

永和三年八月九日　　（上杉憲榮）散位花押

長尾（景春）豐前入道殿

景春注進狀

丹波國安國寺領越後國鵜河庄安田條内上方事、任重御奉書并御施行之旨、欲沙汰付

下地於寺家雜掌候之處、毛利宮内少輔入道幸猶以支申候、可爲何樣候哉、若此條僞申候者、八幡大菩薩御罰ヲ可罷蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

永和三年十二月廿六日　　沙彌道繼（裏判アリ）

進上　御奉行所

憲榮注進狀

丹波國安國寺雜掌申、越後國鵜河庄安田條内上方事、任御奉書旨、欲沙汰付寺家雜掌候之處、毛利宮内少輔入道々幸支申候、可爲何樣候哉、仍代官道繼注進狀謹進上之仕候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

永和四年三月二日　　左近將監（上杉憲榮）（花押）

進上　御奉行所

○憲廣、其所領鵜川莊安田條ヲ子朝廣ニ讓ルコト、文中三年四月二十七日ノ條ニ、又幕府、是地ヲ丹波安國寺ニ寄進セシムルコト、天授元年九月六日ノ條ニ、又幕府、鵜川莊ヲ上杉滿朝ニ沙汰セシムルコト、天授四年七月二日ノ條ニ見ユ、

天授三年丁巳（紀元二千三十七年　北朝永和三年）

是歳、越後清泉寺鐘ヲ鑄造シ、相模鎌倉報恩寺住持周信（義堂）銘ヲ作ル、

〔空華集〕二十銘　越後州祝融山清泉禪寺鐘銘、

鐘觀、於日本永和三年、既成、本寺住持足翁充公長老、遣其徒充昂、來相陽、請於報恩義堂叟、爲之銘、銘曰、

猗歟大器、衆力攸成、厥制惟度、其模孔宏、祝融奔走、鳥氏經營、由人心感、發響鏗訇、不窕不纖、廼和廼平、非侈非儉、惟精惟明、越山日莫、深澤霜清、彌億萬歲、永振其聲、

天授四年戊午（紀元二千三十八年　北朝永和四年）

四月小（盡）　癸卯（朔）

二十一日、癸亥、幕府、相模圓覺寺領越後加地莊地頭職ノ諸役ヲ免除ス、

〔圓覺寺文書〕○相模（北蒲原郡）

圓覺寺領、越後國加地庄地頭職諸役免除事、就被下官符宣、御奉書如此、可被存知其旨之狀如件、

永和四年四月二十一日　　散位（花押）（上杉憲榮）

○憲榮、加治庄内加地時秀跡ヲ圓覺寺雜掌ニ渡付セシムルコト、天授二年閏七月十日ノ條ニ見ユ、

七月大（盡）　辛未（朔）

一日、壬申、幕府、憲榮ヲシテ、毛利憲廣ノ所領鵜川莊ヲ、上杉滿朝ニ給セシム、

〔上杉文書〕六　○羽前

上椙三郎滿朝申候、越後國鵜河庄事、就注進狀、其沙汰訖、且重申狀如此、子細見狀、毛利宮内少輔（憲廣）入道去延文五年帶御下文之由雖申之、不出對正文上、不帶施行之間、所有不審也、然早任先度御教書旨、止彼輩妨、沙汰付于滿朝代、可被（マヽ）雖申子細之狀、依仰執達如件、

永和四年七月二日　　（細川頼之）武藏守（花押）

上椙左近（憲榮）將監殿

○幕府、憲廣ノ鵜川莊ノ地ヲ支障スルヲ停ムルコト、天授二年九月二日ノ條ニ、又是地ヲ收メテ丹波安國寺ニ還付セシムルコト、元中六年十月二十二日ノ條ニ見ユ、

八月　大辛丑盡　辛丑朔

一日、辛丑、金藏月山、勸化ニ應ジテ、越後浦佐毘沙門天王ニ米錢ヲ施入ス、

〔浦佐普光寺文書〕○越後

（包紙）「永和三年勸進狀　金藏樣」

敬白　浦佐毘沙門天王

奉加　勸進

七十四貫百文

八石三斗二升

右八月憑日奉施入之狀如件、

永和四年戊午八月一日辛丑憑日　　國□金藏月山

天授六年庚申紀元二千四十年　北朝康曆二年

四月　大辛酉朔盡

八日、戊辰、幕府、上杉房方ヲシテ、越後妻有莊ヲ上杉憲方ニ渡付セシム、

〔上椙古文書〕一　○羽前

斯波義將奉書

越後國妻有（中魚沼郡）庄事、任御下文、可被沙汰付上杉安房（房方）入道々合（憲方）代之狀、依仰執達如件、

康曆二年四月八日　　左衛門佐（斯波義將）在判

上杉龍（房方）命殿

〔參考〕

〔諸家系圖纂〕十五上　深谷上杉

系圖

憲顯

憲房

憲方
房方

〔憲藤――朝房 彈正少弼、
憲方 安房守、元右京亮、法名道合、
憲孝
房方
越州守護、民部太輔、朝房養子、法名常越、應永廿八辛丑十一十逝、五十五、

〔諸家系圖纂〕十五上 山内系圖　憲顯――
憲將
憲能
憲英
憲春
憲方
憲賢 越後二郎、此跡朝房相續、
憲榮
憲榮
左近將監、童名龍樹丸、憲堅〇憲將弟、八郎早世、之跡相續、十八歳遁世、

房方
童名龍命丸、民部太輔、實安房守憲方二男、父憲榮遁世時、家老長尾筑前守高景、自越後赴鎌倉、爲主、歸越州、令繼跡朝房、
六月 小盡 庚申 朔
二日、辛申、幕府、本間直泰ヲシテ、亡父有泰ノ讓狀ニ任セ、佐渡宮浦保・新宮保等ノ地頭職ヲ安堵セシム、
〔佐渡志〕官員
判
下本間加賀四郎（次イ）兵衛尉直泰、可令早領知佐渡國宮浦（二イ）保寺田半分、新宮保三分（西方イ）貳、久知郷三分二地頭職事、
右任亡父有泰應安二年六月十日讓狀、可領掌之狀如件、
康暦二年六月二日
〔參考〕
〔佐渡本間系圖〕 貞泰 左衛門尉、久知郷地頭、

兼泰　又左衛門尉、

有泰　四郎兵衛尉、久知領主、

直泰　加賀四郎兵衛尉、應安二年六月、父讓領二宮浦保寺田・新宮保・久知郷一、

二十八日、乙亥、義滿、越後安田條地頭職ヲ、毛利憲朝ニ安堵セシム、

〔毛利安田文書〕○羽前（義滿）（花押）

下　毛利修理亮憲朝、

可レ令二早領一知越後國鵜（刈羽郡）河庄内安田條地頭職一事、

右任二亡父毛利宮内少輔（憲廣）法師、法名道幸、去應安七年四月廿七日讓狀一、可レ令二領掌一之狀如レ件、

康暦二年六月廿八日

○毛利憲廣、安田條地頭職ヲ子憲朝ニ讓ルコト、文中三年四月二十七日ノ條ニ見ユ、

十一月　大盡　戊子　朔

十五日、壬寅、資明、姓闕ク、隨心院門跡領越後白鳥莊上野郷預所職ト爲リテ、請文ヲ捧グ、

〔隨心院文書〕○坤山城

資明上野郷預所職ヲ繼ク

越後國白鳥庄（三島郡）内上野郷預所職、任二譜代之由緒一、被二仰付一之條畏存候、隨而有レ限御年貢並恒例臨時御公事已下、毎年無二懈怠一、可レ致二其沙汰一、若寄（緯）二於左右一、成二本所於敵對一、於レ有二不法之儀一者、不日可レ被レ改二所務職一、其時更不レ可レ申二子細一（マヽ）、乙一奉之上、不レ可レ背二本所御下知一候、仍請文如レ件、

康暦二年庚申十一月十五日　左衛門權少尉資明（花押）

弘和元年辛酉　紀元二千四十一年　北朝永德元年

四月　小盡　丙辰　朔

是月、本間季綱、佐渡蓋見半分地頭職ヲ安堵セラレンコトヲ、幕府ニ請フ、

〔佐渡志〕官員

判

本間九郎左衛門入道々喜（季綱）申所領事、

佐渡國蓋見（二）半分地頭職事、

故御所（足利義詮）被レ下二御判一訖、早欲レ下二給安堵御判一、仍言上如レ件、

南朝弘和元年　北朝永德元年十一月二十一日

永德元年四月　日

〔参考〕

系圖

〔佐渡本間系圖〕泰宣山城兵衞尉、
- 賴秀左衞門尉、
- 季直山城九郎左衞門尉、
  - 季綱九郎左衞門入道々喜、童名虎松、
  - 有直

十一月大盡 壬午朔

二十一日、壬寅、幕府、本間勘解由左衞門名闕ヲシテ、佐渡久知郷三分一、柄積・伊豆保浦・雜太郷等ノ地ヲ安堵セシム、

〔歴代古案〕六

佐渡國久知郷參分一、(江)柄積(井坪)伊豆保浦・雜太郷拾分壹事、

右任相傳當知行之旨、可仰下之狀如件、

永德元年十一月廿一日

本間勘解由左衞門殿

十二月小盡 壬子朔

十四日、乙丑、幕府、畠山播磨入道名闕ヲ、ニ命ジテ、本間泰直ニ佐渡梅津保地頭職ヲ渡付セシム、

〔本間文書〕○佐渡

澁谷平三跡

本間太郎左衞門尉泰直申、佐渡國梅津保付浦河浦澁谷平三跡、地頭職事、重預訴訟副書一具如此、子細見狀、就請文、其沙汰訖、所詮貞治以來、度々雖被仰、不出帶證跡云々、不日沙汰付下地於泰直代、可被執進請取、更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

永德元年十二月十四日

畠山播磨(義深カ)入道殿

左衞門佐(斯波義將)(花押)

〔参考〕

系圖

〔佐渡本間系圖〕賴秀左衞門尉、
- 賴泰山城三郎兵衞尉、定一、
- 泰直太郎左衞門尉、法名源全、

南朝弘和元年　北朝永德元年十二月十四日

二十四日、乙亥、義滿、本間左衞門四郎ヲシテ、佐渡雜太郡・賀茂郡ノ領邑ヲ安堵セシム、

〔佐渡本間系圖〕○諸家系圖纂所收

長木三分一
長畝半分

佐渡國雜太郡內長木三分一、○木村文書、長木三分、關浦壹ニ作ル、賀茂郡內長畝半分事、
右任ニ相傳、當知行之旨、可ニ領掌一之、仍如レ件、
永德元年十二月廿四日
本間左衞門（有重カ）四郎殿
鹿苑院（足利）義滿　判

〔參考〕

〔諸家系圖纂〕十之三　本間略系圖

泰定貞應二正月二日、
賴直弘安九九月五日、
泰宣兵衞太輔、正慶元六月十日、
有直康永二十一月二日、
直冬千代王、左兵衞、延文五二月十日、
有重源全、明德二四月一日、
重直由光、應永五六月十二日、

弘和二年壬戌　紀元二千四十二年　北朝永德二年
正月大辛巳盡朔

十七日、丁酉、幕府、越後守護上杉憲方ニ令シ、諸課役專ラ公平ヲ以テ事ニ從ハシム、

〔上杉古文書〕一○羽前

越後國守護沙汰事、無緩怠、加ニ扶持一、每事可レ被レ存ニ公平之儀一之狀、依レ仰、執達如レ件、
永德二年正月十七日
上杉（憲方）安房入道殿
左衞門佐（斯波義將）在判

南朝長慶天皇　北朝後小松天皇

弘和二年壬戌　紀元二千四十二年　北朝永德二年
六月小己卯盡朔

二十五日、癸卯、上杉憲方、越後安田條地頭毛利憲朝ヲシテ、小加禮井保ノ地ヲ氷室眞興ニ渡付セシム、

〔毛利安田文書〕○前羽

氷室判官眞興申、越後國山東郡（三島郡）小かれい保内、知行分事、無相違候樣、可有沙汰候哉、八（鎌倉八幡宮神役他ニ異ル）幡宮（鎌倉八幡宮）神役異于他候、可令得其意候、謹言、

六月廿五日（弘和二年）　道合（憲方）（花押）

毛利憲朝五郎殿

打渡狀

越後國山東郡内小加禮井村事、

右任先例、氷室判官代下地打渡之處也、仍渡狀如件、

永德二年十一月一日　沙彌（花押）

（小加禮井ノ地ニツキ他ノ輩異議アルベカラズ）

御札旨委細承候了樣、小加禮井村之事、氷室判官方既下地被打渡候上者、自余輩不可異儀申候、不慮殊子細候者、可承候、如此之子細、御使者令申候、兼亦年内不幾候、明春早々參會仕候て、諸事可申承候、恐々謹言、

十二月十九日　道繼（長尾景春）（花押）

安田殿　御返事

「（包紙）こかれゐの事につゐて□□□□よりの狀一、　御返事　安田殿　道繼」

○憲朝ノ系譜、文中三年四月二十七日ノ條ニ、是後氷室榮音、是地ヲ憲朝ニ賣ルコト、元中四年五月二十一日ノ條ニ見ユ、

十一月　小丙午　盡朔

十三日、甲午、藤原清信、源光家等、越後浦佐天王堂造營料トシテ、浦佐保南方内田ヲ寄進ス、

〔普光寺文書〕○越後

奉寄進（南魚沼郡）魚沼郡浦佐保南方内田

貳佰苅　在所號彌大夫作者

右於彼田者、全先例、爲天王堂御造榮（營）之、奉寄進之處也、其志趣者、爲天下安全、國土豐饒、殊者信心施主等、弓箭名德、武運長久之所願成就之故也、仍可預御祈禱之請（精）誠之狀如

件、

永德二年十一月十三日

藤原清信(花押)
源　光　家(花押)
藤原宗重(花押)
賀迦彌秀明(花押)
橘　滿　高(花押)
中原□□(花押)
藤原秀重(花押)
藤原秀春(花押)

南朝後龜山天皇　北朝後小松天皇

弘和三年癸亥　紀元二千四十三年　北朝永德三年

十月小　辛未朔盡

七日、丁丑、義滿、大友親世ヲシテ、相傳ニ任セ、越後紙屋莊等諸國散在ノ所領所職ヲ

堵セシム、

〔大家文書〕四　筑後　○(足利義滿)(花押)

本領新恩所々相副注文、事、任相傳、大友式部丞親世可令領掌之狀如件、

永德三年十月七日

親世當知行國々散在所領所職等事、

相模國大友庄　同國三浦長坂郷

上野國利根庄　越後國紙屋庄(中蒲原郡)○中略

以上

右注文如件、

永德三年七月十八日

○親世ノ兄氏繼、紙屋莊等ヲ安堵セシメラルヽコト、正平十九年七月八日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

紙屋庄

〔大友系圖〕續群書類從百五十

氏時等持院殿賜二諱字一、童名宮松丸、孫三郎、
　　從四位下、刑部大輔、
法名天祐玉安、於二關東一號二吉祥寺一、於二豊後一號二大應寺一、自二氏泰一一家相續、建二
豊後稱名寺一、屬二將軍家一、連年戰功、武名甚多、三月廿一日逝去、

氏續（繼）童名宮松丸、利根孫太郎、
　　從五位下、修理大夫、
號不二庵一、依二爲宮方一、非二家督一、十二月廿七日於二朽綱一卒去、

親世童名千代松丸、從四位下、左馬助、丹後守、式部大輔、修理大夫、
法名勝幡祖高、號二瑞光寺一、自二親父一受二家督一、探題未補之間、親世宜レ致二九州之成敗一之由、有二
鹿苑院義滿將軍之御判一、竭二忠於將軍家一、野戰攻城、其威振二于九國一、應永廿戊戌年二月
十五日逝去、

元中元年甲子　紀元二千四十四年　北朝至德元年　八月小　丁卯朔盡

十七日、癸未、幕府、上杉左馬助ニ命ジ、武藏稱名寺領越後奥山莊金山郷ヲ寺家雜掌
ニ渡付スルコトヲ遵行セシム、

〔武州文書〕八　久良岐郡

金澤稱名寺（武藏）領越後國奥山庄（北蒲原郡）内金山郷事、所レ被レ成二安堵一也、早可レ被レ遵二行寺家雜掌之狀一、依
レ仰執達如レ件、

至德元年八月二十一日　　左衞門佐（斯波義將）（花押）

上杉左馬助殿

十二月

是月、越後善應寺宗雄、大般若經ヲ書寫ス、

〔阿波國〕徵古雜抄〕三　那賀郡鮎川村八幡松尾兩社什物大般若經奥書、

四百五十　執筆越前（後）州三束（山）郡大積之保東方善應寺住呂（侶）宗雄、惡筆雖二無レ極候一、爲二結
緣一之承候（マヽ）間、後恥願、烏之如レ跡之書寫畢、至德元年極月日

元中三年丙寅　紀元二千四十五年　北朝至德三年　七月大　乙卯朔盡

一日、乙卯、上杉憲方、所帶所職ヲ三子憲定ニ讓リ、嗣子ナクバ、之ヲ其兄房方ニ讓ラ
シム、

〔上杉古文書〕一〇、羽前

南朝元中三年　北朝至德三年十月十二日

（上杉憲定公長基大全）上杉安房守憲方公號道合御判紙三通、山内ニ居住明月庵道合天樹ト號ス、」

委細之旨、可ㇾ載ニ置文一、付年號以下爲ニ後證一、所ㇾ加ニ自筆一也、

所帶所職事、所ニ讓與一也、若無ニ子孫者一、房方可ニ知行一之、於ニ文書者一、預ニ置如意庵并白雲庵一候、可ㇾ被ㇾ存ニ其旨一候、謹言、

至德三年七月一日　（上杉憲方）道合（花押）

（憲定）長基殿

十月　大甲申　盡朔

十二日、乙未、和田寒資等、兩親菩提子孫繁榮ノ爲ニ、田地ヲ越後大輪寺塔頭法應庵ニ寄進ス、

〔大輪寺文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

奉ニ寄進一

（北蒲原郡中條町）大輪寺楚山和尚塔頭法應庵田地事、

合百四十刈、東限寺家、南限大道、西限御基堂前路、北限小河、

百四十刈

右爲ニ亡父母頓證菩提一、且爲ニ寒資子孫祈禱一、永代所ㇾ奉ニ寄進一也、誠置ニ文章之詞一、如ニ祖父並亡父先日寄進狀等之語一、一句一言不ㇾ可ㇾ異矣、公方御貢事等、一向所ニ停止一也、仍爲ニ後日末代一、寄進狀如ㇾ件、

至德三年丙十月十二日

石井茂義　石井古世茂義（花押）

尼惠順　比丘尼　惠順（花押）

平　寒資（花押）

○寒資、大輪寺ニ寺領ヲ安堵シ、一族ノ競望ヲ斥クルコト、應永五年閏四月二十日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔平姓〕三浦和田系圖〕　茂資土佐守、

政義彌三郎、土佐守、政資改名也、

寒資土佐守、彌三郎、

元中四年丁卯　紀元二千四十七年　北朝嘉慶元年

四月小辛巳　盡朔

二十五日、乙巳、色部氏長、越後悟了庵ノ所領色部條ノ地ヲ讓受ク、

〔色部文書〕○羽前

南朝元中四年　北朝嘉慶元年四月二十五日

氏長公御代悟了庵之所領相返節請取證文之寫、

（悟了庵）これうあんよりゆつり狀のしよりやうの事、かんなうのしやう（岩船郡加納莊）、いろへのてうのうち、ふくやのしん分三千六百かり（刈）を、うちなかうけとり申ところ、しちなり、きやうにおきゝて、このところのなんしよ御くうしのさた、すこしにてもかへあるまじく候、よつてのちのために、うけとりの狀、くだんのごとし、

至德四年卯月廿五日　　色部（色部）勑領平氏長在判

三千六百刈

二十九日、己酉、和田秀和、兩親菩提ノ爲ニ、越後安養寺ニ田地ヲ寄進シ、大輪寺末寺ト爲ス、

〔大輪寺文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

奉寄進

安養寺田地事、

合千刈者、紙背付別在之、

千刈

右田地者、（和田）秀和が現當二世のため、殊には先考先妣尊靈御菩提をとふらいたてまつらんためなり、但當寺は永可爲大輪寺（北蒲原郡中條町）末寺者也、仍爲後證、寄進狀如件、

至德四年丁卯四月二十九日　　沙彌花押

五月　大庚戌朔盡

二十一日、庚午、氷室榮音、越後小加禮井村ノ地ヲ毛利憲朝ニ讓ル、

〔毛利安田文書〕○羽前

榮音盡朝ト足弟ノ契ヲナス

讓渡

越後國（三島郡）山東郡內小加禮井村者、榮音重代相傳之爲所領之間、毛利修理亮（憲朝）殿與榮音以兄弟契諾之儀、相副支證狀等、永代所讓渡實也、若號榮音子孫、有及異儀之輩者、爲不孝之仁、不可相續榮音之跡者也、仍爲後日讓狀如件、

（イ眞興以下同ジ）

至德四季丁卯五月廿一日　　氷室左近將監榮音（判官眞興イ）（花押）○イハ櫻井市作氏所藏色部文書ニ據ル、以下同ジ、

代錢二十五貫文

賣渡越後國山東郡內小加禮井村者、榮音重代相傳之所領也、然之間依有所用、相副支證狀等、代錢貳拾伍貫文仁限永代所賣渡毛利修理亮（憲朝）殿實也、若於後日不慮之子細有出來事者、以本錢可辨申候也、仍爲後日賣券之狀如件、

（イナシ）

至德四季丁卯五月廿一日　　氷室左近將監榮音（判官眞興イ）（花押）

○上杉憲方、憲朝ヲシテ、小加禮井保ノ地ヲ氷室眞興ニ與ヘシムルコト、弘和二年六月二十五日ノ條ニ見ユ、

七月小　己卯盡　朔

二十九日、丁未、義滿、上杉憲方ヲシテ、憲春遺跡、越後國衙內ノ事等ヲ領掌セシム、

〔上椙古文書〕○一羽前

刑部大輔入道々彌跡、下總國葛西御厨內、上野國所々、越後國々衙內事、上杉安房入道（憲方）
（上杉憲春）　（珍）
（足利義滿）鹿苑院殿御判
御判

々合可令領掌之狀如件、

至德四年七月二十九日

〔參考〕

〔諸家系圖纂〕十五上　山內　上杉　憲顯

系圖

憲將　兵庫助、

能憲　重能養子、號宅間、修理亮、兵部少輔、

憲英　兵部少輔、藏人大夫、陸奥守、

憲春　刑部大輔、氏滿有都御望、雖折檻之、無御承引、因茲康曆元年四月八日自害、法名大澤院高源道珍、（足利）

憲賢　越後次郎、

憲方　右京亮、安房守、

憲榮　號葛見、左近將監、童名龍樹丸、

九月大　戊寅盡　朔

二十日、丁酉、上杉憲方、置文ヲ書シテ、諸子ニ交付ス、

〔上椙古文書〕○一羽前

置文

所帶諸職事、

右爲家督分並庶子分、面々讓與所領之上者、各一心而可致奉公、若此中有背惣領之輩者、惣領可知行彼跡、惣領寄事於左右、不可有煩庶子事、縱雖有數輩子共、於家督者、可立一人、次於後家女子者、可讓與一期分、一期之後者、可付惣領、又有讓余（與）者、雖爲何ヶ所、惣領可致知行、至于不知行所領等者、依時分、致訴訟、同惣領可知行之、敢不可讓與他人、將又國淸寺、報恩寺、明月菴以下所々寺院事、惣領可致外護、若有非法之儀者、可爲不孝第一、及子々孫々、永代可守此置文之狀如件、

協心奉公スベシ

後家女子ニハ一期分ヲ與フ讓餘地ハ惣領知行スベシ

至德四年九月廿日

道合（花押）（上杉憲方）

「上杉(上色)安房守憲方御書　張紙、明月院殿御自筆、」

ちやうきゆつり(長基)二つうのほせ候、きやうへあくとお申候し程に、さきにしたゝめ候しをは、きやうへのほせ候ぬ、しせんのために、をなしやうに、又したゝめて、のほせ候、又二郎入道にもたせて候、あなかしく、

〔参考〕

〔諸家系圖纂〕十五上　山内　上杉　憲顯

系圖

憲方　右京亮、安房守、康暦元己未四月廿日剃髮、康暦二甲年、小山義政退治、賜大將、應永元年十月廿四日死、年六十、法名號明月院天樹道合、(廣也)

憲榮

憲孝　兵庫助、宅間、早世、兵部少輔、能憲(上杉)養子、明德二年九月廿六日卒、二十六、

房方　越州守護、民部大輔、養子、法名常越、應永廿八年辛丑十一月十日逝、年五十五、

憲定　右京亮、安房守、號佐々入道、法名長基、應永十二乙酉八月十七日補管領、號光照寺道、號大全、應永十九年壬辰十二月十八日逝、年三十八、

憲重　住越後、四郎、左京亮、

女子　比丘尼、六浦如意寺長老、

女子　伊豆北條圓城寺長老里正、

○憲方、更ニ諸職所帶ヲ顯房ニ讓ルコト、翌年十二月二十七日ノ條ニ見ユ、

是歲信濃ノ南軍村上中務大輔名闕ク等兵ヲ起ス、北軍市川頼房、二宮式部ニ屬シ、越後糸魚川ニ戰ヒテ、之ヲ破ル、

〔市河文書〕四　○羽前伊佐早謙氏所藏

頼房軍忠狀

二宮興一ニ從ヒ戰フ

市川甲斐守頼房申軍忠事、

右當國信州、凶徒村上中務大輔入道、小笠原信濃入道(長秀)、高梨薩摩守(朝高)、長沼太郎以下輩、至德四、四月廿八日引率數多勢、於善光寺、捧義兵、閏五月廿八日、守護所平芝寄來間、屬二宮余一殿御手、馳向漆田、致合戰了、重二宮式部殿御下向時、越州絲井川(魚)馳參、屬御手、當國常岩、中條、高梨、村上同心輩御退治刻、致忠節、雖然去八月廿七日、於善光寺、横山、依村上馳向、及御合戰間、自身大刀打仕、乘馬被切、若黨難波左衞門二郎打死仕、同左衞門三郎以下輩數十人蒙疵了、就中所々御在陣並至生仁城沒落、胡(マヽ)致忠節條見知上者、賜御證判、爲備後代龜鏡、恐々言上如件、

至德四年九月　日

南朝元中四年　北朝嘉慶元年是歲

承了（花押）

元中五年戊辰　紀元二千四十八年　北朝嘉慶二年

六月大　癸卯朔盡

三十日、癸申、北軍長尾高景、黑川時實ヲシテ、佐渡征討ノ軍ニ加ハラシム、

〔讀史堂古文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

就佐州發向事、先立令申候處、委細御返事承畢、柏崎此四五日罷越候、兼而佐州一國同心候て、かたく船着にてさゝへ候へきよし、其聞候、如何にもさ候はんすらんと存候間、船とも一所より出し候て、同心之船着へもよすへく候、一時二時もさそくあるましく候、船をまちそろへて渡候へし、北方より、ふねにのり候はんする所は、（尼潟）あませ、かつ見（勝見）、三島郡佐州小木へ十八里と申所よりのり候へく候、七月四日吉日候間、船共そろひ候はゝ、わたり候へく候、一時も急度當年作毛を少も城へとり入候はゝ、退治も可延引候、無其儀候はすは、退治もいか程□□□（可心易カ）と覺候、返々船津へ早々御こゑ候へく候、御同心御一族方へも、此段を可有御物語候、其方御拜領のうらより、船をは御用意候て、めさるへく候、返々夜を日につきて御越候へく候也、尚々中々のやうに、ちそくはあるましく候、不可有御油斷候、早々此方へ可有御越候也、毎事期面拜候、恐々謹

七月四日渡海ニ決ス

同心ノ一族ヲ語ハシム

言、

（元中五年）六月卅日　高景（花押）

黑川（時實カ）殿參

○黑川殿未ダ其人ヲ詳ニセズ、天授二年六月十八日ニ收ムル三浦和田系圖ニ據レバ、時實ニ當ルモノヽ如シ、仍テ姑ク之ニ擬ス、

十二月大　辛丑朔盡

二十七日、丁卯、上杉憲方、諸職所帶ヲ顯房ニ讓與ス、

〔上椙古文書〕○羽前

讓與

諸職所帶（註文在ニ別紙一）事、

右諸職所帶者、所讓與顯房也、雖有數輩子、於家督者、可立壹人、若顯房無子者、房方子孫可知行之、自余兄弟等事者、爲惣領計、可致扶持、至于不知行所領等者、依時分、致訴訟、同可知行之、於後家女子者、可讓與一期分、一期之後者、可付惣領、敢不可讓與他人、將又國清寺、報恩寺、明月菴以下所々寺院事、惣領可致外護、若有非法之儀者、可爲不孝第一、及子々孫々、永代可守此旨之狀、如件、

南朝元中五年　北朝嘉慶二年十二月二十七日

顯房子ナケレハ房方ノ子孫知行スベシ

後家女子ニハ一期分ヲ讓ルベシ

嘉慶二年十二月廿七日　（憲方）道合（花押）

○憲方置文ヲ認メテ、所領ヲ諸子ニ交付スルコト、元中四年九月二十日ノ條ニ見ユ、但、上杉系圖及ビ家譜ヲ檢スルニ、憲方ノ子ニ顯房ナシ、後考ヲ俟ツ、

元中六年己巳　紀元二千四十九年　北朝康應元年　小盡辛丑朔

二月

二十八日、戊辰、上杉房方執事長尾高景、佐渡ニ戰死ス、

〔長尾系圖〕上杉伯爵家本

高景　孫六、筑前守、正慶元年生、到ニ此時、信州大井原安堵、于レ時二十歳、觀應二年十月、足利尊氏東征到ニ駿州薩埵山、直義圍レ之、孫六高景、同氏平三相共率ニ三百騎、屬ニ于直義、固ニ上野ニ警衛、他日迎ニ上杉憲方二男龍命丸於越後、爲レ主、使レ居ニ頸城郡府内城、（按、今高田郷、）稱ニ民部太輔房方、爲ニ高景執事職、住ニ鉢（カ）峯城、（後號春日山、）高景之忠義、其聞有ニ大明・朝鮮、既應安元年、相國寺絶海和尚（禪師、應永十二年入ニ大明、）・寂（號）廣照國師、（勇カ）有レ望ニ高景形像、永和二年正月、絶海從ニ大明ニ歸朝、書ニ寫之高景壽像、送ニ大明國、康應元年二月廿八日、於ニ佐渡國ニ戰死、（按、五十八歳乎、）法名貞操院殿景固魯山庵主、（上野雙林寺）葬ニ于同寺、

足利直義ニ屬シテ上野ヲ守ル

高景ノ武勇明國ニ聞ユ

法名

六月　小盡戊戌朔

二十一日、戊午、義滿、毛利入道道依ニ、越後佐橋莊ノ地頭職ヲ安堵セシム、

〔毛利安田文書〕○羽前（足利義滿）（花押）

越後國佐橋庄地頭職事、任ニ相傳毛利大膳大夫入道々依可レ令ニ領掌ニ之狀如レ件、（刈羽郡）

康應元年六月廿一日

十月　大盡丙申朔

二十二日、丁巳、幕府、上杉朝房ニ令シ、毛利憲廣ノ越後鵜河莊ヲ濫妨スルヲ停メテ、丹波安國寺ニ還付セシム、

〔安國寺文書〕○坤丹波

丹波國安國寺雜掌申、越後國鵜河庄（刈羽郡）内、安田條上方事、申狀具書如レ此、毛利宮内少輔（憲廣）入道以下輩濫妨云々、早止ニ彼妨、可レ被ニ沙汰付ニ雜掌ニ之狀、依レ仰執達如レ件、

康應元年十月廿二日　左衛門佐（斯波義將）（花押）

上椙左馬助（朝房）殿

○幕府、上杉憲榮ニ令シテ、憲廣ノ、是地ヲ支障スルヲ停メ、寺家雜掌ニ渡付セシムルコト、天授三年七月二十二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

系圖

〔系圖纂要〕二十八　上杉

- 朝房　母修理大夫重賴女、三郎、左馬助、父討死時、郎從、石川入道覺道扶二兄弟一赴二鎌倉一見二幕府一、朝房十四、朝宗十二、朝房賜二信乃・越後守護一、法名淨元、
- 朝宗　幸若丸　中務少輔、上總介、
- 憲將　兵庫助、彈正少弼、
- 憲榮　左少監、
- 房方　龍命丸、民部少輔、越後守護、

憲房――憲藤　藏人、中務少輔、彈正少弼、

元中七年庚午　紀元二千五十年　北朝明德元年　小盡　辛酉朔

八月

三日、癸亥、佐渡本間直泰、地ヲ同國國分寺ニ寄進ス、

〔佐渡國分寺文書〕○佐渡

奉二寄進一爲二直泰祈禱一、

右爲二天長地久御願圓滿一、殊者雜太□相續地、雜大半分波多鄉（マヽ）蹟河新宮保後尾直泰案堵之御教書御判下給候者、自二五部所一壹町可レ申二寄進一候、直泰子々孫々息災延命繁昌可レ被レ致二御祈禱一精誠一候、仍寄進之狀如レ斯、

明德元年八月三日

權少僧都（都カ）津御坊

本間加賀次郎兵衞尉直泰（花押）

○幕府、直泰ニ、宮浦保・新宮保等地頭職ヲ安堵セシムルコト、天授六年六月二日ノ條ニ見ユ、

元中八年辛未　紀元二千五十一年　北朝明德二年　大盡　乙卯朔

八月

九日、癸亥、義滿、上杉左馬助ヲシテ、其被官人等ノ越後伊井保地頭職ヲ押領スルヲ停メ、田村教政代ニ沙汰セシム、

〔京都帝國大學所藏文書〕

田村能登八郎教政申、越後國伊井保四宮八郎跡、地頭職事、申狀具書如レ此、被官人等押領云々、早止二其妨一、可レ被レ沙二汰付下地教政代一之狀、依レ仰執達如レ件、

明德二年八月九日　　前陸奥守（花押）

上椙左馬助殿

元中九年壬申　紀元二千五十二年　北朝明德三年

四月　大盡　壬子朔

二十二日、癸酉、鎌倉管領上杉憲方罷ム、其子憲孝管領ト爲ル、

〔喜連川判鑑〕　從三位左兵衛督氏滿　明徳三年四月二十二日、安房守（上杉憲方）入道道合所勞ニ依テ、管領職ヲ辭ス、息兵庫助憲孝管領ニ補セラル、八月十七日評定始、

憲孝政道ヲ正シ德化ヲ布ク

〔鎌倉九代記〕二　從二將軍家一賜二出羽・奥州管領御教書一、

〔上略、足利義滿、鎌倉管領足利氏滿ニ出羽・陸奥兩國ヲ管領セシムルコトニ係ル、〕翌（明徳三年）年の夏四月上旬より、安房入道道合所勞あり、執事職を辭退せらる、氏滿（足利）公の仰せによつて、入道の子息上杉兵庫助憲孝を管領職に補せらる、父の入道にも相替らず、政道を正しくおこなはれしかは、大小をの〳〵德澤にうるほひ、上下こと〳〵く仁風を仰ぎけり、

〔鎌倉大草紙〕上　明徳三年四月廿二日、上杉房州道合依二重病一、管領を辭し、子息憲（孝）定名代に被レ補、

十月　小盡　己酉朔

二日、庚戌、幕府、越後國上寺ニ、其所領地ヲ安堵セシム、

〔國上寺文書〕○越後　越後弘國上山寺（西蒲原郡）領安堵之事、

右一寺衆徒等數度之奏狀具讀明悉令二披露一之處、尤驚聞畢、然則且任二先代之由緒一、且依二當時之訴訟一、別紙之表所被二寄附一之條、宜レ有二領掌一者也、仍執達如レ件、

明徳三　壬申年十月二日　　武藏守（細川頼之）在印

進上　越後州國上寺衆徒中

○國上寺開創ノ緣由ハ、神護景雲三年是歳、神融寂スルノ條ニ見ユ、

後小松天皇

明徳四年癸酉　紀元二千五十三年　大盡　甲辰朔

七月

十六日、己未、幕府、越後守護上杉朝房ニ令シテ、小國三河守・白河兵部少輔ガ、越後國衙内蒲原津・五十嵐保ヲ押領スルヲ停メ、上杉憲方ノ代官ニ渡付セシム、

〔上椙古文書〕一○羽前　上杉安房（憲方）入道々合代景實申、越後國衙内蒲原津、並五十嵐保事、小國三川守・白河兵部少輔入道押領云々、早却二彼輩一、可レ被レ沙二汰付于景實一之狀、依レ仰執達如レ件、

憲方代官景實

明徳四年七月十六日

明德四年七月十六日

上杉左馬助(朝房)殿

左衛門佐(斯波義將)在判

○小國氏・白河氏等、蒲原津城等ニ據リテ、抗戰セルコト、建武二年十二月二十三日ノ條、延元二年五月二十日ノ條、興國二年六月一日ノ條、同年九月十四日ノ條、正平八年十一月八日ノ條、等ニ散見ス、今年閏四月五日、神器京都ニ渡御、南北兩朝合一ス、然ルニ越後ニ於テハ、小國・白河二氏ノ如キ、終始一貫南朝ニ孤忠ヲ致シ、猶殘存ヲ保チ、頽運ノ支持ニ盡瘁セルコト、本文書ニ據リテ察スベシ、蒲原津ハ、信濃川・阿賀野川合流ノ海門ニ在リテ、古來漕運ノ要津ナルガ、河道ノ變移アリテ、其位置ニ古今ノ別アリ、現今ノ新潟港ハ、其名ト其地ヲ異ニシテ、其業ヲ繼續セルモノナリ、(西蒲原郡ノ東端ニ在リ、今分レテ市トナル、)蒲原ハ、今沼垂(信濃川ノ東岸、中蒲原郡ニ在リ、今郡ヲ離レテ新潟市ニ入ル、)ノ地ニ近接シテ、聚落ヲナシ、僅ニ其名ヲ存スルモ、又移徙シテ往昔ノ地トハ見ルベカラズ、南北朝時代ノ蒲原津城址ハ明瞭ヲ缺ク、

十一月 大(盡)壬寅朔

二十八日、己巳、上杉憲方、所領ノ安堵狀ヲ失フ、仍リテ、是日、幕府、更ニ越後上田莊三分一、竝ニ千屋郡國衙職等ヲ安堵セシム、

〔上杉文書〕○前(羽)(足利義滿)(花押)

上野國淨法寺土佐入道跡、同國大胡入道跡下野(總)國葛西御厨內壹分、越後國上田庄(南魚沼郡)參分壹、同國千屋郡(魚沼郡)國衙職等、刑部大輔入道(憲春)珍知行分、事、去永德二年十二月廿六日所給安堵紛失云々、而當知行之上者、領掌不可有相違之狀、如件、

明德四年十一月廿八日

上杉安房(憲方)入道殿

應永元年甲戌 小(盡)辛未朔 紀元二千五十四年

二月

二十二日、壬辰、足利義滿、上杉憲方ニ、父憲顯ノ遺領越後上田莊及ビ出羽大泉莊ヲ安堵セシム、

〔上杉古文書〕一羽前○(足利義滿)御判

出羽國大泉庄・越後國上田庄(南魚沼郡)事、亡父民部大夫入道々昌(憲顯)所給、康安元年十月二日御下文紛失云々、而相傳之上者、不可有相違之狀、如件、

應永元年二月二十二日

明德五年二月廿二日
上杉安房(憲方)入道殿

〔參考〕

憲方ノ父母

〔上杉系圖大概〕安房守憲方、(憲顯)桂山四男、母方木戸、○下略

六月大己巳朔盡

二十二日、庚寅、觀佛、姓闕々、其所領佐渡釜屋保及ビ船代ノ地ヲ、其子彌二郎ニ讓ル、

〔佐渡志〕官員

ゆつりわたす、さとの(佐渡)國釜屋ほう(保)三ふん二、ふなしろ(船代)のかみ(上)村、しそくい(子息)や(彌)二郎に、ゆつりわたす事、しち(實)なり、たのさまたけなく、ちきやうすへき狀、如件、

觀佛　判

應永元年六月廿二日

十月大丁卯朔盡

二十四日、庚寅、前鎌倉管領安房守上杉憲方卒シ、其子憲定遺領ヲ嗣グ、

法名法號

〔上杉系圖大概〕安房守憲方、(憲顯)桂山四男、母方木戸、法名道合、宇天樹、明月院殿是也、永應元年甲戌十月廿四日、六十逝去、公初依ニ父命ニ、爲ニ國清(伊豆)開山ニ時者、潛習ニ武藝、終興ニ當家ニ、關東諸陣、頻施ニ勇名ニ、下野州小山義將(政)對治後、久領ニ管領職ニ、關東國郡大治、御子男女五人、山浦京兆在ニ此中ニ、典

子女

概方先祖、四郎憲重、左京亮是也、

〔上杉系圖〕○諸家系圖纂所收　山内憲方　右京亮安房守、康曆元己未四月廿日剃髮、康曆二申年、小山義政退治、賜ニ大將ニ、應永元年十月廿四日死、年六十、法名號ニ明月院天樹道合ニ、

〔鎌倉大日記〕　應永元甲戌十月廿四日、道合死、十一月三日、憲孝職事辭退申、道合一男也、

〔喜連川判鑑〕　從三位左兵衞督氏滿　壬申(明德)三、四月二十二日、安房守入道道合、所勞ニ依テ管領職ヲ辭ス、息兵庫助憲孝管領ニ補セラル、○中略

管領職ヲ辭ス上杉憲孝

甲戌　應永元、十月二十四日、前安房守上杉憲方入道道合卒ス、十二月三日、上杉兵庫助憲孝病ニ依テ管領職ヲ上表ス、

憲定管領ト爲ル

乙酉　十二、十月八日、上杉安房守憲定入道長基、任ニ管領職ニ、

〔上杉古文書〕二○羽前(足利義滿)(花押)

安房守憲方法師法名跡、所領等事、任ニ相傳ニ、上椙右京亮憲定可ニ領掌ニ之狀、如件、

應永二年七月廿四日

系圖

關東管領上椙(山内)(扇谷)兩家及庶流傳○系圖綜覽二所收　憲顯

- 憲將——道可
- 憲賢（越後二郎、觀應二年卯七月五日早世、）
- 能憲
- 憲方（イ本山内）（イ本同）安房守、右京亮、法名道合、道號天樹、號明月院、康暦元己未四月廿剃髮、四月卅任二魯領一）應永元甲戌十月廿四逝、六十歳、
- 憲春（刑部大輔（イ本左近將監）、法名道珍（ヵ）、關東管領、康暦己未（イ本元）四七逝、）
- 憲英
- 憲榮（山號葛見左近將監、京都奉（祇イ）公、狩野庄、如意輪寺霜臺猶子、越州守護職自二桂山一相續之間、憲方爲二猶子一、（イ本房方）ヲ爲養子一遺跡後逝世、道號大遠、於二伊豆一大見、應永二十七壬寅十月廿六日寂、七十三、）
- 憲孝（兵庫助、（イ本兵部少輔）號宅間、能憲猶子、明德三壬申九月廿六逝、二十六歳、）
- 房方（越州守護、○中略）——朝方
- 憲定（（イ本）山内殿、右京亮、安房守、號佐々入道、法名長基、應永十二乙酉八月十七補二（任イ）管領一、○中略）
- 憲重（四郎、住二越後一、左（右イ）京亮）——□□六郎
- 女子（比丘尼、六（三イ）浦如意寺長老、）
- 女子（伊豆北條園城寺長老、）

房方

憲定

憲重越後ニ在リ

應永二年乙亥

紀元二千五十五年

三月 小乙未朔盡

十八日、壬子、和田寒資、越後大輪寺圓融庵ニ、赤川村ノ寄進地ヲ更ニ安堵セシム、

〔大輪寺文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

重奉寄進

大輪寺禪圓融（北蒲原郡中條町）（マヽ）庵赤川村田地事、

合千伍百苅者 坪付在二別紙一、委細見二先寄進狀一、

右寄進狀之趣、大夫將監禪門法名秀和、幷舍弟前土佐守政義法名秀田、委細其趣被載二寄進狀一之□（間カ）、有二同心評定一、狀領二過被一加二兩判形一畢、然寒資受二父政義（後改爲政資）一、讓二相續一、秀和他界之後、寒資一緣（圓）領二知秀和知行之分一、仍爲二全一後代證據、今重所レ副二別紙寄進狀一也、仍爲二後代龜鑑一、重寄進狀、如レ件、

應永二年乙亥三月十八日　　前土佐守平寒資（和田）（花押）

○寒資、圓融庵ニ、宅地ヲ寄進スルコト、十二年十二月七日ノ條ニ見ユ、

和田入道秀和

和田政義

系圖

〔參考〕

〔平姓三浦和田系圖〕○羽前伊佐早謙氏所藏

「政綱

應永二年三月十八日

土佐守茂助（もちすけ）―政義（さまよし）―秀徹（ひでゆき）
彌三郎、土佐守、政資（まさすけ）改名也、
寒資（ふゆすけ）土佐守、彌三郎、
西上横須賀、

五月小 甲午朔 靈

是月、越後鵜川神社大宮司藤原弘宗、社殿ヲ再建ス、

〔棟札〕○刈羽郡舊蹟志下所收

（中央）奉造替鵜川（刈羽郡高柳村）神社黑姫大明神山中殿、
天下泰平、國土安全、田畠能成、除難專祈者也、
（右）于時應永二乙亥年　越後國三島郡鵜川庄、
黑姫山鎮座　大工高尾村住人喜太郎、
（左）五月大吉　當山大宮司藤原弘宗敬白、

棟札

慶長三年ノ棟札

（中央）黑姫鵜川大明神瑞殿、奉中造黑姫山鎮座、
（右）慶長三戊戌年　大工某々々、木曳某、
（左）四月十五日

（中央字左右）畢竟、神籬、

御島石部神社棟札

〔棟札〕○刈羽郡舊蹟志下所收
刈羽郡石地町御島石部神社所藏

（中央）奉造立（刈羽郡石地町）御島石部神社、二田神社、神殿、瑞舍殿、權之太夫謹而勤之、
（右）四方乃國中仁、大倭日高見之國乎、安國止定奉氐、
下津磐根仁、宮柱太敷立、高天原仁千木高知氐、吾
皇御孫尊乃美頭乃御舍仁仕奉天、天乃御蔭、日乃
（左）御蔭止、隱座天、安國止、平介久所知食牟、
（裏）應永十五歳子十月十七日、越後國三島郡石地村　總產子一同、

御島石部神社佛像

〔佛像〕○刈羽郡舊蹟志下所收
刈羽郡石地町御島石部神社所藏

（背銘）旦那僧　岩見法橋　地頭屋代　禰御前　應永二十三年十一月二十六日、佛師左衞門太郎經吉、筆者
眼覺、

鹿島石部神社懸佛

〔懸佛〕○白河領風土記十九越後國之部五所收
刈羽郡北條村鹿島石部神社所藏

（背銘）千眼觀音菩薩、應永十六己丑六月日、

○鵜川神社慶長三年四月十五日棟札、及ビ刈羽郡內應永年間ノ棟札、佛像銘等、便宜茲ニ合叙ス、

應永三年丙子　紀元二千五十六年

正月小　庚申朔盡

七日、丙寅、越後ノ僧心昭、源翁、岩代示現寺ニ寂ス、

〔日本洞上聯燈錄〕二　總持義山紹碩禪師法嗣

傳記

奥州（岩代）護法山示現寺源翁心昭禪師、越後官族源氏子也、其母初無嗣、乞靈於觀音大士、及誕果風神異常、童五歲辭家、投州之陸（國）上寺、爲童子、十六剃染受具、廣究經論、十九謁義山於總持、機語相契、命居侍司、既而辭到伯州八橋郡、喜其幽邃、居焉、豐後太守藤忠敦（保長氏）、歸仰特篤、未幾化荒墟爲寶坊、號曰金龍山退休寺、時延文丁酉二年也、又行化抵野州、得地五峰山、建泉溪寺、庚子仲秋入院開堂、瓣香歸義山之法恩、應安四年結城府主源直光興造安穩寺、請師爲開山住持、居四年、謝事、命大仙仲公補其處、經行造奥州會津、蕪草卓菴、學徒四至、遂成寶坊、號慶德寺、近里有教院、名慈眼、疊嶂清谿、實是絕境也、師一日徐步遊彼、忽有神人、衣冠都雅、來而謂師曰、我是當山護法之神也、請和尚住此寺、言訖不見、神人又告住持曰、以當山早讓源和尚、可永紹隆佛法、若不然則他時必爲崇矣、住持不敢隨之、日未幾、匝地大震動、堂塔盡燒亡、人皆驚異之、俄州之刺史及士民捨貨財、以助再造之功、凡伽藍所宜有者、一時全備、於是住持與檀越相議、請師尸之、永和元年四月十五日進

國上寺ニ剃染ス

義山ニ謁ス

示現寺ニ住ス

院、改慈眼爲示現、於時野州那須之曠野有毒石、蓋有物馮焉、人畜禽獸、觸者、近者、皆無不斃、飛鳥過空、及石上則跕々墮、其毒靈如是、故時世名曰殺生石、無有過其野者、師一日携杖行敲石、三下曰、汝元來石頭性從何來、靈從何起、又敲三下、石流汗震動、泐然解散、忽有異人、設拜曰、我是此石之靈也、蒙師開示、頓脫苦趣、得生天、言訖而沒、實至德二年八月十三日也、自是名震海內、征夷大將軍義滿源公、重興泉溪殿閣庖廩、撤弊、而更新之、頗增壯麗、丹堊輝煌、照耀林巒、且施那須莊田一千餘石、以資食輪、乃延師再住之、至德上皇（後龜山）敕賜能照法王禪師、洞上宗熾於此席、徒衆常不減半千、既而退歸示現、州之太守捨田園若干頃、以充寺產、應永乙亥（二年）臘月下澣示疾、翌歲正月七日訓徒侶訖、索筆書偈曰、四大假合七十一年、末後端的蹈翻鐵船、壽七十一、臘五十六、塔曰大寂、嗣法十人、謂齡山・大仙・前三・雪庭・大雪・劫外・大菴・雪江・壺天・天海、

殺生石ヲ碎ク

能照法王禪師

七十一歲

法嗣

〔日本洞上聯燈錄〕三　示現源翁心昭禪師法嗣

齡山　下野州泉溪齡山延禪師（○事蹟略ス、）

玄晟　伯州金龍山退休寺壺天玄晟禪師（○事蹟略ス、）

空廣　奥州示現天海空廣禪師（○事蹟略ス、）

熱鹽村

〔新編會津風土記〕六十四　陸奥國耶麻郡之部十五目組　熱鹽村寺院

示現寺　境內二千九百三十三歩、免除地、　村西ニ

アリ、曹洞宗護法山ト號ス、能登國總持寺ノ末山ナリ、緣起ヲ按スルニ、此寺昔ハ眞言ノ道場ニテ、空海ノ建立ナリト云、其時ハ護法ヲ五峯ニ作リ、示現ヲ慈眼ニ作レリ、五峯ハ湯館・高井田・間瀨・高松・護法トテ、五ツノ峯此寺ノ境內ヲ繞レルニ取リ、慈眼ハ千手・觀音ノ像アルニヨリ、慈眼視衆生ノ經文ニ取レリ、永和元年ニ源翁此ニ住シ、今ノ示ニ改メキ、源翁諱ハ能昭、越後國荻村ノ人ナリ、初生レシ時、空中ニ異音アリ、人皆此兒最尊ノ瑞トセリ、幼ウシテ陸上寺ニ入テ沙彌トナル、七歲ニシテ俱舍論ヲ誦シ、十六歲ニテ薙髮シ、十八歲ニテ峨山禪師ニ謁シテ禪門ニ入リ、五位三玄ノ密旨ヲ頓悟セリ、應安元年ニ此地ニ來リ、慶德村慶德寺ヲ開ク、禪餘此境ニ遊テ林巒ノ美ヲ賞ス、時ニ一老翁源翁ノ前ニ至テ拜謝シテ曰、吾ハ此山ノ護法神ナリ、願クハ禪師此ニ住シテ衆ヲ度セヨ、源翁カ曰、此山眞言ノ道場タルコト久シ、何我ヲ容レテ住セシメンヤ、老翁曰、滿山ノ僧徒破戒邪行、靈場ヲ穢スコト久シ、我此輩ヲ驅テ師ヲ招ン、師忘ルルコトナカレト云畢テ其貌見エス、其後此寺回祿シ、山谷震動シ、怪異多カリシニヨリ、密徒畏テ離散シ、殘ル者ナシ、此神約ニヨリ、源翁慶德寺ヨリ來テ此山ノ開山トナル、雲水ノ僧多ク集リ、林昌庵・三光院・東林庵・秀洞庵・則雲庵・琥珀庵・永福寺・格庵・慶昌庵等ノ子院アリ、又山中ノ大木雷火ニ逢テ自ラ燒ルコト三日、其根ヨリ溫泉迸リ出ツ、

荻村ニ生ル

慶德寺ヲ建ツ

時ニ神人ニ託メイフヤウ、我ハ前日ノ老翁ナリ、和尙ノタメニ此溫泉ヲ出シ、大衆ノ沐浴ニ供スト云畢テ神去リヌ、是ヨリ此村ニ溫泉アリ、又源翁曾テ安藝國ニ遊テ嚴島神祠ニ謁ス、乍海波起テ船前マサリシカ、俄ニ風靜リ、龍神波間ニ現シ、源翁ノ前ニ至リ示ヲ請フ、因テ三歸五戒ヲ授ク、龍神水底ニ沒シ、波上ニ黃金ヲ盛レル一盂ヲ浮ム、源翁笑テ曰、我此物ヲ用ルコトナシ、惟吾山鹽ニ乏シ、願クハ神力ヲ以テ鹽ヲ請ン、ト、云畢テ舟ヲ進ム、コレヨリ此山ニ鹽井アリト云、（慶長十六年八月二十一日地震アリテ、溫泉鹽井共ニ絕ヘシカ、問モナク溫泉ハ本ノ如クニ湧出レトモ、鹽井ハ埋レテソノ跡ナシ、）明德元年ニ鎌倉ヨリ、能登國總持寺ノ住僧大徹ニ命シテ、那須野殺生石ヲ加持セシムルニ驗ナシ、應永二年ニ源翁治病ノタメ、那須ノ溫泉ニ至リシカ、人民ノ苦ヲ救ハントテ垂示シテ云、

問、汝元來石頭、呼曰殺生石、靈自何來受業報如此乎、去去自今以後、稱汝作佛性、眞如全體、會那、會那、頌曰、法法塵塵端的底、本來面目未曾藏、現成公案大難事、異類中行任度量、

ト、柱杖ヲ擧テ一下スレハ、毒石碎テ三片トナリ、コレヨリ民ノ患ナシト云、（源翁カ事、諸書ノ載セシト云、說アリ、當寺ノ傳フル所ト大ニ異ナリ、白河郡中寺常在院二世大仙カ、永享元年ニ記スル所ノ行狀ニモ、應安、永和ノ頃ノ人トス、又塔寺スル所、年紀ノ異同アリ、或ハ弘安三年ニ寂セシ、八幡宮長帳明應七年ノ所ニ、源翁百年忌ノコト見ユ、此年ヨリ逆シマニ數レハ、應永五年ニ卒セシニヤ、）今寺料五十石ヲ附ス、末寺二十七箇

寺アリ、○越後名寄ニ、玄翁和尚、蒲原彌彦庄箭矧村ノ産也、即開闢之寺有テ號ニ慈眼寺ト一アリ、

二十三日、壬午、佐渡國分寺別當定意、所領ヲ松王丸ニ讓ル、

〔佐渡國分寺文書〕○佐渡

（讓與カ）
□□

間生人屋敷
觀音寺佛供田

間生人屋敷之事、

右か□の方のまことやし（ふカ）□□□田畠ならひ（竝）（に脫カ）觀音寺佛供田、小松田、木澤河□のおたいらてん、松王丸にゆつり（譲）あたふ（與）ところしちなり（實）、しんる（親類）ひたにん（他人）さまたけ（妨）となす（をカ）へからす、依爲後日讓狀如件、

應永三年正月廿三日　　定意（花押）

○定意、所領ヲ安揆房某ニ讓ルコト、九年四月七日ノ條ニ見ユ、

七月大丙辰朔盡

二十三日、丁丑、幕府、上杉房方ヲシテ、叔父憲春ノ遺領越後國衙領半分、上田莊・五十公野郷内闕所分等ヲ、憲定ノ代官ニ渡付セシム、

〔上杉古文書〕二○羽前越後國々領半分、上田庄、五十公郷内闕所分、同上田庄内三分壹、並國領内所所、道彌跡（南魚沼郡）（頸城郡）（憲春）

斯波義將執達狀

等事、任去年七月廿四日安堵、可被沙汰付上杉安房守憲定代之由所被仰下也、仍執達如件、

應永三年七月廿三日　　沙彌（斯波義將）（花押）

上杉民部大輔殿（房方）

○憲定、憲方ノ遺領ヲ相續セルコト、元年十月二十四日、憲方卒去ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

高源大澤院
憲春自殺ス
常越大江光惠院
越後上杉

〔上杉系圖大概〕　刑部大輔憲春、桂山五男、母方木戸、法名道彌、字高源、大澤院殿是也、鎌倉管領時、氏滿將軍永安寺殿璧山全公、爰有上洛心、頻諫不聽、依事已急、自鹿苑院殿天山顯公（憲顯）（義滿）以内書被示靜謐旨、此公一覽之後、堅閉戸自殺、都鄙得安全、康暦元己未四月七日自殺、民部大輔房方、小曰龍命丸、天樹嫡子、法名常越、字大江、光惠院殿是也、新衞遁世後、越後無讓、長尾筑前守魯山景周自鎌倉乞取此龍命丸、定主人、子孫相續領國、謂之越後上杉殿、御子五人、

系圖

〔兩上杉系圖〕○諸家系圖纂所收

憲榮―左近將監、童名、龍樹丸、憲賢之跡相續、十八歳遁世、義滿公命ニ還俗、再遁世、但馬國月澤會下、到伊豆國大石郷本建ニ如意輪寺、三衣一鉢、應永二十九年十月二十三日卒、行年七十三歳、法名號道久大遠、

應永三年七月二十三日

房方

童名龍命丸、民部大輔、實安房守憲方二男、父憲榮逝世時、家老長尾筑前守高景、自越後赴鎌倉、爲主歸越州、命繼跡朝房、法名大德院大江常越、

八月大丙戌朔盡

十日、乙未、色部氏長、所領越後加納方・色部・岩船幷ニ粟島ノ地頭職ヲ、其子朝長ニ譲ル、

〔色部文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

譲與

越後國加納（岩船郡）方・色部・岩船幷粟島之地頭職之事、

熊童丸惣領職

合田數、坪付、在所名字（別紙在之）、

右於所領者、氏長重代相傳私領也、然を、嫡子熊童丸、惣領として代々具書を相副□譲與之處也、無他妨可知行者也、但恒例臨時御公事、守先例可致其沙汰者也、仍譲之狀如件、

應永三年（丙子ノ誤）つちのとら　八月十日

平氏長（色部）（花押）

〔參考〕

系圖

〔色部系圖〕　長忠――氏長（童名鶴童丸、後孫三郎、法名充忍、）

朝長（童名熊童丸、後遠江守、）　後又三郎、

十一月大乙卯朔盡

十五日、己巳、貞利、（姓闕ク）越後正壽寺ノ寺領寄進狀紛失ニ依リ、更ニ安堵狀ヲ給ス、

原田保

〔善照寺文書〕○越後

越後國苅羽郡原田保正壽寺事、寄進狀應永貳年六月二日依偸盗、（紛下同ジ）分失由ニ候間、重寄進狀候、如元佛□光門徒可有御相續候、若持本寄進狀仁出來候者、於公方、偸盗之罪科可被申行者也、仍爲後日證分失狀如件、

應永三年十一月十五日　貞利（花押）

○藤原爲顯、善照寺ニ寺領ヲ安堵セシムルコト、正平十七年二月九日ノ條ニ見ユ、

應永五年戊寅　紀元二千五十八年

三月小戊申朔盡

五日、壬子、山浦家經、所領越後白河莊ノ内、山浦四ケ條幷ニ豐田莊ノ内西光寺牧目村地頭職ヲ、其養子初犬丸ニ譲ル、

應永三年十一月十五日　五年三月五日

應永五年三月五日

〔讀史堂古文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

譲與

越後國白河庄（北蒲原郡）之内、山浦四ヶ條幷豊田庄（北蒲原郡）之内、西光寺牧目村地頭職事、

養子童名　初犬丸

右所領者、家經重代相傳地也、隨而依〻無一子、任先祖民部大夫行定譲狀ニ、爲水原次男初犬丸養子、代々文書手繼之狀相制（副カ）、譲所實正也、不可有他妨（爲脫カ）、仍後日譲狀如件、

前能登守家經（山浦）（花押）

應永五年三月五日

先祖民部大夫行定

譲與

越後國白河庄之内、山浦四ヶ條幷豊田庄之内、西光寺牧目村地頭職事、

養子童名　初犬丸

右所領者、家經重代相傳地也、隨而依〻無一子、任先祖譲狀ニ、爲水原次男養子、代々文書手繼之狀等相副、譲所實正也、若後初犬丸無子孫者、任先祖民部大夫行定譲狀ニ、水原可爲相續所也、更不可有他妨、爲後日譲狀如件、

山浦前能登守家經（花押）

應永五年三月五日

初犬丸子孫ナキ時ハ水原氏ヲシテ相續セシム

閏四月（小丁未朔盡）

二十日、丙寅、和田寒資、越後大輪寺ニ寺領ヲ安堵シ、一族ノ競望ヲ斥ケシム、

〔和田中條文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

大輪寺於寺家寺領、寒資親類内者等、不可成競望、若背此旨者、可令罪科者也、仍爲後狀如件、

應永五年壬卯月廿日　　土佐守寒資（和田）（花押）

○寒資、地ヲ大輪寺塔頭法應庵ニ寄進セルコト、元中三年十月十二日ノ條ニ見ユ、

應永八年辛巳（紀元二千六十一年）

正月（大盡辛酉朔）

十一日、辛未、幕府、房方ヲ評定衆ト爲ス、是日、評定始ニ列セシム、

〔評定著座次第〕（應永）八年正月十一日、

評定著座

御座御方（足利義持）御所

管領（斯波義將）右金吾、禪、德元

房方去年新加

上杉民部大輔（相模守房定祖父也）房方去年新加

應永五年閏四月二十日　八年正月十一日

應永八年是歲

至同十三年參勤 土岐美濃入道常保子細同前

波多野肥後入道元喜

飯尾肥前入道常健

飯尾美濃入道常廉

御硯問注所

奏事中津次郎（澤ノ誤カ）左衞門尉

孔子

僧長譽ヲ住持ト爲ス

是歲、京都ノ人清野靱負、越後小川莊室屋村ヲ開キ、洞雲寺ヲ建ツ、

〔會津舊事雜考〕四　應永八年辛巳、

京都產清野靱負、來開於小川莊（東蒲原郡）室屋邑、建於一宇、號洞雲寺、令淨侶長譽住焉、

〔新編會津風土記〕百二十五上條組外編越後國蒲原郡室谷村寺院之　洞雲寺　境內東西十一間、南北二十一間半、年貢地、村中ニアリ、柴光山ト號ス、淨土宗津川町新善光寺末山ナリ、應永八年、清野靱負京師ヨリ來リ、此村ヲ開キ、寺ヲ草創シ、天台ノ僧長譽ト云モノヲ請テ開山トス、天正五年、淨家ノ僧南慶住シテヨリ、淨土宗トナル、慶長三年、火災ニカヽリ、堂宇燒失セリ、其年南慶再興シ、畫像ノ彌陀ヲ本尊トシ、客殿ニ安シ、相繼テ今ニ至リシト云、

應永九年壬午　紀元二千六十二年

是春、越後ニ彗星見ハレ、夏大旱、秋大水、冬地震ス、

〔越後野志〕三編年略記　應永九年春、彗星見、夏大旱、秋大水、冬地震、

〔集古文書〕○後鑑百十一所收

彗星出現祈禱

彗星出現祈禱事、殊可被致精誠之狀、如件、

（足利滿兼）判

應永九年二月十三日

正法藏寺長老

四月小甲寅盡朔

七日、庚申、佐渡國分寺別當定意、同寺別當職及ビ所領等ヲ安撰房某ニ讓ル、

〔佐渡國分寺文書〕○佐渡

護與　國分寺別當職之事、

合一（マヽ）

ふか町波多本井

右於國分寺別當職、並供僧面ふか町二反、波多本井新田一町、田屋敷者、無殘所、安撰房定□（誠カ）讓與處實也、可致御祈禱精城申候、仍於致妨輩者、可爲不孝之仁者也、爲後日狀如件、

應永九年是春　四月七日

應永九年卯月七日　　別當眞性坊定意（花押）

○定意、所領ヲ松王丸ニ讓レルコト、三年一月二十三日ノ條ニ見ユ、

六月小　癸丑朔盡

二十六日、戊寅、足利義持、房方ノ京都第ニ遊ブ、

〔兼宣記〕　應永九年六月廿六日、○中略今日、室町殿（足利義持）渡御上椙宿（房方）所云々、直御入管領宿（畠山基國）所、爲御方違、今夜御逗留云々、

御方違

應永十年癸未　紀元二千六十三年

八月大　丙午朔盡

一日、丙午、細川頼氏、其養子佐々木長綱ニ、所領越後白河莊上下條等ヲ讓ル、

〔野田文書〕○紀伊

佐々木三郎盛綱子孫同三郎長綱仁、細河余一頼氏（浪カ）粮人仁なり、遁世仕上は、依有由緒、三郎長綱仁、頼氏相續之本住書雖多有、其内遠江州相良庄、同越後國白河庄（北蒲原郡）上下條、本文書尊氏御下文御判、同中御所（足利義詮）御事かきの御判、同執行等みな〳〵讓渡所佐々木三郎長綱實也本主讓渡上者、雖爲子孫一門其外者、不可有違亂者也、仍爲後日狀如件、

應永十年八月一日　　頼氏（細川）（花押）

頼氏遁世ス

〔參考〕

系圖

〔細川系圖〕

- 和氏（細川）安房守、
  - 清氏　相模守、
    - 左馬助頼和　余一、
      - 二郎　細川
      - 三郎　奥州
    - 頼氏　同余一、
      - 長綱　養子佐々木三郎、

應永十一年甲申　紀元二千六十四年

二月小　癸酉朔盡

二十二日、甲午、兵庫助景實、姓闕、越後普光寺ニ佛供田ヲ寄進ス、

〔浦佐普光寺文書〕○越後

奉寄進、

越後國千屋郡（南魚沼郡）浦佐保普光寺御佛供田之事、

千屋郡

一所蒲澤作貳百苅、

蒲澤

合坪田參百苅者在所

一所扶原田百苅、

扶原田

右爲天長地久、御願圓滿、國中安穩、心中所願皆令滿足之故也、仍寄進之狀如件、

兵庫助景實（花押）

應永十一年二月廿二日

應永十一年二月二十二日

浦佐多門別當御房

六月小盡 辛未朔

是月、某、越後明口明神ニ鰐口ヲ寄進ス、

〔鰐口〕○北魚沼郡川井村河井神社所藏（刻銘）越後國魚沼郡下河河井村、

明口大明神、　應永第十一甲申六月日敬白、

〔參考〕

〔新編會津風土記〕百十九外編越後國魚沼郡之九堀内組川井村神社　明口神社　境内東西一町四十間、南北一町十八間、免除地、

村西一町山麓ニアリ、何ノ頃ノ草創ナルヤ詳ナラス、祭神ハ手力雄命・川合魂命ナリトソ、社家ノ說ニ、延喜式ニ出ル所ノ川合神社ハ此社ナリト云、公領本郡川口村ニモ川合神社ナリト云祠宇アリ、鳥居アリ、又鰐口一口ヲ懸ク、○刻銘前記ニ同シ、

應永十二年乙酉　紀元二千六十五年　小盡 癸亥朔

十二月

七日、己巳、和田寒資、越後大輪寺圓融庵ニ宅地ヲ寄進ス、

〔大輪寺文書〕○羽前伊佐早謙氏所藏

しんきしん、みなみのいやしきの事、

右件のいやしき、ゑんゆう庵（圓融庵）へ、こゝろさしあるによつて、きしん申ところ實なり、しせん（善）のために、かくのことし、よつて爲後日如件、

應永十二年十二月七日　　土佐守寒資（和田）（花押）

○寒資、圓融庵ニ、赤川村ノ地ヲ安堵セシムルコト、二年三月十八日ノ條ニ見ユ、

應永十三年丙戌　紀元二千六十六年　小盡 辛酉朔

四月

二十日、庚辰、足利義滿、鷲尾隆右ノ讓狀ニ依リテ、其子權中納言隆敦ニ、越後佐味莊上下等ノ地ヲ安堵セシム、

〔大友家文書〕四○伯爵立花寛治氏所藏

（足利義滿）判

入道常傑

金山院・法住院並筑後國三潴庄・鰺坂庄、美濃國河崎庄外山村東西、上秋東西、越後國佐味庄（中頸城郡）上下、所々敷地山林等事、任大納言入道常傑（隆右）讓附旨、權中納言隆敦卿領掌不可有相違之狀如件、

應永十三年四月二十日

應永十七年四月二十日

應永十三年四月二十八日

○隆敦ノ子隆遠ニ、佐味莊等ノ所領安堵ノ綸旨ヲ賜フコト、文安四年三月十七日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔諸家傳〕五下　鷲尾

隆右　善勝寺長者　隆右　母　正中元年

應永九年八月廿二日　誕生、

同月日　權大納言七十九歳、

同十一年十一月十七日　出家、

隆敦　隆右卿二男　善勝寺長者　隆敦　母　薨八十一歳、

應永十年十二月廿七日　權中納言、

同十一年十一月十七日　喪父、

同廿四年六月　日　薨、

二十八日、戊子、牛屋長盛、所領越後小泉莊牛屋條ノ地ヲ、其嫡孫鶴童丸ニ讓ル、

〔色部文書〕○越後櫻井市作氏所藏

ゆつりあたる（譲与）所領事、

越後國小泉之庄（岩船郡）うしやの條之（牛屋）所領、ちやくそむ（嫡孫）鶴童丸ゆつりあたふる（譲与）子なからんおいては、他人ニゆつるへからす、仍ゆつりしやう（譲状）如件、

應永十三年卯月廿八日　　平長盛（牛屋）（花押）

十一月　大丁巳朔盡

二十日、丙子、房方、越後吉田保及ビ米宇津ノ地ヲ、山城等持院ニ寄進ス、

〔等持院文書〕○山城

奉寄附　等持院

越後國蒲原郡（西蒲原郡）内吉田保、同郡米宇津（米納津）事

右依有カ者存旨、所奉寄附之狀如件、

應永十三年十一月廿日　　沙彌常越（房方）

常越

越後國蒲原郡内吉田保並同郡米宇津事、

右任上相民部大輔入道常越寄附狀、等持院領掌不可相違之狀如件、

應永十三年十一月廿一日　　（足利義滿）（花押）

足利義滿安堵狀

應永十三年十一月二十日